

の住人。和田孫三郎。此由を聞いて。楠が前に来て申けるは。先日せんじつの合戦かっせんに。負腹まげはらを立て。京みやこより宇都宮うつみやを向候むかひなる。今夜こんや已すでに柱松はしらもとに付つて候まをが。其勢そのいき僅わずかに六七百騎ひゃくしちひゃくきには過あまじと聞きへ候まを。先に隔へだり田高橋たかたかが。五千餘騎ごせんじゆきにて向むかて候まをしをだに。我等われら僅わずかの小勢せうせいにて追散おっさんし候まをし不なか。其上そのかみ今度こんどは。味方かたがた勝かちて大勢おほいきあり。敵たかは機きを失うしなつて小勢せうせいなり。宇都宮うつみや縦たてひ。武勇ぶゆうの達人たつ人成共ひとなり。何程なんぢやうの事ことか候まをべき。今夜こんや逆寄さかよせにして。打散うちちらして捨候すてばやと云いけるを。楠すのぶ暫しばらく思案しあんして云いけるは。合戦かっせんの勝負しょうぶ必かならしも。大勢おほいき小勢せうせいに依より只ただ士卒しその志こころを。一ひとに爲なると。爲なるとあり。されば大敵たかを見ては欺あざむき。小勢せうせいを見ては畏おそれと申事まをなり。先思案まづしあんするに。先度せんどの軍いくさに。大勢おほいき打負うちまけて引退ひきりぞく跡あとへ。宇都宮うつみや一人ひとり。小勢せうせいにて相向あひむかふ志こころ一人ひとりも生いて歸かへらんと。思おもふ者ものよも候まをはじと。其上そのかみ宇都宮うつみやは。坂東ばんとう一の弓矢取ゆみやとり。紀清きせい兩黨りゆうたうの兵へい。元來もとより戰場せんじやうに臨のぞん。命いのちを棄する事こと。塵芥ちんがいよりも猶なほ輕かろくす。其兵そのへい七百餘騎しちひゃくじゆき。志こころを一ひとにし。戦いくさを決けつせば。當手あたての兵へい縦たてひ退ひく心こころなく共とも。大半たいていは必かならず討うつるべし。天下てんかの事こと全く此般このかたの戦いくさに依よべからず。行末はるま遙とほの合戦かっせんに。多おほからぬ御方みかた初度しよどの軍いくさに討うつれなば。後日ごじつの戦いくさに誰たれか力ちからを合あはせよ。良將りやうしやうの戦いくさはまして勝かちと申事まを候まをへば。正成せいせいに於おいては。明日あした能よと。此陣このじんを去さて引退ひきりぞく。敵たかに一面目めんめく有様ありさまに思おもひせ。四五日よひを経て後のち。方々あちこちの峯みねに篝かきを燒やて。一蒸ひとしむす程ほどならば。坂東ばんとう武者むしやの習程ならひなく機勢きせうれて。否々いやくな長居ながいしては悪あしかりなん。一面目めんめくある時とき。誘引いざな返かへさんと云いぬ者は候まをはじ。懸かるも引ひく。折まりよるとは。箇様かたがたの事ことを申まをなり。夜已よに曉あけ天てんに及およべり。敵定てきさだて今は近付ちかづらん。いざいせ給たまへとて。楠すのぶ天王寺てんわうじを立たければ。和田湯淺わだゆあさも諸共もろともに。打連うちつれて不引ひたりける。夜明よあけければ。宇都宮うつみや七百餘騎しちひゃくじゆきの勢いきにて。天王寺てんわうじへ押寄おしよせ。古うつの在家ざいけに火かを懸かけ。時ときの聲こゑを揚あげなれ共とも。敵たかなければ出い合あはす。証たはかりすすらん。此邊あたり。馬うまの足立あしだち悪あして。道狭みちせまき間ま。懸入かけ敵たかに中なを破やられな。後のちを裏うられなと下知げちして。紀清きせい兩黨りゆうたう。馬うまの足あしを添そへ。天王寺てんわうじの。東西とうせいの口くちより懸入かけて。二三度さんじゆど迄懸入かけしければ。敵一人たかひとりも無なして燒捨やかる籬かきりに烟け殘のこり。夜よは若々わがと明あけにけり。宇都宮うつみや戦いくさはざる先に。一勝ひとかちしたる心地こころちして。本堂ほんだうの前まへにて馬うまより下くだり。上宮太子じやうみやうたいしを伏拜ふしをがみ奉たり。是偏ひとへに武力ぶりきの致いたす所に非あらず。只ただ併なり。神明佛しんめいぶつ陀だの擁護ようごに懸かれり。信心しんじんを傾かたむけ。歡喜くわんぎの思おもひをなせり。頓とんて京都きやうとへ早馬はやうまを立て。天王寺てんわうじの敵たかをば。即時そくじに追落おひれ候まをぬと申まをたりければ。兩六波羅りやうりくはらを始はとして。御内外みうち様さまの諸軍勢しよぐんせいに至いたる迄まで。宇都宮うつみやが今度こんどの振舞ふるまい拔群はつぐんなりと。譽ほめぬ人も無なりけり。宇都宮うつみや天王寺てんわうじの敵たかを。輒たやすく追散おっさんしたる心地こころちにて。一面目めんめくは有跡ありあとなれ共とも頓とんて續ついて敵たかの陣じんへ。責入せめん事ことも無勢むせいなれば叶かなはず。又誠またまことの軍一いくさ度もせずして。引返ひかへさん事こともさすがあれば。進退しんたい谷やつたる所に。四五日よひを経て後のち和田楠わだすのぶ和泉河内わいせんがわの野伏のふし共ともを。四五千しよせん人ひと驅集かちあつめて。然しかるべき兵へい二三百騎にさんひゃくき差副さしへ。天王寺てんわうじ邊へんに遠籬とほかきりを不燒たかせける。すはや敵たかこそ打出うちたれと騒動さわどうして。更行ふりゆ儘ままに是こゝを見れば秋篠あきのや。外山とやまの里さと。生駒いこまの嶽たけに見ゆる火かは。

の住人。和田孫三郎。此由を聞いて。楠が前に来て申けるは。先日せんじつの合戦かっせんに。負腹まげはらを立て。京みやこより宇都宮うつみやを向候むかひなる。今夜こんや已すでに柱松はしらもとに付つて候まをが。其勢そのいき僅わずかに六七百騎ひゃくしちひゃくきには過あまじと聞きへ候まを。先に隔へだり田高橋たかたかが。五千餘騎ごせんじゆきにて向むかて候まをしをだに。我等われら僅わずかの小勢せうせいにて追散おっさんし候まをし不なか。其上そのかみ今度こんどは。味方かたがた勝かちて大勢おほいきあり。敵たかは機きを失うしなつて小勢せうせいなり。宇都宮うつみや縦たてひ。武勇ぶゆうの達人たつ人成共ひとなり。何程なんぢやうの事ことか候まをべき。今夜こんや逆寄さかよせにして。打散うちちらして捨候すてばやと云いけるを。楠すのぶ暫しばらく思案しあんして云いけるは。合戦かっせんの勝負しょうぶ必かならしも。大勢おほいき小勢せうせいに依より只ただ士卒しその志こころを。一ひとに爲なると。爲なるとあり。されば大敵たかを見ては欺あざむき。小勢せうせいを見ては畏おそれと申事まをなり。先思案まづしあんするに。先度せんどの軍いくさに。大勢おほいき打負うちまけて引退ひきりぞく跡あとへ。宇都宮うつみや一人ひとり。小勢せうせいにて相向あひむかふ志こころ一人ひとりも生いて歸かへらんと。思おもふ者ものよも候まをはじと。其上そのかみ宇都宮うつみやは。坂東ばんとう一の弓矢取ゆみやとり。紀清きせい兩黨りゆうたうの兵へい。元來もとより戰場せんじやうに臨のぞん。命いのちを棄する事こと。塵芥ちんがいよりも猶なほ輕かろくす。其兵そのへい七百餘騎しちひゃくじゆき。志こころを一ひとにし。戦いくさを決けつせば。當手あたての兵へい縦たてひ退ひく心こころなく共とも。大半たいていは必かならず討うつるべし。天下てんかの事こと全く此般このかたの戦いくさに依よべからず。行末はるま遙とほの合戦かっせんに。多おほからぬ御方みかた初度しよどの軍いくさに討うつれなば。後日ごじつの戦いくさに誰たれか力ちからを合あはせよ。良將りやうしやうの戦いくさはまして勝かちと申事まを候まをへば。正成せいせいに於おいては。明日あした能よと。此陣このじんを去さて引退ひきりぞく。敵たかに一面目めんめく有様ありさまに思おもひせ。四五日よひを経て後のち。方々あちこちの峯みねに篝かきを燒やて。一蒸ひとしむす程ほどならば。坂東ばんとう武者むしやの習程ならひなく機勢きせうれて。否々いやくな長居ながいしては悪あしかりなん。一面目めんめくある時とき。誘引いざな返かへさんと云いぬ者は候まをはじ。懸かるも引ひく。折まりよるとは。箇様かたがたの事ことを申まをなり。夜已よに曉あけ天てんに及およべり。敵定てきさだて今は近付ちかづらん。いざいせ給たまへとて。楠すのぶ天王寺てんわうじを立たければ。和田湯淺わだゆあさも諸共もろともに。打連うちつれて不引ひたりける。夜明よあけければ。宇都宮うつみや七百餘騎しちひゃくじゆきの勢いきにて。天王寺てんわうじへ押寄おしよせ。古うつの在家ざいけに火かを懸かけ。時ときの聲こゑを揚あげなれ共とも。敵たかなければ出い合あはす。証たはかりすすらん。此邊あたり。馬うまの足立あしだち悪あして。道狭みちせまき間ま。懸入かけ敵たかに中なを破やられな。後のちを裏うられなと下知げちして。紀清きせい兩黨りゆうたう。馬うまの足あしを添そへ。天王寺てんわうじの。東西とうせいの口くちより懸入かけて。二三度さんじゆど迄懸入かけしければ。敵一人たかひとりも無なして燒捨やかる籬かきりに烟け殘のこり。夜よは若々わがと明あけにけり。宇都宮うつみや戦いくさはざる先に。一勝ひとかちしたる心地こころちして。本堂ほんだうの前まへにて馬うまより下くだり。上宮太子じやうみやうたいしを伏拜ふしをがみ奉たり。是偏ひとへに武力ぶりきの致いたす所に非あらず。只ただ併なり。神明佛しんめいぶつ陀だの擁護ようごに懸かれり。信心しんじんを傾かたむけ。歡喜くわんぎの思おもひをなせり。頓とんて京都きやうとへ早馬はやうまを立て。天王寺てんわうじの敵たかをば。即時そくじに追落おひれ候まをぬと申まをたりければ。兩六波羅りやうりくはらを始はとして。御内外みうち様さまの諸軍勢しよぐんせいに至いたる迄まで。宇都宮うつみやが今度こんどの振舞ふるまい拔群はつぐんなりと。譽ほめぬ人も無なりけり。宇都宮うつみや天王寺てんわうじの敵たかを。輒たやすく追散おっさんしたる心地こころちにて。一面目めんめくは有跡ありあとなれ共とも頓とんて續ついて敵たかの陣じんへ。責入せめん事ことも無勢むせいなれば叶かなはず。又誠またまことの軍一いくさ度もせずして。引返ひかへさん事こともさすがあれば。進退しんたい谷やつたる所に。四五日よひを経て後のち和田楠わだすのぶ和泉河内わいせんがわの野伏のふし共ともを。四五千しよせん人ひと驅集かちあつめて。然しかるべき兵へい二三百騎にさんひゃくき差副さしへ。天王寺てんわうじ邊へんに遠籬とほかきりを不燒たかせける。すはや敵たかこそ打出うちたれと騒動さわどうして。更行ふりゆ儘ままに是こゝを見れば秋篠あきのや。外山とやまの里さと。生駒いこまの嶽たけに見ゆる火かは。

晴たる夜の星よりも數く。もしは草。敷津の浦。住吉。難波の里に燒篝は。漁舟に燃す漁火の波を燒かど怪しまる。惣て大和。河内。紀伊國に有と有所の。山々浦々に。篝を燒ぬ所は無りける。其勢幾万騎有んと。推量られて。夥しく此の如する事。兩三夜に及び。次第に相近付ば。彌東西南北。四維上下に充滿して。闇夜に晝とかへたり。宇都宮是を見て。敵寄來らば。一軍して。雌雄を一時に決せんと志して。馬の鞍をも息めず。鎧の上帶をも取す待懸たれ共。軍の無して。敵の取まわす勢ひに。勇氣疲れ。武力意で衰引退ばやと思ふ心付けり。斯る所に。紀清兩黨の輩も。我等が僅の小勢にて。此大敵に當らん事は。始終何々と覺候。先日當所の敵を。事故なく追落して候つるを。一面目にして。御上洛候へかすと申ければ。諸人皆此義に同じ。七月廿七日の夜半計に。宇都宮天王寺を引て上洛すれば。翌日早旦に。楠頼て入替たり。誠に宇都宮と楠と相戦ふて。勝負を決せば。兩虎二龍の戦として。何も死を共にすべし。されば互に是を思けるにや。一度は楠引て。謀を千里の外に廻らし。一度は宇都宮退て。名を一戦の後に失はす。これ皆智謀深く慮。遠く良將成し故ありと。譽ぬ人もなかりけり。去程に楠兵衛正成は。天王寺に打出て威猛を顯すとらへ共。民屋に煩をもあさすして。士卒に禮を厚くしける間。近國は申に及ばず。遐壤遠境の人牧迄も是を。聞傳へて我もくと走加りける程に。其勢漸

強大にして。今の京都よりも耐手をさうなく下さるゝ事は。叶ひ難しとぞみへたりける

◎正成天王寺未來記披見の事

元弘三年八月三日。楠兵衛正成。住吉に參詣し。神馬三匹。これを献す。翌日天王寺を詣て。白鞍置たる馬。白輻輪の太刀。鎧一兩副て引進す。是は大盤若經轉讀の御布施あり。啓白事終て宿老の寺僧卷敷を捧て來れり。楠則ち對面して申けるは。正成不肖の身として。此一大事を思立て候事。涯分を計らざるに似たりといへ共。勅命の輕からざる禮義を。存するに由て。身命の危を忘たり。然るに兩度の合戦。聊か勝に乘て。諸國の兵招ざるに馳加れり。是天の時を與へ。佛神擁護の牌を廻らざるかと覺へ候。誠やらん傳へ承れば。上宮太子の。當初百王治天の安危を勘へて。日本一州の未來記を書置せ給て候なり。拜見若苦しからず候は。今の時に當り候はん卷計。一見仕り候ばやと云ければ宿老の寺僧答て云。太子守屋の逆臣を討て。始て此寺を立て。佛法を弘られ候し。後神代より始て。持統天皇の御宇に至る迄を。記されたる書冊卷をば。前代舊事本紀とて。卜部の宿禰是を相傳して。有職の家を立候。其外に又一卷の秘書を留られて候。是は持統天皇以來末世代々の王業。天下の治亂を記されて候。是をば輒く人の。披見する事は候りぬ共。別義を以て竊に見參に入候べしとして。即秘府の銀鑰を開て。金軸の書一卷

を取出せり。正成悦で。即是を披覽するに。不思議の記文一段あり。其文に云

當人王九十五代天下亂而主不安此時東魚來吞四海日没西天三百七十餘箇日西鳥來食東魚其後海內歸一三年如獼猴者掠天下三十餘年大凶變歸一元云々

正成不思議に覺へて。能々思案して此文を考るに。先帝已に。人王の始より。九十五代に當り給へり。天下一度亂れて主安からずと有は。是此時あるべし。東魚來て四海を吞とは。逆臣相摸入道の一類なるべし。西鳥東魚を食と有は。關東を亡す人有べし。日西天に没とは。先帝隱岐國へ移されさせ給ふ事なるべし。三百七十餘日とい。明年の春の比。此君隱岐の國より還幸成て。再帝位に即せ給ふべき事あるべしと。文の心を明らかに勘るに。天下の反覆久しからしと。恐しく覺へければ。金作の太刀一振。此老僧に與へて。此書をば本の秘府に納めさせけり。後に思合るに。正成が勘へたる所。更に一事も違す。是誠に大權聖者の。未代を鑒て。記し置給し事なれ共。文質三統の體變少しも違はざりけるは。不思議なりし識文なり

○赤松入道圓心に大塔宮の令旨を給事

其比播磨の國の住人。村上天皇第七の御子。具平親王六代の苗裔。從三位季房が末孫に。赤松次郎入道圓心とて。弓矢取て無双の勇士あり。元來其心濶如として。人の下風に立ん事を思はざりければ。此時絶たるを繼廢れたるを興して。名を顯し。忠を抽ではやと思けるに。此二三年大塔宮に付纏奉て。吉野十津川の艱難を經ける。圓心が子息。律師則祐令首を捧て來れり。披覽するに。不日に義兵を揚軍勢を卒し。朝敵を誅罰せしむべし。其功有に於て。恩賞宜しく請に依べきの由載られたり。委細の事書十七條の恩裁を添られたり。條々何れも家の面目。世の所望する事なれば。圓心斜ならず悦で。先當國小夜の庄菅繩の山に城を構て。與力の輩を相招く。其威漸く近國に振ひければ。國中の兵共馳集て程なく。其勢一千餘騎に成にけり。只秦の世已に傾かんとせし弊に乗て。楚の陳勝が蒼頭にして。大澤に起りしに異ならず。頓て杉坂山の里一ヶ所に。關を居山陽山陰の兩道を指塞ぐ。是より西國の道止て。國々の勢上落する事を得ざりけり

○關東の大勢上落の事

去程に畿内西國の凶徒。日を追て峰起する由。六波羅より早馬を立て。關東へ注進せらる。相摸入道大に驚て。さらば討手を差遣はせとて。相摸守の一族。其外東八ヶ國の中に。然べき大名共

を催し立て差上さる。先一族には阿曾彈正少弼。名越遠江入道。大佛の前陸奥の守貞直。同き武藏の左近將監。伊具右近大夫將監。陸奥右馬助。外様の人々には。千葉大介。宇都宮三河守。小山の判官。武田伊豆の三郎。小笠原彦五郎。土岐伯耆入道。蘆名判官。三浦若狹の五郎。千田の太郎。城の太宰の大貳入道。佐々木隱岐の前司。同備中守。結城七郎左衛門尉。小田常陸の前司。長崎四郎左衛門尉。同き九郎左衛門尉。長江彌六左衛門尉。長沼駿河守。澁谷遠江守。河越三河入道。工藤次郎左衛門高景。狩野七郎左衛門尉。伊藤常陸の前司。同き大和の入道。安藤藤内左衛門尉。宇佐美攝津前司。二階堂出羽入道。同下野判官。同き常陸介。安保左衛門入道。南部次郎。山城四郎左衛門尉。此等を始として。宗徒の大名百卅二人。都合其勢卅万七千五百餘騎。九月廿日鎌倉を立て。十月八日先陣已に京都に着ば。後陣は未だ足柄箱根に支たり。是のみならず。河野九郎。四國の勢を卒して。大船三百餘艘にて。尼崎より襲て下京に付。厚東入道。大内介。安藝の熊谷。周防長門の兵を引具して。兵船三百餘艘にて。兵庫より襲て。西の京に着。甲斐信濃の源氏。七千餘騎。中山道を経て。東山に着。江馬越前守。淡河右京亮。北陸道七ヶ國の兵を卒して。三万餘騎にて東坂本を経て上京に着。總じて諸國七道の軍勢。我もくと馳上りける間。京白河の家々に居餘り。醍醐。小栗巢。日野。堀。修。藤。神。和。寺。太。泰。の。邊。西。山。北。山。賀。茂。北。野。草。堂。河。崎。清。水。六。角。堂。の。門。の

下。鐘樓の中迄も。軍勢の宿らぬ所は無りけり。日本小國なりといへ共。是程の人の多かりけり。と。始て驚く計なり。去程に元弘三年正月晦日諸國の軍勢。八十万騎を三手に分て。吉野。赤坂。金剛山。三の城へぞ向られける。先吉野へは。二階堂出羽入道道蘆を大將として。熊と他の勢を交へず。二万七千餘騎にて。上道中道下道より三手に成て相向ふ。赤坂へは。阿曾彈正少弼を大將として。其勢八万餘騎。先天王寺住吉に陣を張る。金剛山へは。陸奥の右馬助。搦手の大將として。其勢二十万騎。奈良路よりころ向はれけれ。中にも長崎の悪四郎左衛門尉は。別して侍大將を承つて。大手へ向ひけるが。熊己が勢の程を人に知れんとや思けん。一日引さがりて向ひける。其行装見物の目をぞ驚しける。先旗差。其次に逞き馬に厚總懸て。一様の鎧着たる兵八百餘騎。二町計先立て。馬を靜て打せたり。我身は其次に額綱の鎧直垂に。精好の大目と張せ紫下濃の鎧に。白星の五枚背に。八龍を金にて打て付たるを。猪頸に着せし。銀の磨付の臙當に。金作の太刀二振帶て。一部黒とて。五尺三寸有ける。坂東一の。名馬に鹽干潟の捨小舟を。金具に摺たる鞍を置て。山吹色の厚總懸て三十六。差たる。白磨の銀管の。大中黒の矢に。もと重藤の弓の真中握て。小路を狹しと歩ませたり。片小手に腹當して。諸具足したる中間五百餘人。二行に列を引。馬の前後に隨て。閑に路次を歩みける。其後四五町引さがりて。思ひくりに

鎧たる兵十万余騎。胃の星を輝かし。鎧の袖を重て。沓の子を打たるが如くに道五六里が程支たり。其勢決然として。天地を響かし。山川を動す計なり。此外々様の大。五千騎。三千騎引分く。晝夜十三日迄。引も切で向ひける。我朝は申に及ばず。唐土天竺大元南蠻も。未是程の。大軍を發す事。有難かりし事なりと。思はぬ人こそはなかりけれ

○赤坂合戦の事付人見本間拔懸の事

去程に。赤坂の城へ。向ひける大將。阿曾彈正少弼後陣の勢を待調へんが爲に。天王寺に兩日逗留有て。同二月二日午の刻に矢合有べし。拔懸の輩に於ては。罪科たるべきの由をぞ觸られける。爰に武藏の國の住人に。人見四郎入道恩阿と云者あり。此恩阿本間九郎資貞に向て語りけるは。御方の軍勢雲霞の如くあれば敵陣を責落さん事疑ひなし。但し事の様を案するに。關東天下を治て權を執事已に七代に餘れり。天道盈るを缺理逃るゝ處なし。其上臣として君を流し奉る。積悪。豈果して其身を滅さらんや。某不肖の身ありといへ共。武恩を蒙て。齡已に七旬に餘れり。今日より後差たる思出もなき身の。漫に長生して武運の傾かんを見んも。老後の恨み臨終の障共成ぬべければ。明日の合戦に先懸して。一番に討死して。其名を末代に残さんと存るなり。と語りければ本間九郎。心中には實もと思ながら。枝葉の事を宣ふもの哉。是程打圍の

軍に。漫なる先懸して。討死したる共。差て高名共云れまじ。されば只某は。人並に振舞べきなりと云ければ。人見よにも無興氣にて。本堂の方へ行けるを。本間怪み思ふて。人を付て見せければ。矢立を取出して。石の鳥井に。何事ぞ知す一筆書付て。己が宿所へぞ歸りける。本間九郎されば社此者は。一定明日先懸せられぬと。心ゆるし無りければ。まだ宵より打立て。只一騎東條を指て向ひけり。石川河原にて夜を明すに。霧霧の晴間より。南の方を見ければ。紺の唐綾威の鎧に。白母衣懸て。鹿毛なる馬に乗たる武者一騎赤坂の城へ向ひける。何者やらんと馬打寄て是を見れば。人見四郎入道なりけり。人見本間を見付て云ける。昨夜宣ひし事を。實と思なば。孫程の人に。出拔れあまし物をと。打笑て頻りに馬を早めける。本間跡に付て。今は互に先を争ひ申に及ばず。一所にて戸を晒し。冥土迄も。同道申さんするぞよと云ければ。人見申には及ばんと返事して。跡に成先に成。物語して打けるが。赤坂の城近く成ければ。二人の者共。馬の鼻を双て擲襲り。堀の際迄打寄て。鎧踏張弓杖突て。大音聲を揚て。あよりける。武藏國の住人に。人見四郎入道恩阿。年積て七十三。相摸の國の住人。本間九郎資貞。生年卅七。鎌倉を出しより。軍の先陣を懸て。戸を戰場に晒さん事を存じて相向へり。我と思はん人々は。出合て手あみの程を御覽せよと。聲々に呼て。城を睨で磨たり。城中の者共是をみて。是ぞとよ

坂東武者の風情なり。只是熊谷平山が。一谷の先懸を傳へ聞て羨しく思へる者共なり。跡を見に續く武者もあし。又さまで大名共見へず。溢れ者の不敵武者に跳り合て。命失て何かせん。徒置て。事の様を見よとて。東西鳴を静めて返事もせず。人見腹を立て早且より向て名乗れば。城中より矢の一本も射出さぬは。臆病の至りか。敵を侮るか。いで其義ならば。手柄の程を見せんとて。馬より。飛下て。堀の上成細橋。さらくと走りたり。二人の者共。出し屏の脇に引傍て。木戸を切落さんとしける間。城中是に騒で。土小間櫓の上より。雨の降が如くに射ける矢二人の者共が鎧に。箕毛の如くに不立たりける。本間も人見も。元來打死せんと。思立たる事あれば。何か一足も引べき。命を限りに。二人共に一所にて討れけり。是迄付從ふて最後の予念勸めける聖。二人が首を乞得て天王寺に持て歸り。本間が子息源内兵衛資忠に。始よりの有様を語る。資忠父が首を一目見て。一言をも出さず。只涙に咽であたりけるが。如何思けん。鎧を肩に投懸。馬に鞍置て。只一人打出んとす。聖怪み思て。鎧の袖を引留め。是のそもいか成事にて候。御親父も此合戦に先懸して。只名を天下の人に。知れんと計思召ば。父子共に打連て社向はせ給ふべけれ共。命をば。相撲殿に奉り。恩賞をば子孫の榮花に貽さんと思召ける故にこそ人より先に討死をばし給ふらめ。然るに思ひ籠給へる處もあく。又敵陣に懸入て。父子共に討死し給ひなば。誰か其跡を續。誰か其恩賞を蒙るべき。子孫無窮に榮るを以て。父祖の孝行を呈す道とは申也。御悲歎の餘りに。是非なく死を共にせんと。思召は理りなれ共。暫く止らせ給へど。堅く制しければ。資忠涙を押へて。力あく着たる鎧を脱置たり。聖扱は制止に拘りぬと嬉しく思て。本間が首を小袖に裹。葬禮の爲に側成野邊へ越ける其間に。資忠今は止べき人なければ。則打出て。先上宮太子の御前に参り。今生の榮耀は。今日を限の命なれば。祈る所に非ず。只大悲弘誓の誠あらば。父にて候者の。討死仕候し戦場の。同じ苦の下に埋れて。九品安養の同臺に生る。身とあさせ給へど。泣々祈念を凝して。涙と共に立出けり。石の鳥居を過ると見れば。我父と共に討死しける。人見四郎入道が。書付たる歌あり。是は誠に後の世迄の物語りに。留むべき事よと思ければ。右の小指を食切て。其血を以て一首を側に書添て赤坂の城へぞ向ひける。城近く成ぬる所にて。馬より下。弓を脇に挟で。木戸を叩き。城中の人々に申べき事有と呼りけり。良暫く有て。兵二人櫓の小間より。顔を指出して誰人にて御渡り候やと問ければ。是は今朝此城に向て。打死して候ひつる。本間九郎資貞が嫡子。源内兵衛資忠と申者にて候なり。人の親の子を思ふ哀み。心の闇に迷ふ習にて候間。共に討死せん事を悲しみて。我に知せずして。只一人討死しけるにて候。相伴ふ者なくて。中有の途に迷ふらん。さころと思ひ遣れ候へば。同く討死仕

九十四百

て。なき跡迄父に孝道を盡し候ばやと存じて。只一騎相向て候なり。城の大將に此由を申され候て。木戸を開かれ候へ。父が討死の所にて。同く命を止て。其望みを達し候はんぞ。懇懇に事を請。泪に咽で立たりける。一の木戸を堅めたる兵五十餘人。其志孝行にして。相向ふ所。やさしく哀なるを感じて。則木戸を開き。逆茂木を引のけしかば。資忠馬に打乗。城中へ懸入て。五十餘人の敵と火を散してぞ切合ける。遂に父が討れし跡にて。太刀を口に呀へて覆しに倒て。貫れて社失にけれ。惜いかな。父の資貞は。無双の弓矢取にて。國の爲に要須たり。又子息資忠は。ためしなき忠孝の勇士にて。家の爲に榮名有。人見は年老。傾きぬれ共。義を知て。命を思ふ事。時と共に消息す。此三人同時に討死しぬと聞へければ。知も知ぬも押なへて。歎かぬ人はあかりけり。既に先懸の兵共拔々に赤坂の城へ向ひ。討死する由披露有ければ。大將則ち。天王寺を打立て。馳向ひけるが。上宮太子の御前にて。馬より下り。石の鳥居を見給へば。左の柱に

花咲ぬ老木の櫻朽ぬ共其名の苔の下に隠れじ

と一首の歌を書付て。其次に武藏國の住人。人見四郎恩阿。生年七十三。正慶二年二月二日。赤坂の城へ向て。武恩を報せん爲に。討死仕り候と書たりける。又右の柱を見れば

待とべし子を思闇に迷ふらん六の街の道とるべせん

と書て。相摸の國の住人。本間九郎資貞が嫡子源内兵衛資忠。生年十八歳。正慶二年仲春二日。父が自害を枕にして。同と戰場に。命を止め畢ぬと書たりけり。父子の恩義君臣の忠貞。此二首の歌に顯はれて。骨は化して黄壤一堆の下に。朽ぬれど。名は留て。青雲九天の上に高じ。されば。今に至る迄石碑の上に消殘れる。卅一字を見る人。感涙を流さぬはあかりけり。去程に阿曾彈正少彌。八万餘騎の勢を卒して。赤坂へ押寄。城の四方廿餘町。雲霞の如くに取巻て。先時の聲を不揚たりける。其音山を動し。地を震に蒼涯も忽ちに裂つべし。此城三方の岸高うして。屏風を立たるが如し。南の方計社。平地に續て。堀を廣く深く堀切て。岸の額に。屏を塗り。其上に櫓を搔双べたれば。如何なる大力早能成共。輒く責べき様なき。され共寄手大勢なれば。只侮て楯にはづれ。矢面に進で。堀の中へ走下て。切岸を襲らんとしける所を屏の内より。究竟の射手共。鐵を支て思様に射ける間。軍の度毎に。手負死人五百人。六百人射出されざる時は。無りけり。是をも痛ず。荒手を入かへく。十三日迄責たりける。去共城中少しも弱らず見へけり。爰に播磨國の住人。吉川の八郎と云者。大將の前に來て申ける。此城の跡たらく。力責にし候は。さうさく落べからず候。補此一兩年が間。和泉河内を管領して。若干の兵糧を取入

て候なれば。兵糧もさうなく盡候まじ。情思案を廻し候に。此城三方は。谷深うして地に繼かず。一方は平地にて。しかも山遠く隔れり。されば何くに水有べし共見へぬに。火矢を射れば水弾にて打消候。此比は雨のふる事も候へぬに。是程迄水の澤山に候は。いか様南の山の奥より。地の底に樋を伏。城中へ水を懸入る、かど覺へ候。天晴人夫を集て。山の腰を堀切せて。御覽候へかして申ければ。大將實もとて。人夫を集め。城へ續きたる山の尾を。一文字に堀切て見れば。安の如く。土の底に。二丈餘りの下に。樋を伏て。側に石を疊み。上に真木の瓦を覆て。水を十町餘りの外より懸たりける。此揚水を留られて後。城中に水乏しくきて。軍勢口中の渴忍び難ければ。四五日が程は。草葉に置る朝の露をなめ。夜氣に潤へる地に身を當て。雨を待けれ共雨降ず。寄手是に利を得て。隙なく火矢を射ける間。大手の櫓二つをば焼落しぬ。城中の兵。水を飲で十二日に成ければ。今は精力盡果て防ぐべき方便も無りけり。死たる者は。再び歸る事あし。勝や迎も。死あんする命を。各方の未落ぬ先に打出で。敵と差違へ。思ふ様討死せんと。城の木戸を開て。同時に打出んとしけるを。城の本人。平野將監入道。高橋より走下り。袖を扣て云けるは。暫く楚忽の事なし給ふ。今は是程に力盡咽乾て。疲ぬれば。思ふ敵に相逢ん事有がたし。名もなき人の。中間下部共に。虜れて。恥を晒さん事心憂るべし。情事の様を案するに。芳

野金剛山の城。未相支て勝負を決せず。西國の亂未静まらざるに。今降人に成て出たらん者をば。人に見てらせじとて。討事有べからずと存る也。逆も叶はぬ我等なれば。暫く事を謀て。降人に成。命を全して。時至らん事を待べしと云ば。諸卒皆此義に同じて。其日の討死をば止てけり。去程に次日。軍の最中に平野入道高橋に上て。大將の御方へ申べき子細候。暫く合戦を止て。聞召候へと云ければ。大將澁谷十郎を以て。事の様を尋るに。平野木戸口に出合て。楠和泉河内の兩國を平げて。威を振ひ候ひし刻に。一旦の難を通れんが爲に。心あらず御敵に屬し候き。此子細京都に參じ候て。申入候はんと仕り候處に。已に大勢を以て押掛られ申候間。弓矢取身の習ひにて候へば。一矢仕りたるにて候。其罪科をだに御免有べきにて候は。頸を伸て降人に參るべく候。若叶まじさとの御定にて候は。力なく一矢仕て戸を陣中に晒べきにて候。此様を具に申され候へと云ければ。大將大に喜で。本領安堵の御教書をなし。殊に功あらん者には。則恩賞を申沙汰すべき由。返答して。合戦を止ける。城中に籠所の兵。二百八十二人。明日死なざる命をも知らず。水に渴せる堪がたさに。皆降人に成て出たりける。長崎九郎左衛門尉是を請取て。先降人の法なれば逆。物具太刀刀を奪取。高手小手に禁て。六波羅へぞ渡しける降人の輩此の如くあらば。只討死すべかりける物をと。後悔すれ共甲斐なし。日を経て京都に付しか

ば。六波羅に誠置て。合戦の事始なれば。軍神に祭て。人に見懲させよ。六條河原に引出し。一人も残らず首を刎て懸られたり。是を聞て。吉野金剛山に籠たる兵共も。彌獅子のはがみをして。降人に出んと思ふ者はなかりけり。罪を緩うするは。將の謀也。云事を知らりける。六波羅の成敗を。皆人ごとに押あべて悪かりけりと申せしが。幾程もあうして悉く亡びけること不思議あれ。情は人の爲ならず。餘に奢を極つ。我意に任て振舞ば武運も早く盡にけり。因果の道理を知らば。心有べき事共也。

訂太平記卷之六終

訂太平記卷之七

○吉野城軍の事

元弘三年正月十六日。二階堂出羽入道道温。六万餘騎の勢にて。大塔宮の籠らせ給へる。吉野の城へ押寄る。柴橋河の川淀より。城の方を向上たれば。峯には白旗赤旗錦の旗。深山下風に吹なびかされて。雲か花かと怪まる。麓には。數千の官軍。冑の星を輝かし。鎧の袖を連ねて。錦繡を敷ける地の如し。峯高ふして。道細く。山峻して。苦滑あり。されば幾十萬騎の勢にて責る共。輒く落べしとは見へざりけり。同く十八日の卯刻より。兩陣互に矢合して入替く責戦ふ。官軍は物馴たる案内者共なれば。期の迫り。彼の難所に走散て。攻合開合せ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武者あれば。親子討れ共。願す。主従滅れ共。肩共せず。乗越く。責近づく夜晝七日が間。息をも續せず相戦に。城中の勢三百餘人討れにければ。寄手の勢も。八百餘人討れにけり。況や矢に當り。石に打れ。生死の際を知らざる者は。幾千万と云敷を知らず。血の草芥を染尸は路徑に横れり。され共城の跡少しも弱ねば。寄手の兵多くは退屈してぞ見へたりけり。爰に此山の案内者にて。一方へ向られたりける。吉野の執行岩菊丸。己れが手の者を呼寄て申けるは。東條の大將金澤右馬助殿は。既に赤坂の城を責落して。金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事。

我等案内者たるに由て。一方を承て向ひたる甲斐もなく。責落さで數日を送事社遺恨なれ。情事の様を案るに此城を大手より責ば人のみ討れて落す事有難し。推量するに。城の後の山。金峯山には。嶮を憑で。敵さまで勢を置たる事あらじと覺るを物馴たらんする足輕の兵。六百五十人勝て。歩立になし。夜に紛れて金峯山より忍び入。愛染寶堂の上にて。夜の若々と明はてん時。鯨波を揚よ。城の兵開音に驚て。度を失はん時。大手搦手三方より責上りて。城を追落し。宮を虜奉るべしとぞ下知しけり。さらばとて案内知たる兵。百五十人を勝て其日の暮程より。金峯山へ廻て。岩を傳ひ谷を上るに。案の如く。山の嶮さを憑みけるにや只此彼の梢に旗計を結付置て。防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵共。思ひの儘に忍び入て木の下岩の陰に。弓箭を伏て胃を枕にして。夜の明るを待たりける。相圖の比にも成にければ。大手の寄手五萬餘騎三方より押寄て攻上る吉野の大衆五百餘人。攻口に下合て防戦。寄手も城の内も。互に命を惜まず追上せ追下し火を散してぞ戦たる。斯る所に。金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人。愛染寶堂よりおり下て。在々所々に火を懸て。時の聲を揚たりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎ兼て。或自ら腹を掻切て。猛火の中へ走入て死るも有。或は向ふ敵に引組で。差違へて共に死るも有。思ひく討死をしける程に。大手の堀一重は。死人に埋りて平地に成。去程に搦手の

兵。思ひもよらぬ。勝手の明神の前より押寄て。宮の御座有ける。藏王堂へ打て懸りける間。大塔宮今は遁れぬ所ありと思召切て。赤地の錦の鎧直垂に緋威の鎧の。未己刻計なるを。隙間もかく召れ。龍頭の冑の緒をしめ。三尺五寸の小長刀を。脇に挟み。劣ぬ兵共廿餘人。前後左右に立。敵の驥て扣へたる中へ走懸り東西を拂ひ。南北へ追廻し。黒煙を立て。切て廻らせ給ふに。寄手大勢なりといへ共僅の小勢に切立られ。木葉の風に散が如く。四方の谷へ颯と引。敵引ば宮は藏王堂の大庭に並居させ給て。大幕打揚て。最後の御酒宴有。宮の御鎧に立所の矢七筋御頼先二の御腕。ニヶ所つかれさせ給て。血の流るゝ事瀧の如し。然れ共立たる矢をも抜給はず。流るゝ血をも拭給はず敷皮の上に立ながら。大盃を三度傾させ給へば。小寺相摸。四尺三寸の太刀の鋒に敵の首を刺貫て。宮の御前に畏り。戈鋌劍戟を降事。雷光の如くあり。磐石岩を飛す事。春の雨に相同じ。然りとはいへ共。天帝の身には近づか。修羅かれが爲に破るゝ。はやしを揚て舞たる有様は。漢楚の鴻門に會せし時。楚の項伯と項莊とが。劍を抜て舞しに。樊噲庭に立ながら。惟幕を挑て。項王を睨し勢も斯やと覺る計なり。大手の合戦急なりと覺へて。敵御方の聞聲相交て聞へけるが。實も其戰に。自ら相當る事。多かりけると見へて。村上彦四郎義光鎧に立所の矢十六筋。枯野に残る冬草の風に臥たる如くに折懸て。宮の御前に參て申け

るは。大手の一の木戸。云甲斐なく責破られつる間二の木戸に支て數刻相戦ひ候する所に。御所中の御酒宴の聲冷じく聞へ候つるに付て參て候。敵已にかさに取上て。御方の氣の勞れ候ぬれば。此城にて功を立ん事。今は叶はじと覺へ候。未敵の勢を外所へ廻し候はぬ先に。一方より打破て。一先落て御覺有べしと存候。但し跡に残り留て戦兵無は御所の落させ給ふ者ありと心得て。敵何所く迄も續て追應進せんと覺へ候へば。恐ある事にて候へ共。召れて候錦の御鎧直垂と。御物の具とを下し給て。御諱の字を犯して。敵を欺き。御命に代り進せんと申ければ。宮争でか去事有べき。死なば一所にてこそ。兎も角もあらめと仰られけるを。義光言ばを荒らかにして。斯る淺猿さ御事や候。漢の高祖榮陽に圍まれし時。紀信高祖の眞似をして。楚を欺かんと乞しをば。高祖是を許し給ひ候ひすや。是程に云甲斐なき御所存にて。天下の大事を。思召立ける事こそうたてけれ。はや其御物の具を脱せ給ひ候へと申て。御鎧の上帯を解奉れば。宮實もとや思召けん。御物の具鎧直垂まで脱替さも給ひて我若生たらば。汝が後生を吊ふべし。共に敵の手にかゝらば。冥途迄も同じ岐に伴ふべしと仰られて。御涙を流させ給ひながも。勝手の明神の御前を南へ向て落させ給へば。義光は。二の木戸の高櫓に上り。遙に見送り奉りて。宮の御後影の幽に隔らせ給ひぬるを見て。今はかうと思ひければ。櫓の小間の板を切落して。身をあらはにして。大音聲を

揚て名乗けるは天照大神の御子孫神武天皇より九十五代帝後醍醐天皇第二の皇子。一品兵部卿親王尊仁逆臣の爲に亡され。恨を泉下に報せん爲に。只今自害する有様見置て。汝等が武運忽ちに盡て。腹を切んずる時の。手本にせよと云儘に。鎧を脱て櫓より下へ投落し。錦の鎧直垂の袴計に。練貫の二重小袖を。押膚脱て。白く清氣なる膚に。刀を突立て。左の脇より。右のそば腹迄一文字に掻切て。腸抓で櫓の板に投付。太刀を口に銜へて。うつ伏に成て予臥たりける。大手搦手の寄手是を見せ。すはや大塔宮の御自害有。我先に御首を給らんとて。四方の圍を解て一所に集る。其間に宮は引違へて。天の川へぞ落させ給ひける。南より廻りける。吉野の執行が勢五百餘騎。多年の案内者あれば。道を要りかさに廻りて。打留奉らんと取籠る。村上彦四郎義光が子息。兵衛藏人義隆は。父が自害しつる時。共に腹を切んと。二の木戸の櫓の下迄馳來りたりけるを。父大に諫て。父子の義はさる事なれ共。暫生て。宮の御先途を見果て進せよと。庭訓を残しければ。力なく且くの命を延て宮の御供にぞ候ける。落行道の軍。事已に急にして。討死せずは。宮落させ給はじと覺ければ。義隆只一人ふみ留りて。追てかゝる敵の。馬の諸膝薙では切居平首切ては勿落させ。九折なる細道に。五百餘騎の敵を相受て。半時計ぞ支へたる。義隆節石の如くありといへ共。其身金鐵あらざれば。敵の取巻て射ける矢に。義隆已に十餘箇所の疵を

蒙りてけり。死ぬる迄も猶敵の手に懸らしとや思けん。小竹の一村有ける中へ走入て。腹掻切て死にけり。村上父子が。敵を防ぎ討死しける其間に。宮は虎口に死を御遁れ有て高野山へ下落させ給ける。出羽の入道道蓋は。村上が宮の御真似をして。腹を切たりつるを。眞實と心へて。其首を取て。京都へ上せ。六波羅の實檢にさらすに。ありもあらぬもの、首なりと申ける。獄門に窮までも無くて九原の苔に埋れにけり。道繼は。吉野の城を責落したるは専一の忠戦なれ共。大塔宮を討漏し奉りぬれば。猶安からず思て。馳て高野山へ押寄大塔に陣を取て。宮の御在所を尋求けれ共。一山の衆徒皆心を合て。宮を隠し奉りければ。數日の粉骨かひもなくて。千劔破の城へぞ向ひける。

○千劔破城軍の事

千劔破の城の寄手は。前の勢八十万騎に。又赤坂の勢。吉野の勢馳加て。百万騎に餘りければ。城の四方二三里が間は。見物相摸の場の如く打圍で。尺寸の地をも餘す充滿したり。旌旗の風に翻て靡く氣色の。秋の野の。尾花が末よりも繁く。劔戟の。日に映じて。輝ける有様は。曉の霜の枯草に布るが如くあり。大軍の近づく所に。山勢是が爲に動き。時の聲の震ふ中には。坤軸須臾に擡けたり。此勢にも恐れずして。僅に千人に足ぬ小勢にて。誰を恐み。何をか待共きさに。城中に堪へて防ぎ戰ける。楠が心の程こそ不敵なれ此城東西は谷深く切て。人の上るべき様もなし。南北の金剛山に續て。しかも峯時たり。され共高き二町計にて。廻り一里に足ぬ小城あれば。何程の事か有べきと。寄手是を見侮て。初一兩日の程は。向ひ陣をも取ず。責支度をも用意せず。我先にと城の木戸口の邊迄。かづき連て上りたりける。城中の者共。少しも騒がず静まり歸て高橋の上より。大石を投懸く。楯の板を微塵に打碎て漂ふ所を。差つめく射ける間。四方の坂より轉び落。おち重つて。手を負死を致す者。一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉。軍奉行にて有ければ。手負死人の實檢をしけるに。執筆十二人。夜晝三日が間筆をも置ず注せり。扱ころ今より後は。大將の御許なくして。合戦したらんする輩をば。却て罪科に行はるべしと觸られければ。軍勢暫く軍を止て先己が陣々をぞ構へける。爰に赤坂の大將。金澤右馬助。大佛奥州に向て宣ひけるは前日赤坂を責落しつる事。全く士卒の高名に非ず城中の構を推出して。水を留て候しに由て。敵程さく降参仕り候き。是を以て此城を見候に。是程繼なる山の嶺に用水有べし共覺へ候はず。又畔水あんどを。他所の山より懸べき便りも候はぬに。城中に水草散に有げに見るは。如何様東の山の麓に。流たる溪水を。夜々に汲かど覺て候。哀宗徒の人一兩人に仰付られ候て。此水を汲せぬ様に。御計ひ候へかすと申されければ。兩大將此義然る

べく覺へ候として名越越前守を大將として。其勢三千餘騎を差分て。水の邊に陣を取せ。城より人れり下りぬべき道々に。逆木を引てぞ待かけゝる。楠の元來勇氣智謀相兼たる者ありければ。此城を拵へける。始用水の便りを見るに。五所の秘水とて。壘通る山伏の。秘して汲水。此壘に有て滴る事一夜に五斛計なり。此水何成早にも。ひる事なければ。形のごとく人の口中を溜さん事。相違有まじけれ共。合戦の最中は或は火屋を消ん爲。又咽の乾く事繁ければ。此水計にて不足あるべしとて。大なる木を以て。水船を二三百打せて。水を湛へ置たり。又數百ヶ所作り双べたる。役所の軒に。繼繩を懸て雨降は。雫少しも餘さず。舟に受入。舟の底に赤土を沈めて。水の性を損せぬ様にぞ拵へける。此水を以て縦ひ五六十日雨降す共。堪へつべし。其中に又あどかは雨降事なからんと。了簡しける智慮の程こそ淺らね。されば城よりは強に。此谷水を汲ん共。せざりけるを。水防ける兵共夜毎に機を詰て。今やくと待かけゝるが。始の程こそあれ。後には次第く心に機緩て。此水をば汲ざりけるごととて。用心の跡少し不沙汰にぞ成にける。楠是を見すまして。究竟の射手を揃へて。二三百人夜に紛れて城より下し。まだ東雲の明果ぬに。霞隱れより押寄水邊に攻て居たる者共。二千餘人切伏て。透間もなく切て懸りける間。名越越前守堪へ兼て。本の陣へぞ引れける。寄手數萬の軍勢是を見て渡り合せんと。ひしめけ共。谷を經隔て。尾を隔てたる道あれば。輒く馳合する兵もなし。兎角しける其間に。捨置たる旗大幕なんぞ取持せて。楠が勢靜に城中へぞ引入ける。其翌日城の大手に。三本唐笠の紋書たる旗と。同き紋の幕とを引て。是こそ皆なごや殿より給て候つる御旗にて候へば。御紋付て候間。他人の爲には無用に候。御内の人々はへ御入候て。召れ候へかしと云て同音にぞつと笑ひければ。天下の武士共是を見て。天晴名越殿の不覺やと。口々に云はぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々。此事を聞て。安からぬ事に思はれければ。當手の軍勢共。一人も残らず。城の木戸を枕にして。討死をせよとぞ下知せられける。是に由て彼手の兵五千餘人思ひ切て。討共射れ共用す。乘越く城の逆木一重引破て。切岸の下迄ぞ攻たりけるされ共岸高ふして切立たれば。矢長に思へ共登得ず。只徒に城を睨み。怨を押へて息つぎむたり。此時城の中より。切岸の上に横へて置たる。大木十計切て落し懸たりける間。將基倒をする如く。寄手四五百人壓に討れて死にけり。是に違はんと。しどろに成つて騒ぐ所を。十方の櫓より。指落し。思ふ様に射ける間。五千餘人の兵共。残り少なに討れて。其日の軍は果にけり。誠に志の程は武けれ共。只仕出したる事も無て若干討れにければ。天晴取の上の損かなど。諸人口遊り猶止す。尋常ならぬ合戦の様を見て。寄手も侮りにくくや思けん。今は始の様に勇進で攻んとする者も無けり。長崎四郎左衛門尉。此有様を見て。

べく覺へ候として名越越前守を大將として。其勢三千餘騎を差分て。水の邊に陣を取せ。城より人れり下りぬべき道々に。逆木を引てぞ待かけゝる。楠の元來勇氣智謀相兼たる者ありければ。此城を拵へける。始用水の便りを見るに。五所の秘水とて。壘通る山伏の。秘して汲水。此壘に有て滴る事一夜に五斛計なり。此水何成早にも。ひる事なければ。形のごとく人の口中を溜さん事。相違有まじけれ共。合戦の最中は或は火屋を消ん爲。又咽の乾く事繁ければ。此水計にて不足あるべしとて。大なる木を以て。水船を二三百打せて。水を湛へ置たり。又數百ヶ所作り双べたる。役所の軒に。繼繩を懸て雨降は。雫少しも餘さず。舟に受入。舟の底に赤土を沈めて。水の性を損せぬ様にぞ拵へける。此水を以て縦ひ五六十日雨降す共。堪へつべし。其中に又あどかは雨降事なからんと。了簡しける智慮の程こそ淺らね。されば城よりは強に。此谷水を汲ん共。せざりけるを。水防ける兵共夜毎に機を詰て。今やくと待かけゝるが。始の程こそあれ。後には次第く心に機緩て。此水をば汲ざりけるごととて。用心の跡少し不沙汰にぞ成にける。楠是を見すまして。究竟の射手を揃へて。二三百人夜に紛れて城より下し。まだ東雲の明果ぬに。霞隱れより押寄水邊に攻て居たる者共。二千餘人切伏て。透間もなく切て懸りける間。名越越前守堪へ兼て。本の陣へぞ引れける。寄手數萬の軍勢是を見て渡り合せんと。ひしめけ共。谷を經隔て。尾を隔てたる道あれば。輒く馳合する兵もなし。兎角しける其間に。捨置たる旗大幕なんぞ取持せて。楠が勢靜に城中へぞ引入ける。其翌日城の大手に。三本唐笠の紋書たる旗と。同き紋の幕とを引て。是こそ皆なごや殿より給て候つる御旗にて候へば。御紋付て候間。他人の爲には無用に候。御内の人々はへ御入候て。召れ候へかしと云て同音にぞつと笑ひければ。天下の武士共是を見て。天晴名越殿の不覺やと。口々に云はぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々。此事を聞て。安からぬ事に思はれければ。當手の軍勢共。一人も残らず。城の木戸を枕にして。討死をせよとぞ下知せられける。是に由て彼手の兵五千餘人思ひ切て。討共射れ共用す。乘越く城の逆木一重引破て。切岸の下迄ぞ攻たりけるされ共岸高ふして切立たれば。矢長に思へ共登得ず。只徒に城を睨み。怨を押へて息つぎむたり。此時城の中より。切岸の上に横へて置たる。大木十計切て落し懸たりける間。將基倒をする如く。寄手四五百人壓に討れて死にけり。是に違はんと。しどろに成つて騒ぐ所を。十方の櫓より。指落し。思ふ様に射ける間。五千餘人の兵共。残り少なに討れて。其日の軍は果にけり。誠に志の程は武けれ共。只仕出したる事も無て若干討れにければ。天晴取の上の損かなど。諸人口遊り猶止す。尋常ならぬ合戦の様を見て。寄手も侮りにくくや思けん。今は始の様に勇進で攻んとする者も無けり。長崎四郎左衛門尉。此有様を見て。

此城を力責にする事。人の討るゝ計にて。其功成難し。只取巻で食責にせよと下知して。軍を止られければ。徒然に皆堪兼て。花の下の連歌師共を呼下し。一万句の連歌をど始たりける。其初日の發句をば長崎九郎左衛門尉師宗

ささかかけてかつ色見せよ山櫻

どしたりけるを。腦の匂工藤三郎右衛門尉

嵐や花のかたきなるらん

とぞ付たりける。誠に両句共に。詞の縁巧にして。句の躰は優なれ共。御方をば花にあし。敵を嵐に喻ければ。禁忌ありける表事哉と。後にぞ思ひ知れける。大將の下知に隨て。軍勢皆軍を止ければ。慰む方やなかりけん。或は碁双六を打て日を過し。或は百服の茶褒貶の歌合なんどを。晝夜を明す。是にこそ城中の兵は。中々腦されたる心地して。心を遣方もあかりける。少し程経て後。正成いでさらば又寄手をたばかりて。居眠さまさんどて。芥を以て。人長に人形を三十作て。甲冑を着せ。兵杖を持せて。夜中に。城の麓に立置前に疊楯をつき並へ。其後に勝りたる兵五百を交て。夜の若々と明けける。霧の下より同時に時をどつと作る。四方の寄手時の聲を聞て。すはや城の中より打出たるは。是こそ敵の運の盡る所の死狂よとて。我先にどぞ攻合せ

ける。城の兵兼て巧たる事なれば。矢軍ちとする様にして。大勢相近付て。人形計を木隠れに残し置て。兵は皆次第に。城の上へ引上る。寄手人形を實の兵どと心へて。是を討んと相集る。正成所存の如く。敵をたばかり寄て。大石を四五十。一度にはつと發す。一所に集りたる敵。三百餘人矢庭に打殺され。半死半生の者五百餘人に及べり。軍はて、是を見れば。天晴大剛の者かなど覺て。一足も引ざりつる兵。皆人にはあらで。藁にて作れる人形なり。是を討んと相集て。石に打れ。矢に當て死せるも高名ならず。又是を危て進み得ざりつるも臆病の程顯れて云甲斐あし。只兎にも角にも万人の物笑ひとぞ成にける。是より後は彌合戦を止ける間。諸國の軍勢。只徒に。城を守り上てゐたる計にて。するわざ一つもなかりけり。爰に何なる者か讀たりけん。一首の古歌を翻案して。大將の陣の前にぞ立たりける

餘所はのみ見てや止かん葛城の高まの山の嶺の楠

軍もなく。そゝるに向ひゐたる徒然に。諸大將の陣々に。江口神崎の領城共を呼寄て。様々の遊をさせられける。名越遠江の入道と。同兵庫助と。伯叔甥にて御座けるが。共に一方の大將にて。賣口近く陣を取。役所を並てぞ御座ける。或時遊君の前にて。双六を打れけるが。籙の目を論じて。聊詞の違ひけるにや。伯叔甥二人突違へてぞ死れける。兩人の郎従共。何の意趣も無に。

差違へく。片時が間に。死者二百餘人に及べり。城の中より是をみて。十善の君に敵をなし奉る。天罰に由て。自滅する人々の有様見よとぞ笑ひける。誠に是徒事に非ず。天魔波旬の所行かと覺へて。淺猿かりし珍事なり。同三月四日關東より飛脚到來して。軍を止て。徒に日を送る事然る可らずと下知せられければ。宗徒の大將達評定有て。御方の向陣と。敵の城との際。高く切立たる堀に。橋を渡して。城へ打入んとぞ巧まれる。是が爲に京都より番匠を五百餘人召下五六八九寸の材木を集て。廣さ一丈五尺。長さ廿丈餘りに梯をぞ作らせける。梯已に作り出しければ。大繩を三三千筋付て。車を以て巻立て。城の切岸の上へぞ倒し懸たりける。魯般が雲の梯も。斯やと覺て巧あり。頓て早り雄の兵共。五六千人橋の上を渡り。我先にと前だり。あはや此城只今打落されぬとみへたる所に。楠兼て用意やしたりけん。投松明の先に火を付て橋の上に薪を積るが如くに投集て。水彈を以て。油を瀧の流る様に懸たる間。火橋桁に燃付て溪風炎を吹布たり。恐に渡り懸りたる兵共。前へ進んとすれば。猛火盛に燃て身を焦す。歸らんとすれば後陣の大勢。前の難義をもいはず支たり。そばへ飛をりんとすれば。谷深く巖壁て肝を冷し。如何せんと身を揉で押あふ程に。橋桁中より燃折て谷底へとらと落ければ。數千の兵同時に。猛火の中へ落重て一人も残らず。焼死にけり。其有様偏に八大地獄の罪人の。刀山劍樹

につらぬかれ。猛火鐵湯に身を焦すらんも。斯やと思ひ知れたり。去程に吉野。十津川。宇多内郡の野伏共。大塔宮の命を含で。相集る事七千餘人。此の峯。彼の谷に立隠れて。千劍破の寄手共の往來の道を差塞ぐこれに由て諸國の兵の。兵糧忽ちに盡て。人馬共に疲れければ。轉漕に怵へ兼て。百騎二百騎。引て歸る處を。案内者の野伏共。所々の迫りく待受て。討留ける間。日々夜々に討る者數を知らず。希有にして命計を助るか者は。馬物の具を捨。衣裳を剝取れて裸なれば。或は破たる箆を身に纏て。膚計を隠し。或は草の葉を腰に巻て恥を顯はせり。落人共毎日に引もさらす十方へ逃散。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士共の。重代したる物の具。太刀刀は。皆此時に至て失にけり。名越遠江入道。同兵庫助二人。詮なき口論して。共に死給ぬ。其外の軍勢共。親は討るれば子は鬚を切てうせ。主疵を蒙れば。郎從助て引歸す間。始は八十万騎と聞へしか共。今は纔に十萬餘騎に成にけり

○新田義貞に綸旨を賜事

上野國の住人。新田小太郎義貞と申は。八幡太郎義家。十七代の後胤。源家嫡流の名家あり。然れ共。平氏世を執て。四海皆威に服する折節あれば。力あく關東の催促に從て。金剛山の搦手へぞ向はれける。爰にいか成所存か出來にけん。或時執事船田入道義昌を近付て宣ひけるは。古

へより源平兩家朝家に仕へて。平氏世を亂る時は。源家はを鎮め。源氏上を犯す日は。平家はを治む。義貞不肖なりといへ共。當家の門楣として。譜代弓箭の名を汚せり。然るに今。相摸入道の行跡を見るに。滅亡遠きに非ず。我本國に歸て義兵を擧先朝の宸襟を休め奉らんと存るが。勅命を蒙らばは叶ふまじ。如何して大塔宮の令旨を給て。此素懷を達すべしと問給ひければ。船田入道畏て。大塔宮は此邊の山中に。忍びて御座候なれば。義昌方便を廻して。急で令旨を申出し候べしと。事安げに領掌申て。己が役所へぞ歸りける。其翌日。船田己が若黨を卅餘人。野伏の質に出立せて。夜中に葛城の壘へ上せ。我身は落行勢のまねをして。朝まだきの霧隠れに。追つ返しつ。半時計同士軍をぞまたりける。宇田内郡の野伏共是を見て。御方の野伏ぞと心得力を合せん爲に。他所の壘よりおり合て。近付たりける所を船田が勢の中に取籠て。十一人迄生捕てけり。船田此生捕共を解許して。潜に申けるは今汝等をたばかり。擧取たる事全く誅せん爲に非ず。新田殿本國へ歸て。御旗を擧んとし給ふが。令旨なくては叶ふまじければ。汝等に大塔宮の御座所を。尋問ん爲に召捕つるなり。命惜くば案内者して。此方の使をつれて。宮の御座ある所へ。參れと申ければ。野伏共大に悦て。其御意にて候へり。最安かるべき事にて候此中に一人暫しの暇を給り候へ。令旨を申出して進せ候はんと申て。残り十人をば留置。一人宮の御方へとてぞ參りける。今やくと相待所に。一日有て令旨を捧て來れり。開て是を見るに。令旨にはあらで。繪旨の文章にかゝれたり。其詞に云

被_レ繪_レ言_レ稱_レ敷_レ化_レ理_レ万_レ國_レ者_レ明_レ君_レ德_レ也_レ撥_レ亂_レ鎮_レ四_レ海_レ者_レ武_レ臣_レ節_レ也_レ頃_レ年_レ之_レ際_レ高_レ時_レ法_レ師_レ一_レ類_レ蔑_レ如_レ朝_レ憲_レ恣_レ振_レ逆_レ威_レ積_レ惡_レ之_レ至_レ天_レ誅_レ已_レ顯_レ焉_レ爰_レ爲_レ休_レ累_レ年_レ之_レ宸_レ襟_レ將_レ起_レ一_レ舉_レ之_レ義_レ兵_レ叡_レ感_レ尤_レ深_レ抽_レ賞_レ何_レ淺_レ早_レ運_レ關_レ東_レ征_レ伐_レ策_レ可_レ致_レ天下_レ靜_レ謐_レ之_レ功_レ者_レ繪_レ旨_レ如_レ此_レ仍_レ執_レ達_レ如_レ件_レ

元弘三年二月十一日 左少將

新田小太郎殿

繪旨の文章家の眉目に備つべし繪言なれば。義貞糾めらす悦で。其翌日より虛病して。急ぎ本國へぞ下られける。宗徒の軍をもまつべき勢共は。兎に角くに事を寄て。國々へ歸りぬ。兵糧運送の道絶て。千劔破の寄手。以の外に氣を失へる由聞へければ。又六波羅より。宇都宮をぞ下されける。紀清兩黨千餘騎。寄手に加はつて。未だ氣を屈せざる荒手なれば頼て城の堀の際迄責上て。

夜晝少しも引退かず。十餘日迄ぞ責たりける。此時にぞ堀の際なる鹿垣逆木皆引破られて。城も少し防兼たる跡にぞ見たりける。され共紀清兩黨の者ども。斑足王の身重からざれば。天をも翔りがたし。龍伯公が力を得されば。山をも壁難し。餘りに詮方やあかりけん。面なる兵には軍をさせて。後なる者は手々に鋤鋏を以て。山を堀倒さんとぞ企てける。げにも大手の櫓をば。夜晝三日が間に。念なく堀崩してけり。諸人は是を見て。只始より軍を止て堀べかりける物と後悔して我もくと堀けれども。廻り一里は餘れる大山なれば左右なく堀たをさるべしとは見へざりけり

○赤松蜂起の事

去程に楠が城つよくして京都は無勢なりと聞へしかば。赤松二郎入道圓心。播磨國の苔繩の城より打て出。山陽山陰兩の道を差塞ぎ。山の里梨が原の間に陣を取。爰に備前備中備後安藝周防の勢共。六波羅の催促に依て。上洛しけるが。三石の宿に打集て山の里の勢を追拂て通らんとしけるを。赤松筑前守。舟坂山に支て。宗徒の敵廿餘人を生捕てけり。然れ共赤松是を誅せずして情深く相交りける間。伊東大和二郎其恩を感じて。忽に武家與力の志を變じて。官軍合勢の思をなしければ。先己が館の上ある。三石山に城廓を構へ。頓て熊山へ取上りて義兵を揚たるに。

備前の守護。加治の源二郎左衛門一戦に利を失て兒島をさして落て行く。是より西國の道彌塞て。中國の動乱斜あらず。西國より上洛する勢をば伊東に支させて後は思も無りければ。赤松聽て高田兵庫助が城を責落して。片時も足を休めず。山陽道を指して責上る。路次の軍勢馳加て。程なく七千餘騎に成にけり。此勢にて六波羅を責落さん事は。案の内なれ共。若戦ひ利を失ふ事あらば。引退て。暫く人馬をも休めん爲に。兵庫の北に當て。摩耶と云山寺の有けるに。先城廓を構て。敵を二十里が間につゝめたり

○河野謀叛の事

六波羅には。一方の討手にはと憑されける。宇都宮は。千劍破の城へ向ひつ。西國の勢は。伊東に支へられて上りぬす。今は四國の勢を。摩耶勢へは向ふべしと。評定せられける處に。後の二月四日。伊豫國より早馬を立て。土居の二郎。得能彌三郎宮方に成て。旗をあげ。當國の勢を相付て土佐國へ打越所に。去月十二日。長門の探題上野介時直。兵船三百餘艘にて。當國へ押渡り。星が岡にして合戦を致す處に。長門周防の勢。一戦に討負て。手負死人其數を知らず。利へ時直父子行方を知すと云々。其より後四國の勢。悉く土居得能に屬する間其勢既に六千餘騎。宇多津。今張の溪に船を揃へ。只今責上らんと企候なり。御用心有べしとぞ告たりける

○先帝船上へ臨幸の事

畿内の軍いまだ静からざるに。又四國西國日を追て亂れければ。人の心皆薄氷を履で國の危き事。深淵に臨むがごとし。抑今かくの如く。天下の亂るゝ事は。偏に先帝の宸襟より事興れり。若逆徒差違ふて。奪取奉らんとする事もこそあれ。相搆て能々警固仕るべしと隠岐判官が方へ下知せられければ。判官近國の地頭御家人を催して。日番夜廻り隙もあく宮門を閉て警固し奉る。閏二月下旬は。佐々木富士名判官が番にて。中門の警固にて候けるが。如何思けん。哀此君を取奉て。謀叛を起さばやと思ふ心ぞ付にける。され共申入べき便りもあくて。案じ煩ひける所に。或夜御前より。官女を以て。御盃を下されたり。判官是を給てよき便りなりと思ければ。潜に彼官女を以て申入けるは。上様には未知し召れ候はずや。楠兵衛正成。金剛山に城を構て楯籠り候し處に。東國勢百万餘騎にて上洛し。去ぬる二月の初より責戦ひ候といへ共。城は強ふして。寄手既に引色に成て候。又備前には。伊東大和二郎。三石と申所に城を構て。山陽道を差塞ぎ候。播磨に赤松入道圓心宮の令旨を給つて。攝津國まで賣上り。兵庫の北。摩耶と申所に陣を取て候。其勢已に三千餘騎。京を縮め。地を略して勢ひ近國に振ひ候なり。四國には。河野の一族に。土居二郎。得能彌三郎。御方に參て旗を揚候處に。長門の探題。上野介時直彼に打負て。行方をしらす

落行候し後。四國の勢悉く。土居得能に屬し候間。既に大船を揃へて。是へ御迎ひに參るべし共聞へ候。又先京都を賣べし共披露す。御聖運ひらかるべき時。已に至りぬとこそ覺て候へ。義綱が當番の間に。忍びやかに御出候て千波の濠より御舟に召れ。出雲者伯の間。何れの浦へも。風に任て御船を寄られさりぬべからんする武士を。御憑候て。暫く御待候へ。義綱恐れながら。責進せん爲に罷向ふ跡にて。馳て御方に參り候べしとぞ奏し申ける。官女此由申入ければ。主上猶も彼偽りてや。申らんと思召れける間。義綱が志の程を能々伺御覽んせられん爲に。彼官女を。義綱にぞ下されける。判官は面目身に餘りて覺へける上最愛又甚しかりければ。彌忠烈の志をぞ顯じける。さらば汝先。出雲國へ越て。同心すべき一族を語ひて。御迎ひに進れと仰下されける程に。義綱則出雲へ渡て。鹽冶判官を語ふに。鹽冶いかゞ思けん義綱を追籠置て。隠岐の國へ返さず。主上且くは。義綱を御待有けるが。餘りに事滞りければ。只運に任て御出有んと思召て。或夜の宵の紛れに。三位殿の御局の。御産の事近付たり迎御所を御出有よしにて。主上其御輿に召れ。六條少將忠明朝臣計を召具して。潜に御所をぞ御出有ける。此躰にては。人の怪め申べき上。駕輿丁もなかりければ。御輿をば止られて。悉も十善の太子自ら玉趾を草鞋の塵に汚して。自ら泥土の地を踏せ給けるこそ淺猿けれ。比は三月廿三日の事なれば。月待程の關さ

夜に。ろこ共知らず遠き野の。道をたどりて歩せ給へば。今は遙に來ぬらんと思召れたれば。跡なる山は。未漣の響の風に聞ゆる程なり。若追懸進する事もや有らんと恐しく思召ければ。一足も先へと。御心計は進め共。いつ習はせ給ふべき道あらねば。夢路をたどる心地して。只一所にのみ休はせ給へば。こは如何せんと思ひ煩ひて。忠顯朝臣。御手を引御腰を推て。今夜いかにもして。湊の邊迄と。心を遣給へ共。心身共に疲れ終て。野徑の露に徘徊す。夜甚く深にければ。里遠からぬ鐘の聲の。月に和して聞へけるを。道しるべに尋ね寄て。忠顯朝臣。或家の門を叩き。千波の湊へは。何方へ行ぞと問ければ。内より怪げある男一人出向て。主上の御有様を見參らせけるが。心なき田夫野人なれ共。何となく痛敷や思ひ進せけん。千波の湊へは。是より幾五十町計候へ共。道南北へ分て。如何様御迷候ぬと存候へば。御道しるべ仕り候はんと申て。主上を輕と負進せ。程なく千波の湊へぞ着にける。爰にて時打鼓の聲を聞ば。夜は未五更の初あり。此道の案内者仕たる男甲斐く敷港中を走廻て伯耆國へ漕戻る商人船の有けるを。兎角語ひて。主上を屋形の内に乘進せ。其後暇申てぞ止りける。此男誠に。直人に非ざりけるにや。君御一統の御時。最忠賞有べしとて。國中を尋られけるに。我こそ其にて候へと。申者遂にさかりけり。夜も已に明けければ。船人繩を解て。順風に帆を揚。湊の外に漕出す。船頭主上の御有様を見奉

て。只人にては渡らせ給はじとや思けん。屋形の前に畏て申けるは。斯様の時。御船を仕て候こそ。我等が生涯の面目にて候へ。何くの浦へ寄よと。御定に隨ひて。御船の楫をば仕り候べしと申て。實に他事もなげ成氣色なり。忠顯朝臣是を聞給ひて。隠ては中々悪かりぬと思はれければ。此船頭を近く呼寄て。是程に推當られぬる上は。何をか隠すべき。屋形の内に御座有ころ。日本國の御主。忝も十善の君にて入せ給へ。汝等も定て聞及びぬらん。去年より隱岐判官が館に。押籠られて御座有つるを。忠顯盗み出し進らせたるなり。出雲伯耆の間に。うづくにても。どりぬべからんずる泊へ急ぎ御船を着てろし參らせよ。御運開きば。必ず汝を侍に申あして所領一所の主に成べしと仰られければ。船頭誠に嬉しげ成氣色にて。取楫面楫取合せて。片帆にかけてぞ馳たりける。今は海上二三十里も過ぬらんと思ふ所に。同じ追風に帆懸たる船。十艘計出雲伯耆をさして馳來れり。紫筑船か。商人舟かど見ればさもあらで。隱岐判官清高。主上を追奉る船にてぞ有ける。船頭是をみて。斯ては叶ひ候まじ。是に御陰れ候へと申て。主上と忠顯朝臣とを。舟底にやどし進せて。其上にあい物とて干たる魚の入たる俵をとり積て。水手楫取其上に立並て楫をぞ押たりける。去程に追手の舟一艘御座船に追付て。屋形の内に乗移り。爰かして捜しけれ共。見出し奉らず。扱は此船には召ざりけり。若怪き舟や通りつると問ければ。船頭今

夜の子の刻計に。千波の濤を出候つる船にころ。京上龍かと覺しくて。冠とやらん着たる人と。立
 鳥帽着たる人と。二人乗せ給て候つる其船今は。五六里も先立候ぬらんと申ければ。扱は疑ひも
 無事なり。早船を押とて。帆を引楫を直せば。此船は颯て隔りぬ。今はかうと心安く覺て。跡の波
 路を願れば。又一里計さかり追手の船百餘艘。御座船を目に懸て。鳥の飛が如くにぞ追懸たり。
 船頭是をみて。帆の下に櫓を立て。万里を一時に渡らんと。聲を帆に擧て推けれ共。折節風たゆ
 み。鹽に向ふて。御船更に進まず。水手楫取いかせん。あはて騒ぎける間。主上船底より御
 出有て。膚の御護より。佛舍利を一粒取出させ給て。御疊紙に乗て。波の上をぞ浮られける。龍
 神是を納受やきたりけん。海上俄に風替りて。御座船をば東へ吹送り。追手の船をば。西へ吹も
 ぞす。さてこそ主上は虎口の難を御遁れ有て御船は時の間に。伯耆國名和湊に着にけり。六條少
 將忠顯朝臣一人。先船よりおり給て。此邊に。いか成ものか弓矢取て人にしられたると問れけ
 れば。道行人立やすらひて。此邊には。名和又太郎長年と申者こそ其身さして。名有武士にては候
 はね共。家富一族廣うして。心かさ有者にて候へとぞ語りける。忠顯朝臣能々其子細を尋ね聞て。
 颯て勅使を立て仰られけるは。主上隱岐判官が館を御逃有て今此湊に御座有。長年が武勇兼て上
 聞に達せし間御憑有べき由を仰出さるゝあり。憑まれ進せ候べしや否や。速に勅答を申べしと

ぞ仰られたりける。名和又太郎は折節一放共呼集て酒呑てゐたりけるが。此由を聞て。案じ煩ふ
 たるけしきにて。兎も角も申得ざりけるを。舍弟小太郎左衛門尉長重進み出て申けるは。古より
 今に至る迄。人の望所は。名と利との二つあり。我ら忝も十善の君に憑れ進せて。戸を軍門に
 晒共。名を後代に残さん事。生前の思ひ出。死後の名譽たるべし。唯一筋に思定させ給ふより。
 外の義有べし共存じ候はずと申ければ。又太郎を始として。當座に候ける一族共廿餘人。皆此義
 に同じてけり。さらば頼て合戦の用意候べし。定て追手も跡より懸り候らん。長重は主上の御迎
 に參て。直に船上山へ入進せん。旁々の頼て打立て。船上へ御參り候べしと云捨て。鎧一縮して
 走出ければ。一族五人腹巻取て役懸く。皆高紐しめて。共に御迎ひにぞ參じける俄の事にて御
 輿なんども無りければ。長重着たる鎧の上に。荒薦を巻て。主上を負進せ。鳥の飛が如くして。
 船上へ入奉る。長年近邊の在家に人を廻し思立事有て。船上に兵糧を上る事あり。我倉の内には有
 所の米穀を一荷持て運びたらん者に。錢を五百宛取すべしと觸たりける間。十方より人夫五六
 千人出来して我劣らじと持送る。一日が中に。兵糧五千餘石運びけり。其後家中の財寶。悉々人
 民百姓に與へて己が館に火を懸。其勢百五十騎にて。船上に馳參り。皇居を警固仕る。長年が一族
 名和七郎と云ける者。武勇の謀有ければ。白布五百端有けるを旗に拵へ。松のはを焼て煙に薫。

近國の武士共の。家々の紋を背て。此の木の本。彼の壘にぞ立置ける。此旗共壘の嵐に吹れて。陣々に翻りける様。山中に大勢充滿したりと見へてをびたし

○船上合戦の事

去程に。同じ廿九日。隠岐判官佐々木彈正左衛門尉。其勢三千餘騎にて。南北より押寄たり。此船上と申は。北は大山に繼ぎ峙ち。三方は地さがりに壘に懸れる白雲腰を廻れり。俄に拵へたる城なれば。未掘の一所をも掘す。屏の一重をもぬらす。只所々に大木少々切倒して。逆木に引。坊舎の葺を破て。揺楯にかける計あり。寄手三千餘騎坂中迄賣上て。城中をきつと向上たれば。松相生茂て最深き木陰に。勢の多少は知ぬ共。家々の旗四五百流。雲に翻り日に映じて見へたり。扱は早近國の勢共の。悉く馳参りたりけり。此勢計にては責がたしと思けん。寄手皆心に危て進みぬす。城中の勢共は。敵に勢の分際を見へしと。木陰にぬはれ伏て。時々射手を出し。遠矢を射させて日を暮す。懸る所に。一方の寄手なりける。佐々木彈正左衛門尉。遙の麓に扣て居たりけるが。何方より射共知らぬ流矢に。右の眼を射ぬかれて。矢庭に伏て死にけり。是に由て。其手の兵五百餘騎。色を失ふて。軍をもせず。佐渡前司は八百餘騎にて。搦手に向ひたりけるが。俄に旗を卷甲を脱て。降参す。隠岐判官の。猶加様の事をも知す。搦手の勢は。定て今

は責近付ぬらんと心得て。一の木戸口に支て荒手を入替く時稀る迄を責たりける。日已に西山に隠れんとしける時。俄に天かき曇り風吹雨降事車軸の如く。雷の鳴事山を崩が如く。寄手是に怖わないて。此彼の木陰に立寄て。群居たる所に。名和又太郎長年舍弟。太郎左衛門尉長重。小次郎長生が。射手を左右に進めて。散々に射させ。敵の楯の端のゆるぐ所を得たりや賢しと抜連て打て懸る。大手の寄手十餘騎谷底へ皆まくり落されて。己が太刀長刀に貫れて命を墮すもの其數をしらす。隠岐判官計辛き命を助りて。小舟一艘に取乗。本國へ逃歸りけるを國人いつしか心替りして津々浦々を堅め防ぎける間。波に任せ風に隨て越前の敦賀へ漂ひ寄たりけるが。幾程も無して。六波羅没落の時江州番場の辻堂にて。腹搔切て失にけり。世津季に成ぬといへ共。天理未だ有けるにや餘りに。君を惱し奉りける。隠岐判官が。三十餘日が間に滅びはてし。首を軍門の幢に懸られたるこそ不思議なれ。主上隠岐國より還幸なつて。船上に御坐有と聞へしかば。國々の兵共の馳参る事引も切す。先一番に出雲の守護鹽治判官高貞。富士名の判官と打連て千餘騎にて馳参る其後淺山次郎八百餘騎。金持一黨三百餘騎。大山の衆徒七百餘騎。都て出雲伯耆因幡三個國の間に。弓矢に携る程の武士共の参りぬ者は無りけり。是のみならず。石見國には澤。三角の一族。安藝の國には熊谷小早川。美作國には。管家の一族。江見。芳賀。

澁谷南三郷。備後國にり。江田廣澤。宮。三吉。備中には。新見。成合。那須三村。小坂。河村庄。眞壁。備前には。今木大富太郎幸範。和田備後次郎範長。知間二郎親經。藤井射越五郎左衛門尉範貞。小島。中吉。美濃の權介和氣彌次郎季經。石生彦三郎。此外四國九州の兵までも。聞傳へく。我前にと馳せ参りける間。其勢船上に居餘りて四方の麓二三里は。木の下草の陰迄も。人きらすと云の所は無りけり

○摩耶合戦の事付酒部瀬河合戦の事

先帝已に船上に着御成て。隱岐判官清高合戦に打負し後。近國の武士共皆馳参る由。出雲伯耆の早馬。頻並に打て。六波羅へ告たりければ。事已に珍事に及ぬと。聞人色を失なへり。是に付ても。京近き所に。敵の足を溜させては叶まじ。先攝津國摩耶の城へ押寄て。赤松を退治すべしとて。佐々木判官時信。常陸前司時知に。四十八個處の烽火。在京人並に三井寺法師。三百餘人を相添て。以上五千餘騎を。摩耶の城へぞ向られける。其勢閏二月五日。京都を立て。同十一日の卯刻に。摩耶の城の。南の麓。求塚八幡林よりぞ寄たりける。赤松入道是を見て。態ど敵を難所に誘き寄ん爲に。足輕の射手一二百人を麓へ下して。遠矢少々射させて。城へ引上りけるを。寄手勝に乗て。五千餘騎。さしも嶮き南の坂を。人馬に息をも繼せず。揉に揉ぞ擧たりける。此山へ上るに。七曲どて嶮く細き道あり。此所に至て。寄手少し上り兼て。支へたりける所を。赤松律師則祐。飽間九郎左衛門尉光泰二人。南の尾崎へ下降て矢種を惜まず散々に射ける間。寄手少し射白まかされて互に人を楯になして。其陰に隠れんと色めさける氣色をみて。赤松入道。子息信濃守範資。筑前守貞範。佐用上月小寺頼宮の一黨五百餘人。鉾を揃て。大山の崩るが如く。

二の尾より打て出たりける間。寄手跡より引立て。返せと云けれ共。耳にも聞入ず。我先にと引けり。其道或の深田にして。馬の蹄膝を過。荆棘生茂て。行先彌々狭ければ。返さんとするも叶はず。防がんとするも便りあし。されば城の麓より。武庫川の西の端迄。道三里が程。人馬彌が上に重り死て。行人路を去敢ず。向ふ時七千餘騎と聞へし六波羅の勢。僅に千騎にだも足で引返しければ。京中六波羅の周章斜あらず。然るといへ共。敵近國より起て屬従ひたる勢。さまで多し共。聞へねば。縦ひ一度二度勝に乗事有共。何程の事か有べしと。敵の分限を推量て。引共機をば失はず。斯る所に。備前國の地頭御家人も。大略敵に成ぬと聞へければ。摩耶の城へ勢重らぬ先に。討手を下せよと。同廿八日。又一万餘騎の勢を差下さる。赤松入道是を聞て。勝軍の利は謀。不意に出て。大敵の氣を凌て。須臾に變化して。先ずるには如じとて。三千餘騎を卒し。摩耶の城を出て。久々知。酒部に陣を取て待かけたり。三月十日。六波羅勢已に瀬川に着ぬと聞へければ。合戦は明日にてぞ有んすらん迎。赤松少し油断して。一村雨の過ける程。物の具の露を乾んど。僅なる在家に込入て。雨の晴間を待ける所に。尼崎より船を留て上りける。阿波の小笠原。三千餘騎にて推寄たり。赤松僅に五十餘騎にて。大勢の中へ馳入面も振ず戦ひけるが。大敵凌ぐに叶はねば。四十七騎は討れて。父子六騎にこそ成にけれ。六騎の兵皆驗をかあぐり

捨て。大勢の中へ颯と交て。懸廻りける間。敵是をしらでや有ける。又天運の助にや懸りけん。何れも恙なくして。身方の勢の。小屋の、宿の西に。三千餘騎にて引へたる。其中へ馳入て。虎口に死を遁れけり。六波羅勢は。昨日の軍に敵の勇銳を見るに。小勢ありといへ共。欺き難しと思ければ。瀬川の宿に引へて進み得ず。赤松は又敗軍の士卒を集め。殿れたる勢を。待調へん爲に懸らず。互に陣を阻て。未雌雄を決せず。丁壯漫ろに軍旅に疲れあば。敵に氣を奪るべしとて。同十一日。赤松三千餘騎にて。敵の陣へ推寄て。先事の跡を伺ひ見るに。瀬川の宿の東西に。家の旗二三百流れ梢の風に翻て。其勢二万騎も有んと見へたり身方を是に合せば。百にして。其一二をも。接ふべしと見へね共。戦はでは勝べき道なれば。偏に只討死と志て。筑前守貞範。佐用兵庫助範家。宇野能登守國頼。中山五郎左衛門尉光能。飽間九郎左衛門尉光恭。郎等共に七騎にて竹の陰より。南の山へ打上て。進み出たり。敵是を見て。楯の端少し動て懸るかどみれば。さもあらず。色めきたる氣色に見へける間。七騎の人々馬より飛をり。竹の一村繁たるを木楯に取て。差攻引攻。散々にぞ射たりける。瀬川宿の南北卅餘町に。香の子を打たる様に。扣たる敵なれば。何かは外べき。穀に近き敵廿五騎。眞逆に射落されければ。矢面なる人を楯にして。馬を射させしと立兼たり。平野伊勢の前司。佐用。上月。田中。小寺。八木。衣笠の若者共。すはや敵

は色めきたるはど。胡籙を叩き。勝鬨を作て。七百餘騎。轡を双べてぞ懸たりける。大軍の靡く
癡されは。六波羅勢。前陣返せ共。後陣續かず。行先は狹し。閑に引どいへ共耳にも聞入す。子
は親を捨。郎等は主を知で我先にと落行ける程に。其勢大半討れて僅に京へぞ歸りける。赤松は
手負生捕の首三百餘。宿河原に切懸させて。又摩耶の城へ引返さんとしけるを。圓心が子息。帥
の律師則祐進み出て申けるは。軍の利は勝に乗て北るを追に如かず。今度寄手の名字を聞に。京都の
勢敷を盡て向て候ある。此勢共今四五日は。長途の負軍に草臥て。人馬共に物の用に立べからず。
臆病神の覺ぬ先に。續て責る物あらば。なごか六波羅を。一戦の中に責落さでは候べき。是太公
が兵書に出で。子房が心底に。秘せし所にて候はずやと云ければ。諸人皆此義に同じて。其夜馳
て。宿河原を立て。路次の在家に火を懸。ろの光を松明にして。逃る敵に追すがふて責上りけり

○三月十二日合戦の事

六波羅には。斯る事とは夢にも知す。摩耶の城へは。大勢下しつれば。敵を責落さん事。日を過
さじと。心女く思ける。其左右を令やくと待ける所に。寄手打負て。逃上るよし披露有て。實
説は未聞す。何と有事やらん。不審端多き所に。三月十二日申の刻計に。淀。赤井。山崎。西の
岡邊。卅餘箇所に火を懸たり。此は何事ぞと問に。西國の勢已に。三方より寄たり迎。京中上を

下へ返して騒動す。兩六波羅驚て。地藏堂の鐘を鳴し。洛中の勢を集られけれ共。宗徒の勢は摩
耶の城より追立られ。右往左往に逃隠れぬ。其外へ奉行頭人あんど云れて。肥脹たる者が。馬に
昇乗られて。四五百騎馳集りたれ共。皆只飽る。計にて。差たる義勢も無りけり。六波羅の北の
方。越後守仲時。事の跡を見るに。何様居ながら。敵を京都にて相待ん事は。武略の足ざるに似
たり。洛外に馳向て防べしとて。兩檢斷。隅田高橋に。在京の武士二万餘騎を相副て。今在家作
道。西の朱雀西八條邊へ差向らる。是は此比。南風に雪解て。河水岸に餘る時なれば。桂川を阻
て。合戦を致せとの。謀なり。去程に赤松入道圓心。三千餘騎を二に分て。久我陌。西の七條よ
り押寄たり。大手の勢桂川の西の岸に打臨て。川向ひ成。六波羅勢を見渡せば。鳥羽の秋の嵐に。
家々の旗翺翻として。城南の離宮の西門より。作道。四塚。羅生門の東西。西の七條口迄支て。
雲霞の如くに充満したり。され共此勢は。桂川を外にして。防げと下知せられつる。其趣を守て。
川をば誰も越ざりけり。寄手は又思の外。敵大勢なるよと思惟して。左右なく打て懸らん共せず。
只兩陣互に川を隔て。矢軍に時を移しける。中にも帥の律師則祐馬を踏放ちて。歩立になり。
矢束解て押くつるげ。一枚橋の陰より。引攻く。散々に射けるが。矢軍計にして。勝負を決す
まじかりと獨言して。脱置たる鎧を肩にかけ。冑の緒を縮。馬の腹帯を堅めて。只一驢岸より下

に打下し。手綱かいくり渡さんどす。父の入道遙に見て。馬を打寄。面に塞て制しけるは。昔佐々木三郎が。藤戸を渡し。足利又太郎が。宇治川を渡したるハ。兼てみはじるしを立て。案内を見置。敵の無勢を目に懸て。先をば懸し者なり。川上の雪消水増て。淵瀬も見へぬ大河を。曾て案内も知ずして渡さば渡さるべきか。縦ひ馬強くして。渡る事を得たり共。彼の大勢の中へ。只一騎懸入たらんは。討れずと云事有べからず。天下の安危必ずしも。此一戦に限るべからず。暫く命を全ふして。君の御代を待んと。思ふ心の無かど再三強て留ければ。則祐馬を立直し。拔たる太刀を收て申けるは。身方と敵と。對揚すべき程の勢にてだに候ハ。我と手を摧す共。運を合戦の勝負に任せて見候べきを。身方は僅に三千餘騎。敵は是に百倍せり。急に戦を決せずして。敵に無勢の程を見透されば。戦ふと云へ共利有べからず。されば太公が兵道の詞に。兵勝の術ハ。密に敵人の機を察して。速に其利に乗て。疾其不意を撃と云り。是我因兵を以て。敵の強陣を破る謀にて候はずやと云捨て。駿馬に鞭を進め。眼て流る。瀬枕に逆波を立てぞ游かせける。時を見て飽間九郎左衛門尉。伊東太輔。河原林の次郎。小寺相摸。宇野の能登守國頼五騎。續て颯と打入たり。宇野と伊東は。馬強して。一文字に流を截て渡る。小寺の相摸は。逆巻水に。馬を放されて。胃の手反計僅に浮で見へけるが。波の上をや游けん。波底をや潜りけん。人より先に渡り付て河の向の流洲に鎧の水漉てぞ立たりける。彼等五人が振舞を見て尋常の者あらずとや思けん。六波羅の二万餘騎。人馬東西に辟易して。敢て懸合せんとする者なし。剩へ楯の端しどろに成て。色めき渡る所を見て先懸の身方討すな。續やとて信濃守範資。筑前守貞範。眞先に進ば。佐用。上月の兵三千餘騎。一度に颯と打入て。馬役に流を堰上たれば。逆水岸に餘り流れ。十方に分て元の淵瀬ハ中々に陸地を行が如くなり。三千餘騎の兵共。向の岸に打上り。死を一舉の中に軽くせんと。進み勇る勢を見て。六波羅勢。叶はじとや思けん。未戦はざる先に。楯を捨て。旗を引て。作道を北へ。東寺を指て引もあり。竹田河原を上りに。法性寺大路へ落るもあり。其道二三十町が間には。捨たる物の具地に満て。馬蹄の塵に埋没す。去程に西七條の手。高倉少將の子息。左衛門佐。小寺衣笠の兵共。早京中へ攻入たりと見へて。大宮猪熊堀川油小路の邊五十餘か所に火を懸たり。又七條八條九條の間にも。戦ひ有と覺へて。汗馬東西に馳達ひ。時の聲天地を闇せり。只大三災一時に起て。世界悉く劫火の爲に焼失るかど疑はる。京中の合戦は。夜半計の事あれば。目さす共知ぬ暗夜に。時の聲此彼に聞へて。勢の多少も。軍立の様も見分ざれば。何くへ何と向て。軍をあすすべき共覺へず。京中の勢は。先只六條川原に馳集て呆たる跡にて控へたり

に打下し。手綱かいくり渡さんどす。父の入道遙に見て。馬を打寄。面に塞て制しけるは。昔佐々木三郎が。藤戸を渡し。足利又太郎が。宇治川を渡したるハ。兼てみはじるしを立て。案内を見置。敵の無勢を目に懸て。先をば懸し者なり。川上の雪消水増て。淵瀬も見へぬ大河を。曾て案内も知ずして渡さば渡さるべきか。縦ひ馬強くして。渡る事を得たり共。彼の大勢の中へ。只一騎懸入たらんは。討れずと云事有べからず。天下の安危必ずしも。此一戦に限るべからず。暫く命を全ふして。君の御代を待んと。思ふ心の無かど再三強て留ければ。則祐馬を立直し。拔たる太刀を收て申けるは。身方と敵と。對揚すべき程の勢にてだに候ハ。我と手を摧す共。運を合戦の勝負に任せて見候べきを。身方は僅に三千餘騎。敵は是に百倍せり。急に戦を決せずして。敵に無勢の程を見透されば。戦ふと云へ共利有べからず。されば太公が兵道の詞に。兵勝の術ハ。密に敵人の機を察して。速に其利に乗て。疾其不意を撃と云り。是我因兵を以て。敵の強陣を破る謀にて候はずやと云捨て。駿馬に鞭を進め。眼て流る。瀬枕に逆波を立てぞ游かせける。時を見て飽間九郎左衛門尉。伊東太輔。河原林の次郎。小寺相摸。宇野の能登守國頼五騎。續て颯と打入たり。宇野と伊東は。馬強して。一文字に流を截て渡る。小寺の相摸は。逆巻水に。馬を放されて。胃の手反計僅に浮で見へけるが。波の上をや游けん。波底をや潜りけん。人より先に渡り付て河の向の流洲に鎧の水漉てぞ立たりける。彼等五人が振舞を見て尋常の者あらずとや思けん。六波羅の二万餘騎。人馬東西に辟易して。敢て懸合せんとする者なし。剩へ楯の端しどろに成て。色めき渡る所を見て先懸の身方討すな。續やとて信濃守範資。筑前守貞範。眞先に進ば。佐用。上月の兵三千餘騎。一度に颯と打入て。馬役に流を堰上たれば。逆水岸に餘り流れ。十方に分て元の淵瀬ハ中々に陸地を行が如くなり。三千餘騎の兵共。向の岸に打上り。死を一舉の中に軽くせんと。進み勇る勢を見て。六波羅勢。叶はじとや思けん。未戦はざる先に。楯を捨て。旗を引て。作道を北へ。東寺を指て引もあり。竹田河原を上りに。法性寺大路へ落るもあり。其道二三十町が間には。捨たる物の具地に満て。馬蹄の塵に埋没す。去程に西七條の手。高倉少將の子息。左衛門佐。小寺衣笠の兵共。早京中へ攻入たりと見へて。大宮猪熊堀川油小路の邊五十餘か所に火を懸たり。又七條八條九條の間にも。戦ひ有と覺へて。汗馬東西に馳達ひ。時の聲天地を闇せり。只大三災一時に起て。世界悉く劫火の爲に焼失るかど疑はる。京中の合戦は。夜半計の事あれば。目さす共知ぬ暗夜に。時の聲此彼に聞へて。勢の多少も。軍立の様も見分ざれば。何くへ何と向て。軍をあすすべき共覺へず。京中の勢は。先只六條川原に馳集て呆たる跡にて控へたり

持明院殿六波羅へ行幸の事

日野中納言資名。同左大辨宰相資明二人同車して。内裏へ参り給ひたれば。四門徒に開き警固の武士は一人もあし。主上南殿に出御成て。誰か候と御尋ねあれ共。衛府諸司の官關臺金馬の司も。何地へか行たりけん。勾當の内侍上童二人より外へ。御前に候する者無りけり。資名資明二人。御前に参じて。官軍戦ひ弱くして。逆徒期せざるに洛中に襲來候。斯様にて御座候は。賊徒差違て。御所中へも亂入仕り候ぬと覺候。急ぎ三種の神器を先立て。六波羅へ行幸成候へと申されければ。主上頓て瑤輿に召れ。二條河原より六波羅へ臨幸なる。其後堀川大納言。三條源大納言。鷲尾中納言。坊城宰相以下。月卿雲客二十餘人路次に参着して。供奉し奉りけり。是を聞召及て。院の法皇。東宮。皇后。梶井の二品親王迄皆六波羅へと御幸なる間。供奉の卿宰相雲客。軍勢の中に交て。警蹕の聲頻りありければ。是さへ六波羅の仰天一方あらず。俄に六波羅の北の方をわけて。仙院皇居となす。事の躰騒しかりし有様あり。馳て兩六波羅は。七條河原に打立て。近付敵を相待。此大勢を見て。敵もさすがにあぐんでや思けん。只此彼に走り散て。火を懸時の聲を作る計にて。同じ陣に控たり。兩六波羅是を見て何様敵は。小勢ありと覺る。向て追散せとて。隅田高橋に。三千餘騎を相添て。八條口へ差向らる。河野九郎左衛門尉。陶山次郎に。二千餘騎を差添て。蓮華王院へ向られけり。陶山河野に向て云ける。何共なき取集め勢に交て軍をせば。恐に足纏に成て。懸引も自在なるまじ。倡や六波羅殿より差副られたる勢をば。八條河原に控させて。時の聲を擧させ我等は手勢を引勝て。蓮華王院の東より敵の中へ懸入。蜘蛛十文字に懸破り。弓手妻手に相付て。追物射に射て呉候はんと云ければ。河野尤然るべしとじて。外様の勢。二千餘騎をば。鹽小路の道場の前へ差遣し河野が勢三百餘騎。陶山が勢百五十餘騎は。引分て。蓮華王院の東へ廻りける。相圖の程にも成ければ。八條河原の勢。時の聲を揚たるに。敵是に立合せんと。馬を西頭に立て相待所に。陶山河野四百餘騎。思も寄ぬ後より。時を咄と作て大聲の中へ懸入。東西南北に懸破つて。敵を一所に打寄す。追立く責戦ふ。河野と陶山と一所に合ては。兩所に分れ。兩所に分れては又一所に合。七八度が程ぞ揉だりける。長途に疲れたる歩立の武者。駿馬の兵に懸惱されて。討る者共數を知らず。手負を捨。道を要て散々に成て引返す。陶山河野。逃る敵には目をも懸す。西七條邊の合戦。何と有らん心元無とて。又七條河原を直達に。西へ打て七條大宮に扣へ朱雀の方を見遣ければ。隅田高橋が三千餘騎。高倉左衛門佐。小寺。衣笠が二千餘騎に懸立られて。馬の足をぞ立兼たる。河野是を見て。斯ては御方討れぬと覺るぞ。いざや打て懸らしと云けるを陶山暫しと制しけり。其

尉。陶山次郎に。二千餘騎を差添て。蓮華王院へ向られけり。陶山河野に向て云ける。何共なき取集め勢に交て軍をせば。恐に足纏に成て。懸引も自在なるまじ。倡や六波羅殿より差副られたる勢をば。八條河原に控させて。時の聲を擧させ我等は手勢を引勝て。蓮華王院の東より敵の中へ懸入。蜘蛛十文字に懸破り。弓手妻手に相付て。追物射に射て呉候はんと云ければ。河野尤然るべしとじて。外様の勢。二千餘騎をば。鹽小路の道場の前へ差遣し河野が勢三百餘騎。陶山が勢百五十餘騎は。引分て。蓮華王院の東へ廻りける。相圖の程にも成ければ。八條河原の勢。時の聲を揚たるに。敵是に立合せんと。馬を西頭に立て相待所に。陶山河野四百餘騎。思も寄ぬ後より。時を咄と作て大聲の中へ懸入。東西南北に懸破つて。敵を一所に打寄す。追立く責戦ふ。河野と陶山と一所に合ては。兩所に分れ。兩所に分れては又一所に合。七八度が程ぞ揉だりける。長途に疲れたる歩立の武者。駿馬の兵に懸惱されて。討る者共數を知らず。手負を捨。道を要て散々に成て引返す。陶山河野。逃る敵には目をも懸す。西七條邊の合戦。何と有らん心元無とて。又七條河原を直達に。西へ打て七條大宮に扣へ朱雀の方を見遣ければ。隅田高橋が三千餘騎。高倉左衛門佐。小寺。衣笠が二千餘騎に懸立られて。馬の足をぞ立兼たる。河野是を見て。斯ては御方討れぬと覺るぞ。いざや打て懸らしと云けるを陶山暫しと制しけり。其

故は此陣の軍。未雌雄を決せざる前に力を合て御方を助たり共。隅田高橋が口の悪さは。我高名にぞ云んすらん。暫く置て。事の様を御覽せよ。敵縦ひ勝に乗共。何程の事か有べき連。見物してぞ居たりける。去程に隅田高橋が大勢。小守。衣笠が小勢に追立られ。返さんとする共叶はず。朱雀を上りに。内野を指て引もあり。七條を東へ向て逃るもあり。馬に離たる者は。心ならず返し合て死もあり。陶山是を見て。餘にちがめ居て。御方の弱り。仕出したらんも由なし。いざや今は懸合せんと云ば。河野仔細にや及ぶと云まゝに。兩勢を一手になして。大勢の中へ懸入。時移る迄を戦ひたる。四武の衝陣。堅を碎て。百戦の勇力變に應せしかば。寄手又此陣の軍にも打負て。寺戸を西へ引返しけり。筑前守貞範。律師則祐兄弟は。最初に桂川を渡しつる時の合戦に。逃る敵を追立て。跡に續く。御方のあきをも知す。只主従六騎にて。竹田を上りに。法勝寺の大略へ懸通り。六條河原へ打出て。六波羅の館へ懸入んとぞ待たりける。東寺より寄つる御方。早打負て引返しけりと覺て。東西南北に敵より外はなし。さらば且く。敵に紛てや御方を待と。六騎の人々皆笠符をかきり捨て一所に扣へたる所に。隅田高橋打廻て何様亦松が勢共。猶御方に紛て。此中に有と覺るぞ。河へ渡しつる敵あれば。馬物の具て濡ぬは有べからず。それを印にして。組討に打と呼はりける間。貞範も則祐も中々敵に紛れんとせば悪かりぬべしとて。兄弟郎等僅六騎。善を双べ。わつと喚で。敵二千騎が中へ懸入。此に名乗。彼に紛て相戦ひけり。敵は是程に小勢なるべしとは。思ひ寄べき事ならねば。東西南北に入亂れて。同士討をする事數刻なり。大勢を謀るに。勢ひ久しからざれば。郎等四騎皆所々にて討れぬ。筑前守は押隔てられぬ。則祐は只一騎に成て。七條を西へ。大宮を下りに落行ける所に。印具尾張守が郎等八騎追懸て。敵ながらも詭しく覺へ候者か。誰人にてをばするぞ。御名乗候へと云ければ。則祐馬を閑に打て。自不肖に候へば。名乗申共。御存知有べからず候。只首を取て人に見せられ候へと云儘に。敵近付ば返し合。敵引ば馬を歩せ。二十餘町の間。敵八騎と打連て。心閑にぞ落行ける。西八條の寺の前を。南へ打出ければ。信濃守貞範。三百餘騎。羅生門の前なる。水の濶に馬の足を冷して。敗軍の兵を集んど。旗打立て扣へたり。則祐是を見付て。諸鎧を合て馳入ければ。追懸つる八騎の敵共。よき敵と見つる物を遂に打漏しぬる事の。安からずさよと云聲聞へて馬の鼻を引返しける。暫くあれば。七條川原西朱雀にて懸散されたる兵共。此彼より馳集て。又千餘騎に成にけり。赤松其兵を。東西の小路より進せ。七條邊にて。又時の聲を揚たりければ。六波羅勢七千餘騎。六條院を後に當て。追つ返して。二時計不責合たる。斯ては軍の勝負いつ有べし共覺へざりける所に。河野と。陶山とが勢五百餘騎。大宮を下りに打て出。後を襲まんと廻りける勢

故は此陣の軍。未雌雄を決せざる前に力を合て御方を助たり共。隅田高橋が口の悪さは。我高名にぞ云んすらん。暫く置て。事の様を御覽せよ。敵縦ひ勝に乗共。何程の事か有べき連。見物してぞ居たりける。去程に隅田高橋が大勢。小守。衣笠が小勢に追立られ。返さんとする共叶はず。朱雀を上りに。内野を指て引もあり。七條を東へ向て逃るもあり。馬に離たる者は。心ならず返し合て死もあり。陶山是を見て。餘にちがめ居て。御方の弱り。仕出したらんも由なし。いざや今は懸合せんと云ば。河野仔細にや及ぶと云まゝに。兩勢を一手になして。大勢の中へ懸入。時移る迄を戦ひたる。四武の衝陣。堅を碎て。百戦の勇力變に應せしかば。寄手又此陣の軍にも打負て。寺戸を西へ引返しけり。筑前守貞範。律師則祐兄弟は。最初に桂川を渡しつる時の合戦に。逃る敵を追立て。跡に續く。御方のあきをも知す。只主従六騎にて。竹田を上りに。法勝寺の大略へ懸通り。六條河原へ打出て。六波羅の館へ懸入んとぞ待たりける。東寺より寄つる御方。早打負て引返しけりと覺て。東西南北に敵より外はなし。さらば且く。敵に紛てや御方を待と。六騎の人々皆笠符をかきり捨て一所に扣へたる所に。隅田高橋打廻て何様亦松が勢共。猶御方に紛て。此中に有と覺るぞ。河へ渡しつる敵あれば。馬物の具て濡ぬは有べからず。それを印にして。組討に打と呼はりける間。貞範も則祐も中々敵に紛れんとせば悪かりぬべしとて。兄弟郎等僅六騎。善を双べ。わつと喚で。敵二千騎が中へ懸入。此に名乗。彼に紛て相戦ひけり。敵は是程に小勢なるべしとは。思ひ寄べき事ならねば。東西南北に入亂れて。同士討をする事數刻なり。大勢を謀るに。勢ひ久しからざれば。郎等四騎皆所々にて討れぬ。筑前守は押隔てられぬ。則祐は只一騎に成て。七條を西へ。大宮を下りに落行ける所に。印具尾張守が郎等八騎追懸て。敵ながらも詭しく覺へ候者か。誰人にてをばするぞ。御名乗候へと云ければ。則祐馬を閑に打て。自不肖に候へば。名乗申共。御存知有べからず候。只首を取て人に見せられ候へと云儘に。敵近付ば返し合。敵引ば馬を歩せ。二十餘町の間。敵八騎と打連て。心閑にぞ落行ける。西八條の寺の前を。南へ打出ければ。信濃守貞範。三百餘騎。羅生門の前なる。水の濶に馬の足を冷して。敗軍の兵を集んど。旗打立て扣へたり。則祐是を見付て。諸鎧を合て馳入ければ。追懸つる八騎の敵共。よき敵と見つる物を遂に打漏しぬる事の。安からずさよと云聲聞へて馬の鼻を引返しける。暫くあれば。七條川原西朱雀にて懸散されたる兵共。此彼より馳集て。又千餘騎に成にけり。赤松其兵を。東西の小路より進せ。七條邊にて。又時の聲を揚たりければ。六波羅勢七千餘騎。六條院を後に當て。追つ返して。二時計不責合たる。斯ては軍の勝負いつ有べし共覺へざりける所に。河野と。陶山とが勢五百餘騎。大宮を下りに打て出。後を襲まんと廻りける勢

に。後陣を破られて。寄手若干討れにければ。赤松僅の勢に成て。山崎を指て引返しけり。川野陶山勝に乗て。作道の邊迄追懸けるが。赤松動すれば。取て返さんとする勢を見て。軍は是迄ぞ。さのみ長追なせりとて。鳥羽殿の前より引返し。虜廿餘人。首七十三取て。鉾に貫て。朱に成て。六波羅へ馳參る。主上は御簾を捲れて御覽あり。兩六波羅は敷皮に座して是を檢知す。兩人の振舞。いつもの事なれ共。殊更今夜の合戦に。旁々手を下し。命を捨給はずば。叶まじとて。再三感じて賞翫せらる。其夜頓て臨時の宣下有て。河野九郎をば。對馬守になされて。御劔を下され。陶山次郎をば。備中守になされて。寮の御馬を下されければ。是を見聞武士。天晴弓箭の面目やと。或は羨み。或は猜で。其名天下に知れたり。軍散じて翌日に。隅田高橋。京中を馳廻て。此彼の堀溝に倒れ居たる。手負死人の首共を取集て。六條河原に懸並べたるに。其數八百七十三あり。敵是迄多く討れざれ共。軍もせぬ六波羅勢共。我高名したりと云んとて。洛中邊土の在家人なんどの首を假首にして。様々名を書付て出たる首共なり。其中に赤松入道圓心と札を付たる首五あり。何れも見知たる人なければ。同じ様に懸たりける。京童是を見て。首を假たる人。利子を付て返すべし。赤松入道分身して敵の盡ぬ相あるべしと。口々に社笑ひけれ

禁裏仙洞御修法の事付山崎合戦の事

此比四海大に亂て。兵火天を掠めり。聖主宸を負て。春秋安き時あり。武臣銚を立。旌旗閑なる日本し。是法威を以て逆臣を鎮めずんば。靜謐其期有べからずとて。諸寺諸社に仰て。大法秘法を修せられける。梶井宮は。聖主の御連枝。山門の座主にて御坐ければ。禁裏に壇を立て。佛眼の法を行のせ給ふ。裏辻の慈什僧正は。仙洞にて。藥師の法を行はる武家又。山門南都園城寺の衆徒の心を取。靈鑑の加護を仰がん爲に。所々の庄園を寄進し。種々の神寶を奉て。祈禱を致されしか共。公家の政道正じからず。武家の積惡禍を招きしかば。祈れ共。神非禮を請す。語へ共人利欲に耽らざるにや。只日を追て國々より。急を告る事。隙なかりけり。去三月十二日の合戦に赤松打負て。山崎を差て落行きを頓て追懸て。討手をだに下したらば。敵足をたむまじかりしと。今は何事か有べし。油断せられしに由て。敗軍の兵。此彼より馳集て。程なく大勢に成ければ。赤松。中院中將貞能を取立て。聖護院の宮と號し。山崎。八幡に陣を取。川尻を差塞ぎ。西國往邊の道を打止む。これに由て洛中の商賣止て士卒皆轉漕の助に苦めり。兩六波羅是を聞て。赤松一人に洛中を腦まされて。今士卒を苦しむる事こそ安からぬ。去る十二日の合戦の程を見るに。敵さまで大勢にても無りける物を。云甲斐なく聞懼して。敵を邊境の間に隔こそ武家後

代の恥辱なれ。所詮今度に於ては。官軍・遮て敵陣に押寄。八幡山崎の兩陣を責落し。賊徒を川に追はめ。其首を取て。六條河原に晒べしと下知せられければ。四十八個所の箠。並に在京人其勢五千餘騎。五條河原に勢調して。三月十五日の卯刻に。山崎へと向ひける。此勢始は二手に分たりけるを。久我噺の。路細く深田なれば。馬の懸引も自在なるまじとて。八條より一手に成。桂川を渡り。川島の南を経て物集女大原野の前よりぞ寄たりける。赤松是を聞て。三千餘騎を三手に分つ。一手には。足輕の射手を勝て。五百餘人。小鹽山へ廻す。一手をば。野伏に騎馬の兵を。少々変て。千餘人狐河の邊に扣へさす。一手をば混すら打物の衆八百餘騎を揃て。向日明神の後ある。松原の陰に隠をく。六波羅勢。敵爰迄出合へとは。思寄す坐に深入して。寺戸の在家に火を懸て先懸已に。向日明神の前を打過ける所に。善峯岩藏の上より。足輕の射手一枚楯手々に提て麓におり下て散々に射る。寄手の兵共是を見て。馬の鼻を双て懸散さんとすれば。山嶮して上り得ず。廣みに誘き出して討んとすれ共。敵是を心得て懸らす。よしや人々。はかどしからぬ野伏共に目を懸て骨を折てい何かせん。此をば打捨て。山崎へ打通れと諭して。西の岡を南へ打過る處に。坊城左衛門尉。五千餘騎にて。思も寄ぬ。向日明神の。小松原より懸出て。大勢の中へ切て入。敵を小勢と侮て。真中に收籠て。餘さじと戦ふ所に。田中。小寺。八木。神澤。此彼より。百騎二百騎。思ひく懸出て。魚鱗に進み。鶴翼に圍んとす。是を見て狐河に扣へたる勢五百餘騎。六波羅勢の跡を切じと。噺を傳ひ。道を要て打廻るを見て。京勢叶はじとや思ひけん。捨鞭を打て引返す。片時の戦ひ成ければ。京勢多く討れたる事は無れ共。堀溝深田に落入て。馬物の具。皆取所も無く膩たれば。白晝に京中を打通るに。見物しける人毎に。哀れさり共。陶山河野を向られたらば。是程にきたあき負はせし物とぞ。笑はぬ人も無りけり。去ば京勢此度打負て。向はで京に殘されたる。河野と隅山が手柄の程。最と名高く成にけり

○山徒京都に寄る事

京都に合戦 始て。官軍 動ずれば利を失ふ由。其聞へ有しかば。大塔宮より。牒使を立られて。山門の衆徒を語はれける。是に依て三月廿六日に。一山の衆徒大講堂の庭に會合して。夫吾山は七社。應化の靈地として。百王鎮護の藩籬である。高祖大師開基を占給し始め。止觀の窓の前には。天真獨朗の夜の月を飮ふといへ共。慈悲僧正貫頂たるの後。忍辱の衣の上に忽魔障降伏の。秋の霜を帯。爾來 妖孽 天に顯はるゝ時は。則法威を振て是を拂ふ。逆暴國を亂る時は則神力を借て之を退く。故に神を山王と號す。須からく非三非一の深理有べし。山を比喩と云。佛法王法相比するゆへんなり。然るに今四海方に亂れて。一人安からず。武臣積惡の餘り。果して

法王法相比するゆへんなり。然るに今四海方に亂れて。一人安からず。武臣積惡の餘り。果して

天將に謀を下さんとす。其兆賢愚無に非ず。共に世の知所なり。王事監事。釋門假令出塵の徒たりといへ共。此時何んぞ報國の忠を盡す事無らんや。早武家合衆の前非を翻して。宜く朝廷扶危の忠膽を専らにすべしと。僉議しければ。三千一同に尤々と同じて院々谷々へ歸り。則武家追討の企の外他事なし。山門已に來る廿八日。六波羅へ寄べしと定めければ。末寺末社の輩は申に及ばず。所縁に隨て。近國の兵馳集る事。雲霞の如くなり。廿七日大宮の前にて着到を付けるに。十万六千餘騎と注せり。大衆の習大早極無き所存なれば。此勢京へ寄たらんに。六波羅よも一たまりもたまらじ。聞落にぞせんずらんと。思ひ侮て八幡山崎の御方にも。牒し合せずして。二十八日の卯刻に。法勝寺にて勢揃有べしと觸たりければ。物の具をもせず。兵糧をも未つかはで。或い今路より向ひ。或は西坂よりぞをり下る。兩六波羅是を聞て。思ふに山徒縦大勢なりといへ共。騎馬の兵一人も有べからず。此方に馬上の射手を揃て。三條河原に待受させ。懸開懸合。弓手妻手に付て。追物射に射たらんするに。山徒心は武しといへ共。歩立に力疲れ。重鎧に肩を引れ。片時が間に疲るべし。是小を以て大を碎き。弱を以て剛を挫ぐ術なりとて。七千餘騎を七手に分て。三條河原の東西に。陣を取てぞ待懸たる。大衆斯るべしとは。思もよらず我先に京へ入て。よからんする宿をも取。財寶をも官領せんと志て。宿札共を面々に。

二三十づ、持せて。先法勝寺へ集りける。其勢を見渡せば。今路西坂。古塔下。八瀬敷里。下松赤山口に支て。先陣已に法勝寺真如堂に着ば。後陣は未山上坂本に充滿たり。甲冑に映せる朝日は電光の激するに異ならず。旌旗を靡す山風は。龍蛇の動に相似たり。山上と浴中との。勢の多少を見合るに。武家の勢は。十にして其一にも及ばず。實も此勢にては。輒くこそと。六波羅を直下ける。山法師の心の程を思へば。大様ながらも理あり。去程に先陣の大衆。且く法勝寺に付て。後陣の勢を待ける所へ。六波羅勢七千餘騎三方より。押寄て時をどつと作る。大衆時の聲に驚て。物の具太刀よ。長刀よとひしめいて。取物も取敢ず。僅に千人計にて。法勝寺の西門の前に出合。近付敵に抜て懸る武士の。兼てより巧たる事あれば。敵の懸る時は。馬を引返してばつと引。敵留れば開き合て。後へ懸廻る。此の如く。六七度が程懸惱しける間。山徒は皆歩立の上重鎧に肩を推れて。次第に疲れたる跡を見へける。武士は是に利を得て。射手を調て散々に射る。大衆是に射立られて。平場の合戦叶はじとや思けん。又法勝寺の中へ引籠らんとしける所を。丹波國の住人佐治孫五郎と云ける兵。西門の前に馬を横へ。其比曾て無し。五尺三寸の太刀を以て。敵三人懸す筒切て。太刀の少し仰たるを。門の扉に當て推直し。猶も敵を相待て。西頭に馬を不扣へたり。山徒是を見て。其勢ひにや辟易しけん。又法勝寺にも敵有とや思けん。

法勝寺へは入得ず。西門の前を北へ向て。真如堂の前。神樂岡の後を。二に分れて只山上へどのみ引返しける。爰に東塔の南谷善智坊の同宿に。豪鑑豪仙とて。三塔名譽の悪僧あり。御方の大勢に引立られて。心ならず北白川を差て引けるが。豪鑑豪仙を呼留て。軍の習として。勝時もあり。負る時もあり。時の運による事なれば。恥にて恥ならず。然りといへ共。今日の合戦の跡。山門の恥辱天下の嘲哂たるべし。いざや御邊相共に返し合て打死し。二人が命を捨て。三塔の恥を雪めんと云ければ。豪仙云にや及ぶ。最庶幾する處なりと云て。二人踏止て。法勝寺の北の門に立双び。大音聲を揚て名乗けるは。是程に引立たる大勢の中より。只二人返し合するを以て。三塔一の剛の者とは知べし。其名をば定て聞及びぬらん。東塔の南谷善智坊の同宿に。豪鑑豪仙とて。一山に名を知れたる者共あり。我と思はん武士共。よれや打物して。自餘の輩に見物せさせんと。云儘に四尺餘の大長刀水車に廻して。跳懸りく。火を散してぞ切たりける。是を打取んと相近付る武士共多く馬の足を薙れ。胃の鉢を破れて討れにけり。彼等二人爰に半時計支て戦ひけれ共。續く大衆一人も無し。敵雨の降如くに。射ける矢に。二人あがら十四箇所疵を蒙りければ。今は所存是迄。いざや冥途迄も同道せんと契りて。鎧脱捨押裸ぬぎ。腹十文字に掻切て。同じ枕にこそ伏たりけれ。これを見る武士共。天晴日本一の剛の者共哉と。惜まぬ人も

なかりけり。先陣の軍破れて引返しければ。後陣の大勢は。軍場をだに見ずして。道より山門へ引返す。只豪鑑豪仙二人が振舞にこそ。山門の名をば揚たりけれ

○四月三日合戦事付妻鹿孫三郎勇力事

去月十二日。赤松合戦利無うして。引退し後は武家常に勝に乗て。敵を討事數千人なりといへ共。四海未靜みならず。剩へ。山門又武家に敵して。大嶽に篝火を燒。坂本に勢を集て。猶六波羅へ寄べしと聞へければ。衆徒の心を取ん爲に。武家より大庄十三ヶ所。山門へ寄進す。其外。宗徒の衆徒に便宜の地を一二ヶ所づゝ。祈禱の爲とて恩賞を行はれける。扱ころ山門の衆議心々に成て。武家に心を寄る衆徒も多く出来にければ。八幡山崎の官軍は。先度京都の合戦に。或は討れ。或は疵を蒙る者多かりければ。其勢大半減じて。今は僅かに一万騎に足ざりけり。され共武家の軍立京都の形勢。恐るゝに足すと見透してければ。七千餘騎を二手に分て四月二日の卯刻に。又京へ押寄たり。其一方に。殿法印良忠中院の定平を兩大將として。伊東。松田。頼宮。富田判官が一黨。並に眞木葛葉の。溢れ者共を加へて。其勢都合三千餘騎。伏見木幡に火を懸て。鳥羽竹田より押寄る。又一方には赤松入道圓心を始として。宇野。柏原。佐用。眞島。得平。衣笠。管家の一黨。都合其勢三千五百餘騎。河島。桂の里に火を懸て。西の七條より寄たりけ

る。兩六波羅は度々の合戦に打勝て。兵皆氣を揚げる上。其勢を算るに。三万騎に餘りける間。敵已に近付ぬと告けれ共。仰天の氣色も無し。六條河原に勢調て。閑に手分をぞせられける。山門今は武家に志を通ずといへ共。又如何成野心をか存ずらん。油断すべきに非ずとて。佐々木判官時信。常陸前司時朝。長井。縫殿秀正に。三千餘騎を差副て。糺河原へ向らる。去月十二日の合戦も。其方より勝たりしかば。吉例ありとて。河野と陶山とに。五千騎を相副て法勝寺大路へ差向らる。富樫林が一族。島津小早川が兩勢に。國々の兵六千餘騎を相副て。八條東寺邊へ差向らる。厚東加賀の守加治源太左衛門尉。隅田。高橋。糟谷。土屋。小笠原に七千餘騎を相副て。西七條口へ否らる。自餘の兵千餘騎をば。荒手の爲に残して。未六波羅に並居たり。其日の己刻より。三方ながら同時に軍始て入替く責戦ふ。寄手は騎馬の兵少しく。歩立の射手多ければ。小路くを塞ぎ。鐵を調て散々に射る。六波羅勢は。歩立は少して。騎馬の兵多ければ。懸違く。敵の中に取籠んとす。孫子が千反の謀。吳氏が八陣の法互に知たる道なれば。共に破れず圍れず。只命を際の戦にて。更に勝負も無りけり。終日戦て。已に夕陽に及びける時。河野と陶山と一手に成て。三百餘騎。轡を双て懸たりけるに。木幡の寄手足をもため懸立られ。宇治路をさして引退く。陶山河野逃る敵をば打捨て。竹田河原を直違に。鳥羽殿の。北の門

を打廻り。作道へ懸出て。東寺の前成寄手を取籠むとす。作道十八町に充満したる寄手是を見て。叶いしとや思けん。羅生門の西を横切に。寺戸を差て引返す。小早川と島津安藝の前司とは。東寺の敵に向て追つ返しつ戦けるが。己が陣の敵を。河野陶山に拂はれて。御方の負をしつる事よと。無念に思ければ。西の七條へ寄する敵に逢て。花やかある一軍せんと云て。西八條を上りに西朱雀へぞ出たりける。此に赤松入道究竟の兵を勝て。三千餘騎にて扣へたりければ。左右なく破るべき様もなかりけり。され共島津小早川が横合に懸るを見て。戦ひ疲れたる六波羅勢。力を得て。三方より攻合せける間。赤松が勢忽に開靡て。三所に扣へたり。爰に赤松が勢の内より。兵四人進み出て數千騎扣へたる。敵の中へ。是非なく打て懸りけり。其勢決然として。恰樊噲項羽が怒れる形にも過たり。近付に隨て是を見れば。長七尺計ある男の。髭両方へ生分て。眸逆に裂たるが鎖の上に鎧を重て着。大立擧の膺當に。膝鎧懸て。龍頭の冑。猪頸に着なし。五尺餘の太刀を帶。八尺餘の金さい棒の。八角なるを。手元二尺計圓めて。誠に輕げに提げたり。數千騎扣へたる六波羅勢。彼等四人が有様を見て。未戦はざる先に三方へ分て引退く。敵を招て。彼等四人。大音聲を揚て名乗けるは。備中國の住人。頼宮又次郎入道。同子息孫三郎。田中藤九郎盛兼。同舍弟彌九郎盛泰と云者あり。我等父子兄弟。少年の昔より勅勸武敵の身と成

し間。山賊を業として。一生を樂しめり。然るに今幸に。此亂出來して。忝も万乘の君の御方に參ず。然るを先度の合戦。差たる軍もせで御方の負したりし事。我等が恥と存る間。今日に於ては。縦ひ御方負て。引共引まじ敵強く共其にもよるまじ。敵の中を破て通り。六波羅殿に直に對面申さんと存るありと。廣言吐て二王立にぞ立たりける。島津安藝の前司是を聞て。子息二人手の者共に向て云ける。日比間及びし。西國一の大力とは是なり。彼等を討ん事。大勢にて叶まじ。御邊達は且く外に引へて。自餘の敵に戦ふべし。我等父子三人相近付て進つ退つ且く悩したらんに。なごか是を討ざらん。縦ひ力を強く共。身に矢の立ぬ事有べからず。縦ひ走る事早く共。馬にはよも追付じ。多年稽古の犬笠懸。今の用に立すんば。何をか期すべき。いでく不思議の一軍して。人に見せんと云儘に。只三騎打抜て。四人の敵に相近付。田中藤九郎是を見て。其名は未知ね共。猛くも思へる志か。同くは御邊を生取て。御方になして軍せさせんと冷笑て件の鐵棒を打振て。閑に歩み近付。嶋津も馬を静々と歩ませ寄て。矢比に成ければ。先安藝の前司。三人張に十二束三伏且し堅めて丁と放つ。其矢過またず。田中が右の頬先を。胃の菱縫の板へ懸て。篋中計射通したりける間。急所の痛手に弱りて。さしもの大力あれ共。目暗て更に進み得ず。舍弟の彌九郎走寄。其矢を抜て打捨。君の御敵は六波羅なり。兄の敵の御邊あり。餘すまじと云儘に。兄が鐵棒を追取。振て懸れば頼宮父子各五尺二寸の太刀を。引側めて。小躍して續いたり。島津元來物馴たる馬上の達者。矢繼早の手利なれば。少しも騒がず。田中進て懸れば。あひの鞭を打て。押もぢりに。はたと射る。田中右手へ廻れば弓手を越て丁と射。西國名譽の打物の上手と。北國無双の馬上の達者と。追つ返つ懸違へ。人交もせず。戦ける。前代未聞の見物なり。去程に島津が矢種も盡て。打物にならんとしけるを見て。斯ては叶はじと思けん。朱雀の地藏堂より北に扣へたる小早川三百騎にて喚で懸りけるに。田中が後なる勢懸と引退きければ。田中兄弟頼宮父子。彼是四人の鎧の透間。内胃に。各矢二三十筋射立られて。太刀を逆に衝て。皆立すくみに死たりける。見る人聞人後迄も。惜まぬ者はなかりけり。美作國の住人。管家の一族は。三百餘騎にて。四條猪熊迄賣入。武田兵庫助。糴谷。高橋が一千餘騎の勢と懸合て。時移る迄。戦けるが。跡なる御方の引退きぬる跡を見て。元來引じとや思けん。又向ふ敵に。後を見せじとや恥たりけん。有元管四郎佐弘同五郎佐光。同又三郎佐吉兄弟三騎近付敵に馳双べ。引組で臥たり。佐弘は。今朝の軍に膝口を切れて。力弱りたりけるにや。武田七郎に。押へられて。首を搔れ。佐光の武田二郎が首を取。佐吉の。武田が郎等と差違て。共に死けり。敵二人も共に兄弟。御方二人も兄弟なれば。死殘ては何かせん。倡や共に勝負せんとして。佐光と

し間。山賊を業として。一生を樂しめり。然るに今幸に。此亂出來して。忝も万乘の君の御方に參ず。然るを先度の合戦。差たる軍もせで御方の負したりし事。我等が恥と存る間。今日に於ては。縦ひ御方負て。引共引まじ敵強く共其にもよるまじ。敵の中を破て通り。六波羅殿に直に對面申さんと存るありと。廣言吐て二王立にぞ立たりける。島津安藝の前司是を聞て。子息二人手の者共に向て云ける。日比間及びし。西國一の大力とは是なり。彼等を討ん事。大勢にて叶まじ。御邊達は且く外に引へて。自餘の敵に戦ふべし。我等父子三人相近付て進つ退つ且く悩したらんに。なごか是を討ざらん。縦ひ力を強く共。身に矢の立ぬ事有べからず。縦ひ走る事早く共。馬にはよも追付じ。多年稽古の犬笠懸。今の用に立すんば。何をか期すべき。いでく不思議の一軍して。人に見せんと云儘に。只三騎打抜て。四人の敵に相近付。田中藤九郎是を見て。其名は未知ね共。猛くも思へる志か。同くは御邊を生取て。御方になして軍せさせんと冷笑て件の鐵棒を打振て。閑に歩み近付。嶋津も馬を静々と歩ませ寄て。矢比に成ければ。先安藝の前司。三人張に十二束三伏且し堅めて丁と放つ。其矢過またず。田中が右の頬先を。胃の菱縫の板へ懸て。篋中計射通したりける間。急所の痛手に弱りて。さしもの大力あれ共。目暗て更に進み得ず。舍弟の彌九郎走寄。其矢を抜て打捨。君の御敵は六波羅なり。兄の敵の御邊あり。餘すまじと云儘に。兄が鐵棒を追取。振て懸れば頼宮父子各五尺二寸の太刀を。引側めて。小躍して續いたり。島津元來物馴たる馬上の達者。矢繼早の手利なれば。少しも騒がず。田中進て懸れば。あひの鞭を打て。押もぢりに。はたと射る。田中右手へ廻れば弓手を越て丁と射。西國名譽の打物の上手と。北國無双の馬上の達者と。追つ返つ懸違へ。人交もせず。戦ける。前代未聞の見物なり。去程に島津が矢種も盡て。打物にならんとしけるを見て。斯ては叶はじと思けん。朱雀の地藏堂より北に扣へたる小早川三百騎にて喚で懸りけるに。田中が後なる勢懸と引退きければ。田中兄弟頼宮父子。彼是四人の鎧の透間。内胃に。各矢二三十筋射立られて。太刀を逆に衝て。皆立すくみに死たりける。見る人聞人後迄も。惜まぬ者はなかりけり。美作國の住人。管家の一族は。三百餘騎にて。四條猪熊迄賣入。武田兵庫助。糴谷。高橋が一千餘騎の勢と懸合て。時移る迄。戦けるが。跡なる御方の引退きぬる跡を見て。元來引じとや思けん。又向ふ敵に。後を見せじとや恥たりけん。有元管四郎佐弘同五郎佐光。同又三郎佐吉兄弟三騎近付敵に馳双べ。引組で臥たり。佐弘は。今朝の軍に膝口を切れて。力弱りたりけるにや。武田七郎に。押へられて。首を搔れ。佐光の武田二郎が首を取。佐吉の。武田が郎等と差違て。共に死けり。敵二人も共に兄弟。御方二人も兄弟なれば。死殘ては何かせん。倡や共に勝負せんとして。佐光と

武田七郎と。持たる首を両方へ投捨て。又引組で差違ふ。是を見て福光彦二郎佐長。植月彦五郎重佐原田彦三郎佐秀。鷹取彦二郎種佐。同時に馬を引返し。ひすと組ではどうと落引組では差違へ。廿七人の者共。一所にて皆討られければ。其陣の軍は破れにけり。播磨國の住人妻鹿孫三郎長宗と申は。薩摩の氏長が末にて。力人に勝れ。器量世に超たり。生年十二の春の比より。好で相撲を取けるに。日本六十餘州の中には。遂に片手にも懸る者あかりけり。人は類を以て集る習なれば。相伴ふ一族十七人。皆是尋常の人には越たり。されば他人の手を交すして。一陣に進み。六條坊門大宮迄賣入たりけるが。東寺竹田より勝軍して歸りける。六波羅の勢。三千餘騎に取巻れ。十七人は討れて。孫三郎一人を残りたりける。生て甲斐なき命なれ共。君の御大事是に限るまじ。一人あり共生殘て。後の御用にこそ立めと獨言して只一騎。西朱雀をさして引けるを印具駿河守の勢。五十餘騎にて追懸たり。其中に年の程廿計成若武者。只一騎馳寄て引て歸りける。妻鹿孫三郎に組むと近付て。鎧の袖に取付たる所を。孫三郎是を物共せず。長き肘を差延て鎧の總角を抓て中に提げ。馬の上三町計を行たりける。此武者然るべき者にてや有けん。われ討すなとて五十餘騎の兵跡に付て追けるを。孫三郎尻目にはたと睨で。敵も敵によるぞ。一騎なれば。我に近付て過す。欲からば是は是取せん。請とれと言て左の手に提げたる鎧武者を。

右の手に取渡して。あゝと投たりければ。跡ある馬武者六騎が上を投越て。深田の泥の中へ。見へぬ程こそ打籠たれ。是を見て五十餘騎の者共。同時に馬を引返し逸足を出して不逃たりける。赤松入道は。殊更今日の軍に。懇切たる一族の兵共も。所々にて八百餘騎討られければ。氣勞れ力落果て。八幡山崎へ又引返しけり

○主上自令修金輪法一給事付千種殿京合戦事

京都數々度の合戦に。官軍毎度打負て。八幡山崎の陣も已に小勢に成ぬと聞へければ。主上天下の安危何い有んと。宸襟を惱され。船上の皇居に壇を立られ天子自ら金輪の法を行はせ給ふ。其七ヶ日に當りける夜。三光天子。光を並て壇上に現し給ければ。御願忽に成就し給と。頼もしく思召れける。さらば頼て大將を差上せて。赤松入道に力を合せ。六波羅を攻べしとて六條の少將忠顯朝臣を。頭中將になし。山陽山陰兩道の兵の大將として。京都へ差向らる。其勢伯耆國を立し迄。僅に千餘騎と聞へしが。因幡。伯耆。出雲。美作。但馬。丹後。丹波。若狭の勢共馳加て。程あく廿万七千餘騎に成にけり。又第六の若宮は。元弘の亂の始。武家に囚われさせ給て。但馬國へ流されさせ給ひたりしを。其國の守護大田三郎左衛門尉。取立奉て。近國の勢を相催し。則丹後の篠村へ參會す。大將頭中將斜あらず悦で。則錦の御旗を立て。此宮を上將軍と仰ぎ奉て。

軍勢催促の令旨を成下されけり。四月二日宮篠村を御立有て。西山の峰の堂を御陣に召れ。相従ふ軍勢廿万騎。谷堂。葉室。衣笠。万石。大路。松尾。桂里に居餘て。半は野宿に充満たり。殿法印良忠の。八幡に陣を取。赤松入道圓心は。山崎に屯を張り。彼陣と千種殿の陣と。相去事僅に五十餘町が程あれば。方々牒合てころ。京都へと寄らるべかりしを。千種頭中將。我勢の多きを頼まれけん。又獨り高名にせんとや思はれけん。潜に日を定て。四月八日の卯刻に。六波羅へ不寄られける。あらず不思議や今日は佛生日とて。心有も心無も。灌佛の水に心を澄し。供花焼香に經を翻して。捨惡修善を事とする習あるに時日こそ多かるに。齋日にして合戦を始て。天魔波旬の道を學る。條心得難しと人々舌を翻せり。扱敵御方の士卒。源平互に交れり。笠印なくては。同士討も有ぬべしとて。白絹を一尺づゝ切て。風と云文字を書て。鎧の袖に不付させられける。是の孔子の詞に。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草に風を加る時は。偃すと云事なしと。云心なるべし。六波羅には敵を西に待ける故に。三條より九條迄。大宮面に塙を塗。機を撞て射手を上て。小路く。兵を千騎二千騎扣へさせて。魚鱗に進み。鶴翼に圍まん様をぞ謀りける。寄手の大將は誰と問に。先帝第六の若宮。副將軍は。千種頭中將忠顯の朝臣と聞へければ。扱は軍の成敗心憎からず。源は同じ。流れありとらへ共。江南の橋は。江北に移されて。

扱と成習あり。弓馬の道を守る武家の輩と。風月の才と事とする。朝廷の臣と戦を決せんに。武家勝すと云事有べからずと。各勇み進で。七千餘騎大宮面に打寄て。寄手遅じと待かけたる。去程に忠顯朝臣神祇官の前に扣へて。勢を分て。上は大舍人より下は七條迄。小路毎に。千餘騎宛差向て。責させらる武士の。要害を拵へて。射手を面に立て。馬武者を後に置たれば。敵の疼む所と見て。懸出く追立けり。官軍は二重三重に荒手を立たれば。一陣引ば。二陣入替り。二陣打負れば三陣入替て。人馬に息をつかせ。煙塵天を掠めて。責戦ふ。官軍も武士も諸共に。後によて命を輕じ。名を惜て死を争ひしかば。御方を助て進ひはわれ共。敵に遇て退く無りけり。斯ては早晚勝負有べし共。見へざりける所に。但馬丹波の勢共の中より。兼て京中に忍で人を入置たりける間。此彼に火を懸たる。折節辻風烈しく吹て。猛煙後に立覆ひければ。一陣に支へたる武士共。大宮面を引退て。猶京中に扣へたり。六波羅是を聞て。弱からん方へ向んとて。用意に残し留めたる。佐々木判官時信。隅田。高橋。南部。下山。河野。陶山。富樫。小早川等に。五千餘騎を差そへて。一條二條の口へ向らる。此荒手に懸合て。但馬の守護太田三郎左衛門討れにけり。丹波國の住人狹野彦六と。足立三郎の五百餘騎にて。四條油小路迄攻入たりけるを。備前國の住人。薬師寺の八郎。中吉十郎。丹兒玉が勢共。七百餘騎相支へて戦けるが。二條の手破られ

ぬとみへければ。萩野足立も諸共に。御方の負して引廻す。金持三郎は。七百餘騎にて七條東洞院迄。責入たりけるが。深手を負て引兼ねるを。播磨國の住人。肥塚が一族。三百餘騎が中に取籠て。出し抜て生捕てけり。丹波國神池の衆徒は。八十餘騎にて五條西洞院迄責入。御方の引をも知で戦ひけるを。備中國の住人。庄の三郎。眞壁の四郎。三百餘騎にて取籠。一人も餘さず打てけり。方々の寄手或は討れ或は破られて。皆桂川の邊迄引たれ共。名和の小治郎と。兒島備後三郎とが向ひたりける。一條の寄手は未引ず。懸つ返つ時移る迄戦たり。防は陶山と河野にて。責は名和と兒島なり。兒島と河野とは。一族にて名和と陶山とは知人なり。日比の詞をや恥たりけん。後日の難をや思けん。死ては尸を晒す共。逃て名をば失はじと。互に命を惜まず喚ぎ叫で争戦ひける。大將頭中將は。内野迄引れたりけるが。一條の手猶相支へて。戦ひ半ありと。聞へしかば。又神祇官の前へ引返して。使を立て。兒島と名和を呼返されけり。彼等二人。陶山と河野とに向て。今日已に日暮候ぬ。後日にこそ又見參に入めと色代して。兩陣共に引分て各東西へ去にけり。夕陽に及で。軍散じければ。千種殿は本陣峯の堂に歸て。御方の手負討死を注さるゝに。七千人に餘れり。其中に。宗徒と頼まれたる。大田金持の一族以下。數百人討れ畢ぬ。仍て一方の侍。大將共。なるべき者とや思われけん。兒島備後三郎高徳を呼寄て。敗軍の士力疲

て再び戦ひ難し。都近き陣は。悪かりぬと覺れば。少し境を阻て陣を取。重て近國の勢を集て。又京都を攻ばやと。思ふは何に。計ふると宣へば。兒島三郎聞もあへず。軍の勝負は。時の運に依事にて候へば。負るも必ずしも恥ならず。只引まじき處を引かせ。懸べき所を懸ざるを。大將の不覺とは申なり。何かれば赤松入道は。僅に千餘騎の勢を以て。三箇度迄京都へ責入叶はねば。遂に入幡山崎の陣をば去て候ぞ。御勢縦ひ。過半討れて候共。殘る所の兵。猶六波羅の勢よりは多かるべし。此御陣後の深山にて前は大河なり。敵若寄來らば好む所の取手なるべし。穴賢此御陣を。引んと思召事然るべからず候。但し御方の疲れたる弊に乗て。敵夜討に寄る事もや。候らんずらんと存候へば。高徳は七條の橋爪に陣を取て。相待候べし。御心安からんずる兵共を。四五百騎が程。梅津法輪の渡りへ差向て。警固をさせられ候へと申置て。則兒島三郎高徳は。三百餘騎にて。七條の橋より西にぞ陣を堅めたる。千種殿は。兒島に云恥しめられて。暫しは峰の堂に御座けるが。敵若夜討にや寄んずらんと。云つる言に驚されて。彌臆病心や付給けん。夜半過る程に。宮を御馬に乗奉て。葉室の前を直達に。八幡を差してぞ落られける。備後三郎斯る事とは思も寄す。夜更方に。峰の堂を見遣ば。星の如くに輝見へつる烽火。次第に數消て。所々に焼荒めり。是は哀れ大將の。落給ぬるやらんと怪みて。事の様を見ん爲に。葉室大路より峯の

堂へ上る處に。萩野彦六朝忠。淨住寺の前行合て。大將已に夕方子刻に落させ給て候間。力なく我等も。丹波の方へと志て。罷下候也。いざさせ給へ。打連申さんと云ければ。備後三郎大に怒て斯る臆病の人を大將と憑みけるこそ越度され。去ながらも。直に事の様を見ざらんは。後難も有ぬべし。早御通り候へ。高德は何様峰の堂へ上て。宮の御跡を見奉て。追付申へさすと云て。手の者兵をば。麓に留て。只一人落行勢の中を押分く。峯の堂へ上りける。大將の御座つる。本堂へ入て見れば。能遠て落られけるよと見へて。錦の御旗鎧直垂迄捨られたり。備後三郎腹を立て。哀れ此大將。何成堀峪へも落入て。死給へかしと獨り言して。且くは猶堂の縁に切齒をして立たりけるが。今は扱こそ手の者共も待兼たるらめと思ひければ。錦の御旗計を巻て下人に持せ。急ぎ淨住寺の前へ走り下り。手の者打連て。馬を早めければ追分の宿の邊にて。萩野彦六に不追付ける。萩野の丹波丹後出雲伯耆へ落ける勢の。篠村稗田邊に打集て。三千餘騎有けるを相伴ひ。路次の野伏を追拂ふて。丹波國。高山寺の城にぞ楯籠りける。

○谷の堂炎上の事

千種頭中將は。西山の陣を落給ぬと聞へしかば。翌日四月九日。京中の軍勢。谷の堂。峯の堂以下。淨住寺。松尾。万石大路。葉室。衣笠に乱入を。佛閣神殿を打破り。僧坊民屋を追捕し。財寶を悉く運び取て後。在家に火を懸たれば。折節魔風烈しく吹て。淨住寺。最福寺。葉室。衣笠。二尊院。總じて堂舎三百餘箇所。在家五千餘宇。一時に灰燼と成て。佛像神躰。經論聖教忽ちに。寂滅の煙と立上り。彼谷の堂と申へ。八幡殿の嫡男對馬守義親が嫡孫。延朗上人造立の靈地あり。よの上人幼稚の昔より。武略累代の家を離れ。偏に寂寞無人の室を占給し後。戒定惠の三學を兼備して。六根清淨の功徳を得給ひしかば。法華讀誦の窓の前には。松尾の明神坐列して。耳を傾け。眞言秘密の扉の内には。總角の護法手を束て奉仕し給ふ。斯る有智高行の上人。草創せられし砌なれば。五百餘歳の星霜を経て。末世澆漓の今に至る迄。智水流れ清く法燈光明らかなり。三間四面の輪藏には。轉法輪の相に表して。七千餘卷の經論を納め奉られけり。奇樹怪石の池上には。都卒の内院を移して。四十九院の樓閣を並ぶ。十二の欄干珠玉天に攀げ。五重の塔婆金銀月を引。恰も極樂淨土の。七寶莊嚴の有様も。斯やと覺る計なり。又淨住寺と申は戒法流布の地。律宗佐業の砌あり。釋尊御入滅の刻。金棺未閉ざる時捷疾鬼と云鬼神潛に。雙林の下に近付て。御牙を一つ。引缺て是を取。四衆の御弟子。驚き見て。是を留めんとし給けるに。片時が間に。四萬由旬を飛越て。須彌の半服四玉天へ逃上る。韋駄天追詰奪取。是を得て其後。漢土の道宣律師に與へらる爾しより。以來相承して。我朝に渡せしを。嵯峨の天皇の御宇に。始て此寺に安置し奉

らる。偉なるかき。大聖世尊滅後二千三百餘年の以後。佛肉猶留て。廣く天下に流布する事普し。斯る異瑞奇特の大伽藍を。咎なくして。滅ぼされければ。偏に武運の盡べき前表哉と。人皆唇を翻しけるが。果して幾程もあらざるに。六波羅皆番馬にて亡び。一類悉く鎌倉にて失ける。事ころ不思議され。積悪の家には。必ず餘殃有とは。箇様の事をぞ申べきと思はぬ人もなかりけり

○足利殿御上洛の事

先朝船上に御座有て。討手を差上せられ。京都を責らるゝ由。六波羅の早馬頻りに打て。事既に難義に及由。関東に聞へければ。相摸入道大に驚て。さらば重て大勢を差上せて。半は京都を警固し。宗徒は船上を責べしと評定有て。名越尾張守を大將として。外様の大名廿人を催さる。其中に足利治部太輔高氏は。所勞の事有て。起居未快ざりけるを。又上洛の其數に入て。催促度々に及べり。足利殿此事に依て。心中に憤り思はれけるは。我父の喪に居て。三月を過ぎれば。悲歎の涙未乾かず。又病氣身を侵して負薪の憂未だ休ざる處に。征伐の役に隨ひて相催さるゝ。事社遺恨され。時移り事變じて貴賤位を易といへ共。彼は北條四郎時政が末孫なり。人臣に下て年久し我は源家累葉の族なり。王氏を出て遠からず此理を知あらば。一度は君臣の義をも存すべしに是迄の沙汰に及ぶ事。偏に身の不肖による故なり所詮重て。尙上洛の催催を加る程あらば。一家を盡して上洛し。先帝の御方に參て。六波羅を責落して。家の安否を定べき者と。心中に思立れけるをば。人更に知事なかりけり。相摸入道はかゝるべき事とは思ひ寄す。工藤佐衛門尉を使にて。御上洛延引心得られすと。一日の中に兩度迄社責られけれ。足利殿は。反逆の企。已

に心中に思定られてければ中々異儀に及ばず。不日に上洛仕るべきと返答せられける。則夜を日に續で打立れけるに御一族郎従の申に及ばず。女姓幼稚の君達迄も残す。皆上洛有べしと聞へければ。長崎入道圓喜怪み思て。急ぎ相摸入道の方に参りて。申けるは誠にて候やらん。足利殿こそ御臺君達迄皆引供し進せて。御上洛候なれ。事の躰怪く存候。加様の時は御一門の疎ならぬ人にだに。御心置れ候べし。況や源家の貴族として。天下の權柄を捨給へる事年久しければ。思召立事もや候らん。異國より我朝に至る迄。世の亂れたる時は。霸王諸侯を集て。性を殺し。血を喫て貳心おからん事を盟ふ今の世の起證文是なり。或は又其子を質に出して。野心の疑を散す木曾殿の御子。清水の冠者を。大將殿の方へ出されき。加様の例を存候にも。いか様足利殿の御子息と。御臺とをば。鎌倉に留申されて一紙の起證文を書せ。進らざるべきとこそ存候へと申ければ。相摸入道。實もどや思はれけん。頼て使者を以て申遣されけるは。東國は未世靜にて。御心安かるべきにて候。幼稚の御子息をば。皆鎌倉に留置進せられ候べし。次に兩家の躰を一にし。水魚の思をなされ候上。赤橋相州御縁に成候。彼は何の不審か候べきとされ共。諸人の疑を散せん爲にて候へば。恐れながら一紙の誓言を留置れ候はん事。公私に付て然るべくこそ存候へと。仰られたりければ。足利殿腹胸彌深かりけれ共。憤りを押へて氣色にも出されず。是より

御返事を申べきとて。使者とば返されてけり。其後舍弟兵部太輔殿と呼進せられて。此事何有べしと。意見を問るに。且く思案して申されけるは。今此一大事を思召立事。全く御身の爲に非ず。只天に代て無道を誅し君の御爲に不義を退けんとなり。其上誓言は。神も受ずとこそ申習して候へ。設ひ偽て起請文の詞載られ候共佛神ぞか。忠烈の志を守せ給ひ候べき。中づく御子息と御臺とは。鎌倉に留置進せられん事。大義の前の小事にて候へば強に御心を煩はざるべきに非ず。君達未御幼稚に候へば自然の事も有ん時は。其爲に少々残し置る、郎従共。何方へも抱掲へて。隠し奉り候なん。御臺の御事は又赤橋殿とても御坐候はん程は。何の御痛敷事か候べき。大行は細謹を願とこそ申候へ。是等程の小事に。猶豫有べきに非ず。兎も角も相摸入道の。申さん儘に隨て。其不審散せしめ。御上洛候て後。大義の御計略を廻らざるべしとこそ。存候へと申されければ。足利殿此道理に服して。御子息千壽王殿と。御臺赤橋相州の御妹とをば。鎌倉に留置奉て。一紙の起請文を書て。相摸入道の方へ遣はさる。相摸入道是に不審を散じて。喜悅の思をおし。高氏を招聘有て。様々賞飭共有しに。御先祖累代の白旗あり。是は八幡殿より。代々の家督に傳へて。執せらるゝ重寶にて候けるを故頼朝卿の後室。二位の禪尼相傳して。當家に。今迄持所なり。希代の重寶と申あがら。他家に於て其詮なく候か。是を今度の餞送に進

じ候あり。此旗を差せて。凶徒を急ぎ御退治候へとして。錦の袋に入ながら。自ら是を進せらる。其外乗替の御馬にとて。飼たる馬に。白鞍置て。十匹。白輻輪の鎧十領金作の太刀一添て引れたりけり。足利殿御兄弟吉長。上杉。仁木。細川。今川。荒川。以下の御一族廿二人。高家の一類四十三人。都合其數三千餘騎元弘三年三月廿七日鎌倉を立。大手の大將と定られ名越尾張守高家に三日先立て。四月十六日に京都に付給ふ

○山崎攻の事付久我噉合戦の事

兩六波羅は。度々の合戦に打勝ければ。西國の敵恐るゝに足すと欺きながら。宗徒の勇士と憑れたりける。結城九郎左衛門尉は敵に成て。山崎の勢に加りぬ。其外國々の勢共。五騎十騎。或は轉漕に疲て國々に歸り。或は時の運を計て敵に屬しける間。宮方は負れ共。勢彌重なり。武家は勝共。兵日に減せり。斯では如何有べきと世を危む人多かりける處に。足利名越の兩勢。又雲霞の如く上落したりければ。いっしか人の心替て。今は何事か有べきと。色を直して勇み合へり。斯りける所に。足利殿の京着の翌日より。伯耆の船上へ。潜に使を進せて。御方に參るべき由申されたりければ。君殊に敬感有て。諸國の官軍を相催し。朝敵を追罰すべき由の。繪旨を成下されける。兩六波羅も。名越尾張守も。足利殿に。斯る企有とは。思ふ寄べき事ならねば。

日々に參會して。八幡山崎を賣らるべき。内談評定。一々に心底を殘さず盡されけることはかなけれ。大行の路能く車を摧若人の心に比すれば。夷なる途なり。巫峽の水能舟を覆す若人の心に比すれば。是は靜る流なり。人心の好惡甚だ常あらずとは云ながら。足利殿は。代々相州の恩を戴き。徳を荷て。一家の繁昌恐くば。天下の人肩を並べくも無りけり。其上赤橋前相摸守の縁に成て。公達餘多出來給ぬれば。此人よも貳はおはせじと。相摸入道混らに。憑れけるも理なり。四月廿七日には。八幡山崎の合戦と。兼てより定られければ。名越尾張守。大手の大將として。七千六百餘騎。鳥羽の作道より向はる。足利治部太輔高氏は搦手の大將として。五千餘騎。西岡より向はれける。八幡山崎の官軍是を聞て。さらば難所に出合て不慮に戦を決せしめよとて。千種頭中將忠顯朝臣。五百餘騎にて。大渡の橋を打渡り。赤井河原に扣らる。結城九郎左衛門尉親光は。三百餘騎にて。狐川の邊に向ふ。赤松入道圓心は。三千餘騎にて淀古河久我噉の南北。三個所に陣を張是皆強敵を拉ぐ氣。天を廻し。地を傾んとする機をとき。勢を呑て云共。今上りの東國勢。一万餘騎に對して。戦べきと見へざりけり。足利殿は兼て内通の仔細有れ共。若侍やし給らんとて。坊門少將雅忠朝臣は。寺戸と西岡の野伏共。五六百人。駈催して。岩藏邊に向され。去程に。搦手の大將足利殿は。未明に京都を立給ぬと。披露有れ

ば。大手の大将。名越尾張守。扱のはや人に先を懸られぬと。安からず思て。さしも深き久我野の。馬の足も立ぬ。泥土の中へ馬を打入。我先にとぞ進ける。尾張守は。元來氣早の若武者なれば。今度の合戦。人の耳目を驚す様に。名を揚する物をと。兼て有増の事なれば。其日の馬物の具。笠符に至る迄傍を輝て出立れたり。花曇子の濃紅に染たる鎧直垂に紫糸の鎧金物繁く打たるを。透間もあく。着下て。白星の五枚甲の。吹返しに日光月光の二天子を金と銀にて。掘透して打たるを。猪頸に着成し。當家累外の重寶に。鬼丸と云ける金作の圓鞘の太刀に。三尺六寸の太刀を帶添。たかうすへ尾の矢。卅六差たるを。管高に負あし。黄死毛の馬の太く逞きに。三本唐笠を金具に磨たる鞍を置。厚總の鞆の燃立計成を懸。朝日の影に輝て光渡て見へたるが。動れば。軍勢より先に進み出て。當を拂て懸られければ。馬物の具の。躰軍立の様。今日の大手の大将は。是かんとらぬ敵は無りけり。されば敵も。自餘の葉武者共には目を懸す。此に開き合。彼に攻合て。是一人を討んとしけれ共。鎧よければ。裏かゝする矢も無し。打物達者なれば。近付敵を切て落す。其勢ひ燦然たるに辟易して。官軍數万の士卒。已に開き靡さぬと見へたりける。爰に赤松の一族に。佐用左衛門三郎範家とて。強弓の矢繼早野伏軍に心利て。卓宣公が秘せし處を。我物に得たる兵あり。態物の具を解て。歩立の射手に

なり。睥を傳ひ。藪を潜て。とある睥の陰にぬはれ臥。大将に近付て。一矢ねらわんとぞ待たりける。尾張守は。三方の敵を追まくり鬼丸に付たる血を。笠符にて押拭ひ。扇開き仕ふて。思事もなげに控たる所を。範家近々どねらひ寄て引攻て丁と射。其矢思ふ矢坪を達す。尾張守が。胃の眞甲のはづれ。眉間の眞中に當て。腦を碎骨を破て。頸の骨のはづれへ。矢先白く射出したりける間さしもの猛將かれ共。此矢一筋に弱て。馬より眞倒にどろと落。範家胡籙を叩て。矢叫びを成し寄手の大将。名越尾張守をば範家が。只一矢に射殺したるぞ。續や人々と呼はりければ。引色になりつる官軍共。是に機を直し。三方より勝時と作て攻合す。尾張守の郎從七千餘騎。まどろに成て引けるが。或は大将を討せて。何くへか歸るべきとて。引返して討死するもあり。或は深田に馬をばせそうて叶はで自害するもあり。されば狐川の端より。鳥羽の今在家まで。其道五十餘町が間には。死人尺地もなく伏にけり

○足利殿大江山を打越給事

大手の合戦は。今朝辰刻より始て。馬煙東西にあびき聞聲天地を響して攻合けれ共。搦手の大将足利殿は。桂川の西の端に下居て。酒盛してぞおはしける。斯て數刻を経て後。大手の合戦に。寄手打負て。大将已に討れぬと告たりければ。足利殿。さらばいざや山を越んとて。各馬に打

乗て。山崎の方を。遙の餘所に見捨て。丹波路を西へ篠村を指して。馬を早められける。爰に備前國の住人中吉十郎と。攝津國の住人奴可四郎とは。兩陣の手に依て。搦手の勢の中に在けるが。中吉十郎。大江山の下にて。道より上手に馬を打撃て。奴可四郎を呼のけて云けるは。心得ぬ様哉。大手の合戦は。火を散して。今朝の辰刻より始りたれば。搦手の。芝居の長酒盛にて扱休ぬ。結句名越殿討れ給ぬと聞へぬれば。丹波路を差て馬を早め給ふは。此人如何様野心を挟み給かと覺るぞ。さらんに於ては。我等何く迄か相従ふべき。いざや是より引返して。六波羅殿に此由を申さんと云ければ。奴可四郎妙も宜たり。我も事の跡怪くは存ながら。是も又如何成る配立か有らんと。兎角案じける間に。早今日の合戦には迦れぬる事こそ安からぬ。但し此人。敵に成給ぬと見ながら。只引返したらん。餘りに云甲斐なく覺れば。いざ一矢射て歸らんと云儘に。中指取て打番。轟懸て。かさへ打て廻さんとしけるを。中吉如何成事ぞ。御邊は物に狂ふか。我等儘に二三十騎にて。あの大勢に懸合て犬死したらんは本意か。嗚呼の高名はせぬに如す。只事故なく引返して。後の合戦の爲に命を全ふしたらんこそ。忠義を存たる者ありけりと。後迄の名も留んずれと。再往制止しければ。實もどぞ思けん。奴可四郎も中吉も。大江山より馬を引返して。六波羅へころ打歸りけれ。彼等二人馳參て。事の由を申ければ。兩六波羅の。楯矛共懸

まれたりける。名越尾張守は討れぬ。是ぞ骨肉の如くなれば。さり共貳はればせじと。水魚の思をさされつる。足利殿さへ敵に成給ぬれば。憑む木下に。雨のたさらぬ心地して。心細きに付ても今迄付纏ひたる兵共も。又さころはわらめと。心の置れぬ人もあし

○足利殿篠村に着御則國人馳進事

去程に。足利殿篠村に陣を取て。近國の勢を催されけるに。當國の住人に。久下彌三郎時重と云者。二百五十騎にて最前に馳參る。其旗の紋笠符に。皆一番と云文字を書たりける。足利殿是を御覽じて。怪く覺しければ。高右衛門尉師直を召れて。久下の者共が。笠印に一番と云字を書たるは。元來の家の紋か。又是へ一番に參たりと云符かと尋給ければ。師直畏て。由緒有紋にて候。彼が先祖武藏國の住人。久下二郎重光。頼朝大將殿。土肥の杉山にて。御旗を揚られて候時。一番に馳參て候けるを。大將殿御感候て。若我天下を持たば。一番に恩賞を行ふべしと仰られて。自一番と云文字を書て給候けるを頼て其家の。紋と成して候と答申ければ。扱は是が最初に參たるこそ。當家の吉例されとて。御賞斷殊に甚しかりけり。元來高山寺に楯籠りたる。足立。荻野。兒嶋。和田。位田。本庄。平庄の者共計こそ。今更人の下風に立べきに非ずとて。丹波より若狭へ打越て。北陸道より。攻上らんとは企けん。其外久下。長澤。志宇知。山

内。葦田。余田。酒井。波賀野。小山。波々伯部。其外近國の者共。一人も残らず馳參ける間。篠村の勢程多く集て。其數既に二万三千餘騎に成にけり。六波羅には是を聞て。扱は。今度の合戦天下の安否たるべし。若自然に打負る事有ば。主上上皇を取奉て。關東へ下向し鎌倉に都を立て。重て大軍を揚。凶徒を追討すべしと評定有て。去る三月より。北方の館を御所にしつらひ。院内を行幸成し奉らる。梶井二品親王は。天台座主にて坐ば。縦ひ轉反す共。御身に於ては何の御怖畏か有べきなれ共。當今の御連枝にて坐ば。且は玉躰に近付進せて。寶祚の長久をも祈申さんとにや。是も同く六波羅へ入せ給ふ。加之あらず。國母。皇后。女院。北政所三臺。九卿。桃棘。三家の臣文武百司の。官並に竹苑門徒の大衆。北面以下。諸家の侍兒。女房達に至る迄。我もくと參集ける間。京中は忽にさびかへり。嵐の後の木の葉の如く。己が様を散行ば。白河はいつしか榮て。花一時の盛を成せり。是も幾程の夢あらん。移り變る世の有様。今更驚るゝも理りあり。夫天子は。四海を以て家とすと云へり。其上六波羅とて。都近き所あれば。東洛渭川の行宮とまで御心を。傷しめらるべきに非ざれ共。この君御治天の後。天下遂に穩あらず。剩へ百寮忽に。外都の塵に交りぬれば。是偏に帝徳の天に背ぬる故なりと。罪一人に歸して。主上殊に歎き思召れければ。當は五更の天に至る迄。夜のおとにも入せ給はず。元老

智化の賢臣共を召れて。只堯舜湯武の舊き跡をのみ。御尋有て。曾て怪力亂神の徒ある事は。聞召れず。卯月十六日中の申成りしか共。日吉の祭禮もなければ。國津御神も浦さびて。御覽の錦鱗徒に。湖水の波に撥辣たり。十七日は中の酉され共。加茂の御生所も無ければ。一條の大路人すみて。車を争ふ所も無し。銀面空しく塵積て。雲珠光を失へり。祭りは。豐年にも増せず。凶年にも減せずとこそいへるに。開闢より以來。闕如なき。両社の祭禮も。此時に始て絶ぬれば。神慮も如何と測難く。恐れ有べき事共なり扱官軍は。五月七日。京中に寄て。合戦有べき事定められければ。篠村。入幡。山崎の先陣の勢。宵より陣を取寄て。西は梅津桂の里。南は竹田伏見に篝を燒。山陽山陰の兩道の已に此の如し。又若狹路を経て。高山寺の勢共。鞍馬路高橋より寄る共聞あり。今は僅に。東山道計こそ開きたれ共。山門猶野心を合る最中なれば。勢多をも差塞ぎぬらん。籠の中の鳥網代の魚の如くにて漏べき方もあければ。六波羅の兵共。上には勇める氣色なれ共。心は下に仰天せり。彼雲南万里の軍。戸々に三丁有れば。一丁を抽んつと云へり。況や又。千破劔程の。小城一つを攻むとて諸國の勢を盡て向られたれ共。其城未落る先に。禍已に藩牆の中より出て。義旗忽に。長安の西に近付ぬ。防がんとするに勢少く救はんとするに路塞れり。哀れ兼てより。斯るべしとだに知たれば京中の勢をば。さのみすかすまじかりし

物をど。兩六波羅を始として。後悔すれ共甲斐なき。兼々六波羅に議しけるは。今度諸方の敵
牒し合て。大勢にて寄るれば。平場の合戦計にて叶まじ。要害を構て。時を馬の足を休め。
兵の機を扶て。敵近付ば。懸出く戦べしとて。六波羅の館を中に籠て河原面七八町に。堀を
深く掘て。鴨川を懸入たれば。昆明地の春の水。西日を沈て瀟瀟たるに異ならず。殘三方には。
芝築地を高く築て。櫓を搔双べ逆木を繁く引たれば。鹽州の受降城も。斯やと覺て夥し誠に城
の構は。謀有に似たれ共。智の長せるにあらず。劔閣險しといへ共。是に憑者厥く。根を深し滯
を固するゆへんに非ざるあり。洞庭深しといへ共。是を負者は北ぐ。人を愛し國を治るゆへんに非
ざる也とかや。今已に天下二に分れて。安危此一舉に懸たる合戦なれば。糧を捨。舟を沈る。謀
をこそ致さるべきに。今日より頼て後足を踏で。僅の小城に楯籠らんと兼て心をつかはれける。
武略の程こそ悲しけれ

○高氏願書を篠村八幡宮に籠らるゝ事

去程に明れば五月七日の寅刻に足利治部太輔高氏朝臣。二万五千餘騎を率して。篠村宿を立給。
夜未深かりければ。閑に馬を打て。東西を見給ふ所に。篠村宿の南に當て。陰森たる古柳疎槐の
下に。社壇有と覺て。燒荒たる燎の影の風なるに。宜禰が袖振鈴の音幽に聞へて。神宿たり。

如何ある社とは知ぬ共。戰場に越く首途さればとて。馬より下甲を脱で。靈祠の前に跪き今日の
合戦事故なく朝敵を退治する。擁護の力を加へ給へど。祈禱を凝してぞ坐ける。時に霽しける
巫に。此社は如何ある神を崇奉りたるぞと問給ひければ。是は中頃。八幡を遷し進せてより以
來。篠村の新八幡と。申候ありとぞ。答へ申ける。足利殿。扱は當家尊崇の靈神にて御座けり。
機感最相應せり。宜に隨て一紙の願書を奉ばやと宣ひければ。匹壇妙玄鏡の引合より。矢
立の硯を取出して。筆を扣へて是を書其詞に云

敬白 祈願事

夫以八幡大菩薩者。聖代前列之宗廟。源家中興之靈
神也。本地内證之月高懸于十萬億土之天垂跡。外融
之光明冠於七千餘座之上。觸緣雖分化。聿未享非禮
之奠。垂慈雖利生。偏期宿正直之頭。偉哉爲其德矣。舉
世所以盡誠爰承久以來。當棘累祖之家臣。平氏末裔
之邊鄙。恣執四海之權柄。橫振九代之猛威。剩今遷聖

主於西海之浪、困貫頂於南山之雲、惡逆之甚、前代未聞也。是為朝敵之最、為臣之道不致命乎？又為神敵之先、為天之理不下誅乎？高氏苟見彼積惡、未遑顧、匪躬將以魚肉、非偏當刀俎之利、義卒戮力、張旅於西南之日、上將軍鳩嶺下、臣軍篠村共在于瑞籬之影、同出乎擁護之懷、函蓋相應、誅戮何疑、所仰百王鎮護之神約也。懸勇於石馬之汗、所憑累代歸依之家、運也寄奇於金鼠之咀、神將與義戰、輝靈威德、風加草而靡敵、於千里之外、神光代劍、而得勝於一戰之中、丹精有誠、立鑒莫誤矣。敬白。

元弘三年五月七日

源朝臣高氏敬白

と予讀上たりける。文章玉を綴て。詞明らかに理濃きれば。神も定て納受し御坐らんと。聞人

皆信を凝し。士卒悉く。憑を懸奉りけり。足利殿自ら筆を執て判を居給ひ。上差の鏑一筋添て寶殿に納められければ。舍弟直義朝臣を始として。吉良。石堂。仁木。細川。今川。荒河。高。上杉。以下相順ふ人々。我もくと上矢一づ、獻りける間。其矢社壇に充滿て。塚の如くに積上たり。夜已に明ければ。先陣進で後陣を待。大將大江山の峠を打越給ける時。山鳩一番飛來て。白旗の上に翻翻す。是八幡大菩薩の。立翺て護らせ給ふ驗なり。此鳩の飛行んするに任て向ふべしと下知せられければ。旗差馬を早めて鳩の跡に付て行程に。此鳩閑に飛で大内の舊跡神祇官の前なる。橋木にぞ留りける。官軍此奇瑞に勇で。内野をさして馳向ける。道すがら敵五騎十騎。旗を卷甲を脱で降参す。足利殿篠村を出給し時は僅に二万餘騎有しが。右近の馬場を過給へば。其勢五万餘騎に及べり。

○六波羅攻の事

去程に。六波羅には。六万餘騎を三手に分て。一手をば神祇官の前に引へさせて。足利殿を防せらる。一手をば東寺へ差向て。赤松を防せらる。一手をば伏見の上へ向て。千種殿の寄らる。竹田伏見を支らる。己の刻の始より。大手搦手同時に軍始て。馬煙南北に靡き。時の聲天地を響かす。内野への。陶山と河野とに。宗徒の勇士。二万餘騎を副て向られたれば。官軍も左右さく

懸入す。敵も輒く懸出す。兩陣互に支て。只矢軍に時をぞ移しける。爰に官軍の中より。檣句の
 鎧に。薄紫の母衣懸たる武者只一騎。敵の前に馬を懸居て。高聲に名乗けるは。其身人數あら
 ねば。名を知人よもあらじ。是は足利殿の御内に設樂五郎左衛門尉と申者なり。六波羅殿の御内
 に我と思はん人あらば。懸合て手柄の程をも。御覽せよと云儘に。三尺五寸の太刀を抜。甲の眞
 甲に差かざし。誠に矢坪少く馬を立て。扣へたり。其勢ひ一騎當千と見へたれば。敵御方互に
 軍を止て見物す。爰に六波羅の勢の中より。年の程五十計なる老武者の黒絲の鎧に。五枚甲の緒
 を縮て。白栗毛の馬に。青總懸て乗たるが。馬をしづくと歩ませて。高聲に名乗けるは。其身
 愚蒙ありといへ共。多年奉行の數に加つて末座を汚す家あれば。人は定て。筆取きんと侮て。あ
 はぬ敵とぞ思給らん。然りといへ共我等が先祖を云へば。利仁將軍の氏族として。武略累業の家
 業なり。今某十七代の末孫に。齋藤伊豫房玄基と云者なり。今日の合戦。敵御方の安否あれば。
 命を何の爲に惜ひべき。死殘る人あらば。我忠戦を語つて。子孫に留むべしと云捨て互に馬を懸
 合せ鎧の袖とくを引連て。むすど組でとうと落。設樂は力勝りなれば。上に成て。齋藤が首を
 掻く。齋藤は心早き者なりければ。擧様に設樂を三刀刺。何れも剛の者なりければ死て後迄も。互
 に引組たる手を放たず共に刀を突立て。同じ枕におも臥たりける。又源氏の陣より。紺の唐綾威

の鎧に。鐵形打たる冑の緒をしめ。五尺餘の太刀を抜て肩に懸。敵の前半町計に馬を懸寄て。高
 聲に名乗けるは。八幡殿より以來。源氏代々の侍として。流石に名は隠され共。時に取て名を
 知れねば。然るべき敵に逢難し。是は足利殿の御内に。大高二郎重成と云者なり。先日度々の合
 戦に。高名したりと聞ゆる。陶山備中守河野對馬守はおはせぬるか。出合給へ。打物して。人に
 見物せさせんと云儘に。手綱搔操。馬に白沫かませて扣へたり。陶山は東寺の軍強しとて。俄に
 八條へ向ひたりければ。此陣には無し。河野對馬守計。一陣に進で有けるが。大高に詞を懸られ
 て。元來たまらぬ懸武者あれば。なにかは少しもためらふべき。通治是に有と云儘に。大高に組
 んど相近付。是を見て河野對馬守が猶子に。七郎通遠とて。今年十六になりける若武者。父を討
 せじと思けん。眞前に馳塞て。大高に押並で。むすど組。大高河野七郎が總角を擲で。中に
 提げ己程の小者と組で。勝負はすまじきとて。差わけて鎧の笠符を見るに。其紋傍折敷に三文
 字を書て付たりけり。扱は是も河野が子か甥にてぞ有けんと打見て。片手打の提切に。諸膝懸て
 切て落し。弓長三杖計投たりける。對馬守。最愛の猶子を目の前に討せて。なじかは命を惜むべ
 き。大高に組んと。諸鎧を合て馳懸る所に。河野が郎等共是を見て。主を討せじと。三百餘騎に
 て喚て懸る。源氏又大高を討せじと。一千騎にて喚て懸る。源平互に入亂れて。黒煙を立て責戦

ふ。官軍多く討れて。内野へばつと引ば。源氏荒手を入替て戦に六波羅勢若干討て河原へさつと引ば。平氏荒手を入替て。此を先途と戦ふ。一條二條を東西へ。追つ返しつ。七八度が程を揉合たる。源平兩陣諸共に。互に命を惜まねば。剛臆何れとは見へざりけれ共。源氏は大勢なれば。平氏遂に打負て。六波羅を差て引退東寺へは。赤松入道圓心。三千餘騎にて寄懸たり。櫻門近く成ければ。信濃守範資。鎧踏張。左右を顧て誰か有。あの木戸逆木引破て捨よと下知しければ。宇野。柏原。佐用真島の。早雄の若者共。三百餘騎馬を乗捨て。走り寄り。城の構を見渡せば。西は羅生門の礎より。東へ八條河原邊迄。五六八九寸の。琵琶の甲。安郡なんぞを踏貫て。したたかに塀を塗。前には亂杭逆木を引懸て。廣さ三丈餘に堀をほり。流水をせき入たり。飛濱らんとすれば。水の深さの程を知らず。渡らんとすれば。橋を引たり。如何せんと案じ煩ひたる所に。播磨國の住人妻鹿孫三郎長宗。馬より飛て下り。弓を差下して。水の深さを探るに。裏頭僅に残りたり。扱ひ我長は立んずる物と思ひければ。五尺三寸の太刀を抜て肩に掛け。貫脱で投捨。かつばと飛濱りたれば。水は胸板の上へも揚らず。跡に續いたる。武部七郎是を見て。堀は淺かりけるぞとて。長五尺計の小男が。是非なく飛入たれば。水は甲を越たりけり。長宗屹と見返して。我總角にとり付て揚れと云ければ武部七郎。妻鹿が鎧の上帯を踏で。肩に乗揚り。一刻々て向

の岸にぞ付にける。妻鹿からくくと打笑ひて。御邊の我を橋にして渡たるや。いぞ其堀引破て捨んと云儘に。岸より上へつと刎上り。堀柱の四五寸餘て見へたるに。手を懸。ゑいやりと引に。一二丈堀上て。山の如くなる揚土壁と。共に崩て。堀は平地に成にけり。是を見て築垣の上。三百餘箇所。搔双べたる櫓より。差攻引攻射ける矢。雨の降よりも猶滋し長宗が鎧の菱縫甲の吹返しに立所の矢。少々折懸て高櫓の下へつと走入。兩金剛の前に。太刀を倒につき齒咀して立たるは。何れを二王。何れを孫三郎共分兼たり。東寺。西八條。針唐橋に引へたる。六波羅の兵一万餘騎。木戸口の合戦強と騒で。皆一手になり。東寺の東門の脇より。濕雲の雨を帯て。暮山を出たるが如く。まつしぐらに打出たり。妻鹿も武部もすはや討れぬと見へければ。佐用兵庫助。得平源太。別所六郎左衛門。五郎左衛門。相懸りに懸て。面も振ず。戦たり。あれ討すな源原とて。赤松入道圓心。嫡子信濃守範資。次男筑前守貞範。三男律師則祐。真島。上月。菅家。衣笠の兵三千餘騎。拔建てぞ懸ける六波羅の勢一万餘騎。七條八條に破られて。七條河原へ追出さる。一陣破れて殘黨全からざれば。六波羅の勢。竹田の合戦にも打負。木幡伏見の軍にも負て。落行勢散々に。六波羅の城へ逃籠る。勝に乗て逃るを追。四方の寄手五万餘騎皆一所に寄て。五條の橋爪より。七條河原迄。六波羅を圍ぬる事。幾千万と云敷を知らず。されば東一方をば。態と開られたり。

是は敵の心を。一になさで。輒責落さん爲の謀あり。千種頭中將忠顯朝臣。士卒に向て下知せられける。此城尋常の思ひを成して。延々に責ば。千劔破の寄手。彼と捨て。此後攻を仕つと覺る。諸卒心を一にして。一時か間に攻落すべしと下知せられければ。出雲伯耆の兵共。雜車三百輛取集て。輾と輾とを結合。其上に。家を壞て山の如くに積上て。櫓の下へ差寄。一方の關戸を燒破りけり。爰に梶井宮の御門徒。上林坊。勝行房の同宿共。浪宵にて三百餘人。地藏堂の北の門より。五條の橋爪を打て出たりける間。坊門の少將。殿法印の兵共三千餘騎僅の勢にまくり立られて。河原三町を追越。され共山徒さすがに小勢あれば。長追しては。悪かりあんとて。又城の内へ引籠る。六波羅に籠籠る所の軍勢。少しといへ共。其數五万騎に餘れり。此時若志を一にして。同時に懸出たらまじかば。引立たる寄手共。足をためじと見へしか共。武家亡ぶべき運の極めにや有けん。日來名を顯せし。剛の者といへ共勇ます。無双の強弓精兵と云はるる者も。弓引ずして只呆れたる計にて。此彼に群立て。落支度の外は義勢も無し。名を惜み。家を重んずる武士だにも此の如し。何に況や主上上皇を始め進せて。女院皇后北の政所。月卿雲客兒女童。女房達に至る迄。軍と云ふ事ハ未目にも見給はぬ事あれば。時の聲矢叫の音に。懼どのかせ給て。こは如何すべきと。消入計の御氣色なれば。實も理りなりと。御痛敷様を見進らするに就ても。兩六波羅彌氣を失て。忙然の躰なり。今迄貳なき者と見へつる兵なれ共。斯様に城中の色めきたる様を見て。叶はじとや思ひけん。夜に入れければ。關戸を開き。逆水を越て。我先にと落行けり。義を知命を輕んじて。残り留る兵。僅に千騎にも足らず見へにけり

○主上上皇御沈落の事

爰に糴谷三郎宗秋。六波羅殿の御前に參て申けるは。御方の御勢。次第に落て。今は千騎に足らぬ程に成て候。此御勢にて。大敵を防がん事は。叶はじとこゝろ覺へ候へ。東一方をば。敵未取廻し候はねば。主上上皇を取奉て。關東へ御下候て。重て大勢を以て。京都を賣られ候へかし。佐々木判官時信。勢多の橋を警固して候を召具せられて。御勢も不足候まじ。時信御供仕る程あらば。近江國に於ては。手差者は候まじ。美濃。尾張。三河。遠江には。御敵有共承らねば。路次は定て無爲にぞ候はんすらん。鎌倉に御着候ひあは。逆徒の退治踵を廻らすべからず。先思召立候へかし。是程に淺まなる平城に。主上上皇を籠進らせて。名將。匹夫の銚に。名を失はせ給はん事。口惜かるべき事に候はずやと。再三強て申ければ。兩六波羅實もとや思はれけん。さらば先女院皇后北の政所を始進せて。面々の女性。少き人々を忍びやかに落して後。心閑に。一方を打破て落べしと評定有て。小申五郎兵衛尉を以て。此由院内へ申されたりければ。國母皇

后。女院。北政所内侍上童上臈女房達に至る迄。城中に籠りたるが怖じさに。思はぬ別の悲しさも。後いかに成ゆかんする様をも知らず。歩既にて。我先にと。迷ひ出給ふ。只金谷園裏の春の花。一朝の嵐に勝はれて四方の霞に散行し。昔の夢に異あらず。越後守仲時。北の方に向けて宣ひけるは。日來の間は。縦ひ思の外に。都を去事有共。何く迄も伴ひ申さんどころ思つれ共。敵東西に滿て。道を塞ぬと聞ゆれば。心安く關東迄。落延ぬ共覺へず。御事は女性の身されば。苦しかるまじ。松壽は未幼稚ければ。敵設ひ見付たり共。誰が子供とも知らじ只今の程に。夜に紛れて。何方へも忍び出給て。片邊土の方にも身を隠し。暫く世の静まらん程を待給ふべし。道の程。事故あく。關東に着なば。頼て御迎に人を進すべし。若し又我等。道にて討れぬと聞給は。如何成人にも相馴て。松壽を人と成し。心付なば僧に成して。我後世を問せ給へと。心細げに云置て。涙を流して立給ふ。北の方。越後守の。鎧の袖を扣て。なぞや角くうたてしき。言の葉に聞へ侍るや。此折節少き者なんぞ引具して。知らぬ傍に休らは。誰か落人の。其方様と思はざらん。又日來より知たる人の傍に立宿らば。敵に搜し出されて。我身の恥を見るのみに非ず。少き者の命をさへ失はん事こそ悲しけれ。道にて思の外的事あらば。そこにてこそ其に兎も角も成果め。頼ひ陰なき木の下に。世を秋風の露の間も棄置れ進せては。存ふべき心地もせずと。泣

悲しみ給ひければ。越後守も。心は猛じといへ共。流石に岩木の身あらねば。幕別を捨棄て。遙に時を不移されける。昔漢の高祖と。楚の項羽と。戦事七十餘度ありしに。項羽遂に高祖に圍まれて。夜明に討死せんとせし時に漢の兵四面にして。皆楚歌するを聞て項羽則帳中に入。其婦人虞氏に向て。別を慕悲みを含で自ら歌を作て云

力拔山兮氣蓋世
時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何
虞氏兮虞氏兮奈若何

と悲歌慷慨して。項羽涙を流し給じかば。虞氏悲しみに堪兼て。則 自 劔の上に伏し。項羽に先立て死けり。項羽明る日の戦に。廿八騎を伴て。漢の軍四十万騎を懸破り。自ら漢の將軍三人が首を取て。討殘されたる兵に向て。我遂に漢の高祖が爲に亡されぬ事。戦の罪に非ず天我を亡せりと。自ら運を計て遂に烏江の邊にして。自害したりしも。斯やと思知れて。涙を落さぬ武士は無し。南方左近將監時益は。行幸の御先を仕て打けるが。馬に乗ながら北の方越後守の。中門の際迄打寄て。主上早寮の御馬に召れて候に。おとや永々敷打立せ給ひぬかと云已て打出ければ。仲時力あく。鎧の袖に取り付たる。北の方少き人を引放して。縁より馬に打乗。北の門より。東へ打出給へば。捨置る人々。泣々左右へ別て。東の門より迷出給ふ。行々泣悲む

聲遙に耳に留て。離もやらぬ悲しさに。落行先の道暮て。馬に任て歩せ行。是を限の別とは。互に知ぬ多哀なる。十四五町打延て。跡を願れば。早雨六波羅の館に火懸て。一片の煙と燒上たり。五月間の比されば。前後を見へず暗さに。苦集滅道の邊に。野伏充滿て。十方より討ける矢に。左近將監時益は。頸の骨を射られて。馬より倒に落ぬ。糟谷七郎馬より下て其矢を拔ば。忽に息止りにけり。敵何くに有共知らねば。馳合て。敵を討べき様も無し。又忍て落る道なれば。傍に知らせて。返し合すべきにても無し。只同じ枕に自害して。後世迄も主従の義を重んずるより。外の事はあらずと思ければ。糟谷泣々主の首を取て錦の直垂の袖に巻。道の傍の田の中に。深く隠して。則腹撞切て。主の死骸の上に重て。抱付て予伏たりける。龍鶴遙に。四宮河原を過させ給ふ所に。落人の通るど打留て物の具剣と呼聲。前後に聞へて。矢を射る事雨の降が如し。斯ては行末とても如何有べきとて。東宮を始進せて。供奉の卿相雲客。方々へ落散給ける程に。今は僅に日野大納言資名。勸修寺中納言經顯。綾小路中納言重資。禪林寺宰相有光計す。龍駕の前後には供奉せられける。都を一片の曉の雲に阻て。思を万里の東の道に傾させ給へば。劍閣の遠き昔も思召合され。番永の亂たりし世も。斯こそと。叡襟を惱し給ふ。主上上皇も。御涙更にせさめへず。五月の短夜明やらで。關の此方も聞ければ杉の木陰に駒を駐て。暫らく

休らはせ給ふ所に。何くより射る共知らぬ。流矢。主上の左の御簪に立にけり。陶山備中守。急ぎ馬より飛下て。矢を抜て。御流を吸に。流る血。雪の御膚を染て。見進らするに目もあてられず。忝も。万乗の主。卑き匹夫の矢先に傷れて。神龍忽に釣者の網に懸れる事。淺猿かりし世中なり。去程に。東雲漸明初て。朝霧僅に残れるに。北なる山を見渡せば野伏共と覺て。五六百人が程。楯をつき。鐵を支て待懸たり。是を見て面々。度を失てあされたり。爰に備前國の住人中吉彌八。行幸の御前に候けるが。敵近く馬を懸寄て。忝も。一天の君。關東へ臨幸する處に。何者されば。斯様の狼藉をば仕るぞ心ある者ならば。弓を伏。甲を脱で。通し奉るべし。禮儀を知ぬ奴原ならば。一々に召捕て頸切かけて通るべしと云ければ。野伏共からくと笑て。如何ある一天の君にても渡らせ給へ。御運已に盡て。落させ給ひんするを。通し參らせんとは申まじ。輾く通り度思召さば御供の武士の。馬物の具と皆捨させて。御心安く落させ給へしと。云もはてず同音に。時をどつと作る。中吉彌八是を聞て。悪い奴原が振舞哉いでほしがる物の具とらせんと云儘に。若黨六騎。馬の鼻を双べて懸たりけるに。欲心熾盛の野伏共。六騎の兵に懸立られて。蜘蛛の子を散す如く。四角八方へぞ逃散ける。六騎の兵共。六方へ分て。逃るを追事各數十町あり。彌八餘に長追したりける程に。野伏廿餘人返合て。是を中に取籠る。然れ共彌八。

少しもひるまず。其中の棟梁と見へたる敵に。馳双てむすと組。馬二匹が間へとつと落て。四五丈計高き片岸の上より。上に成下に成轉びけるが。共に組も放すして。深田の中へ轉び落にけり。中吉下に成。擧様に一刀刺んとて。腰刀を搜りけるに。轉ぶ時抜てや失たりけん。鞘計有て刀は無じ上成敵。中吉が胸板の上に乘懸て。鬢の髪を爪で頸をかゝんとしける處に。中吉刀加へて。敵の小腕を丁と擲すくめて。暫く聞給へ。申べき事有。御邊今は我を恐れ給ふぞ。刀があればこそ。勿返して勝負をもせめ。又續く御方なければ。落重て我を助る人もあらじ。されば御邊の手に懸て。頸を取て出されたり共。曾て實檢にも及まじ。高名にも成まじ。我は六波羅殿の御雜色に。六郎太郎と云者にて候へば。見知る人も候まじ。無用の下部の首取て罪を作り給はんより。我命を助てたび候へ。其悦には。六波羅殿の錢を陰して。六千貫埋れたる所を知て候へば。手引申て御邊に所得させ奉らんと云ければ。誠とや思けん抜たる刀を鞘になし。下なる中吉を引起して。命を助くるのみあらず。様々の引出物をし。酒あんどを勸て。京へ運て上りたれば。彌八六波羅の燒跡へ行。正しく此に埋れたりし物を。早人が堀て取たりけるぞや。徳付奉らんと思ひたれば。耳のびくが薄く坐けると欺て。空笑してこそ返しけれ。中吉が謀に道開けて。主上其日の篠原の宿に付せ給ふ。此にて怪しげある。綱代の輿を尋出て。歩立成武者共。俄に駕輿

丁の如くになりて。御輿の前後をぞ仕りける。天臺座主梶井の二品親王は。是迄御供申させ給たりけるが。行末とても。道の程心安く過べき共。覺させ給はねば。何ぐにも。暫し立忍ばいやと思召て。御門徒に誰か候と。御尋有けれ共。去ぬる夜の路次の合戦に。或は疵を蒙て留り。或は心替りして落けるにや。中納言僧都經超。二位の寺主淨勝二人より外は。供奉仕りたる。出世坊官一人も候はずと申ければ。扱は殊更長途の逆旅叶ふまじと。是より引別て。伊勢の方へを赴かせ給ひける。さらでたに。山立多き鈴鹿山を飼たる馬に。白鞍置て召れたらんは。中々道の警と成るべきとて。御馬を皆。宿の主に給て門主は長々と。蹴垂たる。長絹の御衣に檳榔の裏無を召れ。經超僧都は。袖重ねたる黒衣に水晶の念珠手に持て。歩み兼たる有様。如何成人も是を見て。すはや是こそ落人よと思はぬ者は有べからず。され共山王大師の御加護にや依けん。道に行逢奉る。山路の樵野徑の蘇。御手を引御腰を推て。鈴鹿山を越奉る。扱伊勢の神宮なる人を。平に御憑有て御坐けるに。神宮心有て身の難に逢べきをも願す。兎角陰し置進せければ。是に三十餘日御忍び有て。京都少し静りしかば。還御成て。三四年が間は。白毫院と云所に御通世の躰にて。御座有ける。

○越後守仲時以下自害の事

去程に。兩六波羅。京都の合戦に打負て。關東へ落るる由。披露有ければ。安宅。篠原。日夏。老會。愛智川。小野。四十九院。摺針。番馬。醒井。柏原。其外伊吹山の麓。鈴鹿川の邊の。山立強盜。溢者共。二三千人。一夜の程に馳集て。先帝第五の宮。御遷世の跡にて。伊吹の麓に忍で御座有けるを。大將に取奉て。錦の御旗を差上。東山道第一の難所。番馬の宿の東なる。小山の峯に取上り。岸の下ある細道の中に夾て待懸たり。夜明ければ越後守仲時。篠原の宿を立て。仙譚を重山の深きに促し奉る。都を出し昨日迄。供奉の兵。二千騎に餘りしか共。次第に落散にけるや。今は僅に。七百騎にも足ざりけり。若跡より追懸奉る事もあらば防矢仕れとて。佐々木判官時信をば。後陣に打せられ。賊徒道を塞ぐ事あらば。打散して道を開けよとて糠谷三郎に。先陣を打せられ。變興跡に連て。番馬の峠を越んとする處に。數千の敵道の中に夾み。楯を一面に並べ。矢先を揃て待懸たり。糠谷遙に是を見て。思ふに當國他國の惡黨共が。落人の物の具剣んとて。集りたるらん。手痛く當て捨る程ならば。命を惜まて。戦ふ程の事はよもあらじ。只一騷に驅散して捨よと云儘に。三十六騎の兵共。馬の鼻を並てぞ驅たりける。一陣を堅めたる。野伏五百餘人。遙の峯へまくり上られて。二陣の勢に逃加る。糠谷は一陣の軍には討勝て。今はよも。手に礙る者あらじと心安く思て。朝霧の晴行儘に。越べき末の山路を。遙に見渡しければ。錦の旗

一流れ。峯の嵐に翻して。兵五六千人が程。要害を前に當て待懸たり。糠谷二陣の敵大勢を見て。退屈してぞ扣へたる。重て懸破らんとすれば。人馬共に疲て敵險阻に支たり。相近付て矢軍をせんとすれば。矢種皆射盡して。敵若干の大勢成。兎にも角にも叶べきと覺ざりければ。麓に辻堂の有けるに。皆下居て。後陣の勢をぞ相待ける。越後守は。先陣に軍有と聞て馬を。早めて馳來給ふ糠谷三郎。越後守に向て申けるは。弓矢取の。死ぬべき所にて死せざれば。恥を見るに申習したるは。理にて候けり。我等都にて討死すべく候し者が。一日の命を惜て。是迄落もて來て。今云甲斐なき田夫野人の手に懸て。尸を路徑の露に晒さん事こそ口惜く候へ。敵此一所計にて候は。身命を捨て。打拂ふても通るべく候か。推量仕るに。先士岐が一族最初より。謀叛の張本にて候しかば。折を得て美濃國をば。通さじとぞ仕り候はんすらん。吉良の一族も。度々の召に應せずして。遠江國に城郭を構て候と。風聞候しかば。出合ぬ事は候はじ。是等を敵に受ては。退治せん事。恐らくば。万騎の勢にても叶がたし。況や我等落人の身と成て。人馬共に疲れ。矢の一筋をも。墓々敢射候べき力もなく成て候へば。向く迄か落延候べき。只後陣の佐々木を御待候て。近江國へ引返し。暫ざりぬべからんする城に楯籠て。關東勢の上洛し候はんするを。御待候へかしと申しければ。越後守仲時も。此義を存すれ共。佐々木とて今如何成野心

と存すらん。憑少く覺れば進退谷つて。面々の意見を。訪申さんと存するなり。さらば何様此堂に暫く待て。時信を待てこそ。評定あらめとて。五百餘騎の兵共。皆辻堂の庭にぞ下居たる。佐々木判官時信は。一里計引下りて。三百餘騎にて打けるが。如何成天魔破旬の。所爲にてか有けん六波羅殿は。番馬の畔にて。野伏共に取籠られて一人も残らず。討れ給たりとぞ告たりける。時信今はすべき様なかりけりと。愛智川より引かへし。降人に成て京都へ上りにけり。越後守仲時。暫は時信を廻しと待給けるが。待期過て時移ければ。扱は時信も。早敵に成にけり。今は何くへか引返し。何へ迄か落べさなければ。爽に腹を切んする物とぞ。中々一途に心を取定て。氣色涼くみ見へける。其時軍勢共に向て宣ひけるは。武連漸。傾て。當家の滅亡。近きに有べしと。見給ひながら。弓矢の名を重んじ。日來の好みを忘すして。是迄付纏ひ給へる心ざし。中々申に言なかるべし。夫の報謝の思深しといへ共。一家の運已に盡ぬれば。何を以てか是を報すべき。今は我芳々の爲に。自害をして。生前の芳恩を。死後に報せんと存するなり。仲時不肖ありといへ共。平氏一類の名を揚る身なれば。敵共定て我首を獲て。千戸候にも募ぬらん。早く仲時が首を取て。源氏の手に渡し。咎を補て忠に備へ給へと。云はてざる言の下に。鎧脱で押膚脱。腹掻切て伏給ふ。糴谷三郎宗秋是を見て。泪の鎧の袖に懸りけるを押へて。宗秋こそ。先自害して冥途の。

御先をも仕らんと存候つるに。先立せ給ぬる事こそ口惜けれ。今生にて。命の際の御先途をも見果參らせつ。冥途なればとて。見放し奉るべきに非ず。暫く御待候へ。死出の山の御供申候はんと。越後守の。柄口迄腹に突立て置れたる刀を取て。己が腹に突立。仲時の膝に抱付。うつ伏しにこそ伏たりける。是を始として。佐々木隠岐前司。子息次郎右衛門。同三郎兵衛。同永壽丸。高橋九郎左衛門。同孫四郎。同又四郎。同彌四郎左衛門。同五郎。隅田源七左衛門尉。同孫五郎。同藤内左衛門尉。同與一。同四郎。同五郎。同孫八。同新左衛門尉。同又五郎。同藤六。同三郎。安藤太郎左衛門入道。同孫三郎入道。同左衛門太郎。同左衛門三郎。同十郎。同三郎。同又次郎。同新左衛門。同七郎三郎。同藤次郎。中布利五郎左衛門。石見彦三郎。武田下條十郎。關屋八郎。同十郎。黒田新左衛門。同次郎左衛門。竹井太郎。同掃部左衛門尉。寄藤十郎兵衛。皆吉左京亮。同勘解由七郎兵衛。小屋木七郎。鹽屋右馬允。同八郎。岩切三郎左衛門。子息新左衛門。同四郎。浦上八郎。岡田平六兵衛。木工助入道。子息助三郎。吉井彦三郎。同四郎。壹岐孫四郎。窪二郎。糴谷彌次郎入道。同孫三郎入道。同六郎。同次郎。同伊賀三郎。同彦三郎入道。同大炊次郎入道。同六郎。櫛橋次郎左衛門尉。南和五郎。同又五齋。原宗左近將監入道。子息彦七。同七郎。同七郎次郎。同平右馬三郎。御器所七郎。怒借屋彦三郎。西郡十郎。秋月二郎兵衛。半田三郎。平塚孫四郎。毎田彦三郎。花房六郎入道。宮崎三郎。同太郎次郎。山

本八郎入道。同七郎入道。子息彦三郎。同小五郎。子息彦五郎。同孫四郎。足立源五。三河孫六。廣田五郎左衛門。伊佐治部丞。同孫八。同三郎。息男孫四郎。片山十郎入道。木村四郎。佐々木隱岐判官。二階堂伊豫入道。石井中務丞。子息彌三郎。同四郎。海老名四郎。同與一。弘田八郎。覺井三郎。石川九郎。子息又次郎。進藤六郎。同彦四郎。備後民部太夫。同三郎入道。加賀彦太郎。同彌太郎。三島新三郎。同新太郎。武田與三。滿野藤左衛門。池守藤内兵衛。同左衛門五郎。同左衛門七郎。同左衛門太郎。同新左衛門。齋藤宮内丞。子息竹丸。同宮内左衛門。子息七郎。同三郎。筑前民部太夫。同七郎左衛門。田村中務入道。同彦五郎。同兵衛次郎。信濃小外記。眞上彦三郎。子息三郎。陶山次郎。同小五郎。小見山孫太郎。同五郎。同六郎次郎。高境孫三郎。鹽谷彌次郎。庄左衛門四郎。藤田六郎。同七郎。金子十郎左衛門。眞壁三郎。江馬彦次郎。近部七郎。能登彦次郎。新野四郎。佐海八郎三郎。藤里八郎。愛多義中務丞。子息彌次郎。是等を宗徒の者として。都合四百卅二人。同時に腹をぞ切たりける。血は其身を浸て。恰黄河の流の如くなり。死骸は庭に充滿して。屠所の肉に異ならず。彼己亥の年。五千の貂錦胡塵に亡び。潼關の戰に。百万の士卒河水に溺れんも。是にはよも過じと。哀れありし事共。目もあてられず。云に詞もあかりけり。主上上皇は此死人共の有様を。御覽するに肝心も御身にそいす。只呆れてぞ座しくける。

○主上上皇爲五宮被囚給事付資名卿出家事

去程に。五宮の官軍共。主上上皇を取進せて其日先長光寺へ入奉り。三種神器并に玄象下濃。二間の御本尊に至る迄。自ら五宮の御方へを渡されける。秦の子嬰漢祖の爲に滅されて。天子の璽符を首に懸。白馬素車に乗て。軛道の傍に至り給ひし。亡秦の時に異ならず。日野大納言資名卿は。殊更當今奉公の寵臣なりしかば。如何成愛目をか見んすらん迎。身を危ふんで思はれければ。其邊の辻堂に。遊行の聖の有ける處へおはして。出家すべきよしを宣ひければ。聖願て戒師と成て。是非なく髮を剃落さんとしけるを。資名卿。聖に向て。出家の時は何とやらん。四句の偈を唱る事の。有げに候者をと仰られければ。此聖其文をや知ざりけん。汝は畜生發墓提心とぞ唱へたりける。三河守友俊も。同く爰にて出家せんとて既に髮を洗ひけるが。是を聞て命の惜さるに出家すればとて。汝は畜生ありと唱へ給ふ事の悲しさよと。あつばに入て笑ひける。此の如く今迄。付纏ひ進せたる卿相雲客も。此彼に落留て。出家遁世して退散しける間。今は主上東宮兩上皇の御方様とては。經顯有光卿二人より外は。供奉仕る人も無し。其外は皆見押ぬ。敵軍に前後を打圍まれて。怪げなる網代輿に召れ。都へ歸り上らせ給へば。見物の貴賤岐に立て荒不思議や。去年先帝を笠置にて生捕進らせて。隱岐國へ流し奉りし。其報ひ三年の中に。來りぬる事の

浅猿さよ。昨日の他州の愁と聞しかど。今日は我上の責に當れりとは。斯様の事をや申べき。此君も又如何成配所へか遷されさせ給て。宸襟を惱さるらんと心あるも心なきも。見る人毎に。因果歴然の理を感思して。袖をぬらさぬは。無かりけり

○千劔破城寄手敗北の事

去程に。昨日の夜。六波羅已に責落されて。主上上皇皆關東へ落させ給ぬと翌日の午の刻に。千劔破へ聞へたりければ。城中には悦び勇で只籠の中の鳥の出で。林に遊ぶ悦びを成し。寄手は牲に赴く羊の驅れて。廟に近づく思を成す。何様一日も遅く引ば。野伏彌勢重りて。山中の路難義なるべしとて。十日の早旦に。千劔破の寄手十萬餘騎。南都の方へと引て行前には兼て野伏充満たり跡よりは又敵急に追懸る。都て大勢の。引立たる時の癖なれば。弓矢を取捨て。親子兄弟を離れて。我先にと逃ふためさける程に。或は道も無き岩石の際に行つまつて腹を切。或は數千丈深き谷の底へ落入て。骨を微塵に打碎く者。數千万と云數を知らず。始御方の勢を返さじとて。寄手の方より。警固を居。谷合の關逆木も。引除て通る人あければ。關落されては。馬に離れ。倒れては人に踏殺され。二三里が間の山路を。數万の敵に追立られて。一軍もせで引しかば。今朝迄は。十萬餘騎と見へつる。寄手の勢残り少々に討あされ。僅に生たる軍勢も。馬物の具を捨ぬ

は無かりけり。されば今に至る迄。金剛山の麓と。東條谷の道の邊には矢の孔。刀の疵有白骨。收むる人もなければ。苔に纏れて塵々たり。され共宗徒の大將たちは。一人も道にては討れずして。生たる甲斐はなけれ共。其日の夜半計に。南都にこそ落着れける

正印 太平記卷之十

○千壽王殿大藏谷を落らるゝ事

足利治部太輔高氏敵に成給ぬる事。道遠ければ。飛脚未だ到來せず鎌倉には曾て其沙汰もあかりけり。斯りし處に。元弘三年五月二日の夜半に。足利殿の二男千壽王殿。大藏の谷を落て。行方知ず成給けり。是に由て鎌倉中の貴賤すはや大事出来ぬるはとて。騒動斜ならず京都の事は。道遠きに由て。未分明の説も無ければ毎事心得無しとて。長崎勘解由左衛門入道と。諏訪木工左衛門入道と。兩使にて上られける處に。六波羅の早馬。駿河の高橋にて行合ける。名越殿は討れ給ふ。足利殿は敵に成給ぬと申ければ。扱ひ鎌倉の事も不審とて。兩使は取て返し。關東へぞ下りける。爰に高氏の長男竹若殿は。伊豆の御山に御座けるが。伯父の宰相法印良通。兒同宿十三人。山伏の姿に成て。潜に上落し給ひけるが。浮島が原にて。彼兩使にぞ行合給ける。諏訪長崎生取奉らんと思ひける所に。宰相法印是非なく馬上にて腹切て。道の傍にぞ臥給ひける。長崎さればこそ内に野心の有人は。外に遁るゝ辭あしとて。竹若殿を潜に刺殺し奉り。同宿十三人をば首を刎て。浮島が原に懸てぞ通りける。

○新田義貞謀叛の事付天狗權越後勢事

斯りける處に。新田太郎義貞。去る三月十一日。先朝より繪旨を給りたりしかば。千劔破より虛病して本國に歸り。便宜の一族達を潜に集めて。謀叛の計略をぞ廻されける。斯る企有とは思寄す。相摸入道。舍弟の四郎左近太夫入道に。十萬餘騎を差副て京都へ上せ。畿内西國の亂を靜むべしとて。武藏。上野。安房。上總。常陸。下野。六ヶ國の勢をぞ。催されける。其兵糧の爲にとて。近國の庄園に臨時の天役を懸られける。中にも新田庄世良田には有徳の者多しとて。出雲介親連。黒沼彦四郎入道を使にて。六萬貫を五日が中に沙汰すべしと。堅下知せられければ。使先彼所に臨で大勢を庄家に放入て。譴責する事法に過たり。新田義貞是を聞給て。我館の邊を雜人の馬の蹄に懸させつる事こそ。返々も無念なれ。争か見ながら泳ふべきとて。數多の人勢を差向られて。兩使を忽ち虜て。出雲介をば誠め置。黒沼入道をば。頭を切て同日の暮程に。世良田の里の中に不懸られける。相摸入道此事を聞て。大に怒て宣ひけるは。當家世を取て已に九代。海内悉く其命に隨はずと云事更に無し。然るに近代遠境。動すれば。武命に隨はず。近國常に下知を輕んずる事奇怪なり。剩へ藩屏の中にして。使節を誅戮する條。罪科輕きに非ず。此時若緩々の沙汰を致さば。大逆の基と成ぬべしとて。則武藏上野。兩國の勢に仰て。新田太郎義貞。舍弟脇屋次郎義助を討て進すべしとぞ下知せられける。義貞是を聞て。宗徒の一族達を集

て。此事如何有べきと評定有けるに。異議隔々にして一定ならず。或は沼田庄を要害にして。利根川を前に當て敵を待んと云義もあり。又越後國には。大略當家の一族充滿たれば。津張郡へ打越て。上田山を伐塞ぎ。勢を付てや防ぐべきと。意見定らざりけるを。舍弟脇屋次郎義助。暫く思案して。進出で申されけるは。弓矢の道。死を輕くして。名を重んずるを以て義とせり。中づ相摸の守。天下を執て百六十餘年。今に至る迄武威盛に振て。其命を重せずと云所無し。されば縦ひ。利根川を逆て防ぐ共。運盡なば叶まじ。又越後國の一族共を憑たり共。人の心不和ならば。久き謀に非ず。差たる事も仕出さぬ物故に。此彼へ落行て。新田の某こそ。相摸の守の使を切たりし咎に依て。他國へ逃て討れたりしあんど。天下の人口に入らん事こそ口惜けれ。連も討死をせんずる命を。謀叛人と謂れて朝家の爲に捨たらんは。無らん跡迄も。勇り子孫の面を既しめ。名は路徑の戸を清むべし。先立て繪旨を下されぬるは。何の用にか當べき。各宣旨を額に當て。運命を天に任て。只一騎成共。國中へ打出て。義兵を擧たらんに。勢付は頼て鎌倉を賣落すべし。勢付すんば。只鎌倉を枕にして討死するより。外の事や有べきと。義を先とし。勇を宗として宣しかば。當座の一族卅餘人皆此義に不同じける。さらば頼て事の漏聞へぬ先に打立とて。同五月八日の卯刻に。生品の明神の御前にて旗を揚。繪旨を披て三度是を拜し。笠懸

野へ打出らる。相従ふ人々氏族には。大館次郎宗氏。子息孫次郎幸氏。二男彌次郎氏明。三男彦二郎氏兼。堀口三郎貞満。舍弟四郎行義。岩松三郎經家。里見五郎義胤。脇屋次郎義助。江田三郎光義。桃井次郎尚義。是等を宗徒の兵として。百五十騎には過ぎりけり。此勢にては如何と思ふ所に。其日の晩景に。利根川の方より。馬物の具爽に見へたりける兵。二千騎計。馬烟を立て馳來る。すはや敵よと目に懸て見れば。敵にはあらずして。越後國の一族に。里見。鳥山。田中。大井田。羽川の人々にて坐ける。義貞大に悦で。馬を叩て宣けるは。此事兼てより。其企は有ながら。昨日今日とは存せざりつるに。俄に思立事の候つる間。告申迄なかりしに。何として存られけると問給ければ。大井田。遠江守鞍壺に畏て申されけるは。勅定に由て。大義を思召立る。由。承り候はずは何として箇様に馳參べく候。去る五日の御使とて。天狗山伏一人。越後の國中を一日の間に。觸廻て通り候し間。夜を日に繼で馳參て候。境を阻てたる者は。皆明日の程にぞ參着候はんすらん。他國へ御出候は。且く彼勢を御待候へかしと申されて。馬より下て。各對面色代して。人馬の息を繼せ給ける處に。後陣の越後勢。并に甲斐信濃の源氏共。家々の旗を差連て。其勢五千餘騎。夥敷見へて馳來る。義貞義助斜みならず悦で。是偏に八幡大菩薩の擁護による者なり。暫くも逗留すべからずとて。同九日武藏國へ打越給ふに。紀五左衛門。

足利殿の御子息千壽王殿を具足し奉り。二百餘騎にて馳付たり。是より上野。下野。上總。常陸。武藏の兵共期せざるに集り。催ざるに馳來て。其日の暮程に。廿万七千餘騎。甲を並べ叩へたり。されば四方八百里に餘れる武藏野に。人馬共に充滿て。身を峙るに所無く打圍たる勢あれば。天に飛鳥も翔る事を得ず。地を走る獸も隠れんとするに處無し。草の原より出る月は。馬鞍の上にはのめさで。鎧の袖に傾けり。尾花が末を分る風は。旗の影をひらめかし。幌の手靜る事なき。懸りしかば。國々の早馬鎌倉へ打重て。急を告る事。櫛の齒を引が如し。是を聞て時の變化をも計らぬ者は穴ことし。何程の事か有べき。唐土天竺より寄來ると云わ。實も眞しかるべし。我朝秋津島の内より出て。鎌倉殿を亡はさんとせん事。螳螂が車を遮り。精衛海を填んとするに異ならずと欺き合ひ。物の心をも辨へたる人は。すはや大事出來ぬるは。西國畿内の合戦未靜ざるに。大敵又藩籬の中より起れり。是伍子胥が。吳王夫差を諫しに。晋は瘡癥にして。越は腹心の病なりと云しに。異ならずと恐れ合ひ。去程に京都へ討手を上さるべき事をば聞て。新田殿退治の沙汰計なり。同九日軍の評定有て。翌日己刻に。金澤武藏守貞將に。五万餘騎を差副て。下河邊へ下さる。是は先上總下總の勢を討て。敵の後攻をせよとなり。一方へは。櫻田治部太輔貞國を大將にて長崎二郎高重。同孫四郎左衛門。加治二郎左衛門入道に。武藏

上野兩國の勢。六万餘騎を相副て。上路より。入間川へ向らる。是は水澤を前に當て。敵の渡さん處を討となり。承久より此かた。東風靜にして。人皆弓箭をも忘れたるが如くなるに。今始めて干戈を動す珍しさに。兵共ことごとく敷。此を晴と出立たりしかば。馬物具太刀刀皆照輝計あれば。由々敷見物にて不有ける。路次に兩日逗留有て。同十一日の辰刻に。武藏國。小手差原に打臨給ふ。爰にて遙に。源氏の陣を見渡せば。其勢雲霞の如くにて幾千万騎共。云べき數を知らず。櫻田長崎是を見て案に相違やしたりけん。馬を扣て進得ず。義貞忽に入間川を打渡して。先開の聲を揚陣を進め。早矢合の鏑を射させける。平家も鯨波を合て。旗を進めて懸りけり。始り射手を添て散々に矢軍をしけるが。前は究竟の馬の足立あり。何れも東國ろだちの武士共あれば。争か少しもたまるべき。太刀長刀の鏑をそろへ。馬の轡を並て切て入。二百騎三百騎。千騎。二千騎。兵を添て相戦ふ事卅餘度に成しかば。義貞の兵三百餘騎討れ鎌倉勢五百餘騎討死して。日已に暮ければ。人馬共に疲たり。軍は明日と約諾して。義貞三里引退て。入間川に陣を取。鎌倉勢も三里引退て。久米川に陣を不取たりける。兩陣相去其間を見渡せば。卅餘町に足ざりけり。何れも今日の合戦の物語して。人馬の息を繼せ。兩陣互に鏑を燒て。明るを過しと待居たり。夜已に明ぬれば。源氏は平家に先をせられじと。馬の足を進めて。久米川の陣へ押寄る。平家も

夜明ば源氏定て寄んずらん。待て戦は、利有べしとて。馬の腹帯を固め。甲の緒を縮。相待とぞ見へし。兩陣互に寄せ合せて。六万餘騎の兵を。一手に合て。陽に開て中に取り籠んと勇けり。義貞の兵是を見て。陰に閉て。中を破れじとす。是が此黃石公が虎を縛する手。張子房が鬼を拉ぐ術。何れも皆存知の道なれば。兩陣共に入亂て。破られず。圍まれずして。只百戦の命を限りにし。一舉に死を争ひける。されば千騎が一騎に成迄も。互に引じと戦ひけれ共。時の運にや依けん。源氏は纔に討れて。平家は多く亡びにければ。加治長崎。二度の合戦に打負たる心地して。分陪を差て引退く。源氏猶續て寄んとしけるが。連日數度の戦に人馬數多疲たりしかば。一夜馬の足を休めて。久米河に陣を取寄て。明る日こそ待たりけれ。去程に。櫻田治部大輔貞國。加治長崎等。十二日の軍に打負て引退く由。鎌倉へ聞へければ。相摸入道。舍弟の四郎左近太夫入道惠性を大將軍として。鹽田陸奥の入道。安保左衛門入道。城越後守。長崎駿河守時光。佐藤左衛門入道。安東左衛門尉高貞。横溝五郎入道。南部孫二郎。新開左衛門入道。三浦若狭五郎氏明を差副て。重て十万餘騎を下さる。其勢十五日の夜半計に。分陪に付けければ。當陣の敗軍又力を得て、勇進んとす。義貞は。敵に荒手の大勢加りたりとは思ひ寄ず。十五日の夜未明ぎるに。分陪へ押寄て時と作る。鎌倉勢先究竟の射手三千人を勝て面に進雨の降如く。散々に射さ

せける間。源氏射立られて懸得ず。平家は利を得て。義貞の勢を取籠。餘さじとこそ責たりける。新田義貞。退兵を引勝て。敵の大勢を。懸破てい裏へ通り。取て返しては喚て懸入。電光の激するが如く。脚手輪違に。七八度が程ど當りける。され共大敵しかも荒手にて。先度の恥を雪めんと。義を専らにして闘ける間。義貞遂に打負て。堀金を指て引退く。其勢若干討れて。痛手を負者數を知ず。其日頓て追てばし寄たらば。義貞愛にて打れ給ふべかりしを。今は敵何程の事か有べき。新田をば定て。武藏上野の者共が。討て出さんずらんと。大様に懸て時を移す。是ぞ平家の運命の。盡ぬる所のしるしあり

○三浦大多和合戦意見の事

懸りし程に義貞も。爲方なく思召ける所へ。三浦大多和平六左衛門義勝は。兼てより義貞に。志有しかば。相摸の國の勢。松田。川村。土肥。土屋。本間。澁谷を具足して。以上其勢六千餘騎。十五日の晩景に。義貞の陣へ馳參る。義貞大に悦で。急ぎ對面有て禮を厚くし。席を近付て。合戦の意見を問れける。平六左衛門畏て申けるは。今天下二に分れて互の安否を合戦の勝負に懸たる事にて候へば。其雌雄十度も甘度も。なぞか無ては候べき。但し始終の落居は。天命の歸する所にて候へば。遂に太平を致されん事。何の疑か候べき。御勢に義勝が勢を合て戦はんに。十万

餘騎。是も猶敵の勢に及ず候といへ共。今度の合戦に。一勝負せでは候べきと申ければ。義貞もいとよ當手の疲たる兵を以て。大敵の勇誇たるに懸らん事は。如何と宣ひけるを。義勝重て申けるは。今日の軍には。治定勝べき謂れ候。其故は。昔秦と楚と國を争ひける時。楚の將軍武信君。僅に八万餘騎の兵を以て。秦の將軍李由が八十万騎の勢に打勝。首を切事四十餘萬なり。是より武信君心驕り軍懈て。秦の兵を恐るゝに足すと思へり。楚の副將軍に。宗義と云ける兵是を見て。戰に勝て。將驕り卒惰る時は。必ず破るといへり。武信君今此の如し。亡びずんば何をか待んと申けるが。果して後の軍に武信君。秦の左將軍章邯が爲に討れて。忽に一戰に亡びにけり。義勝昨日潛に人を遣して敵の陣を見するに。其將驕れる事武信君に異ならず。是則宋義が謂し所に違はず。所詮明日の御合戦には。義勝荒手にて候へば。一方の前を承て。敵を一當當て見候はんと申ければ。義貞誠に心に服し。宜きに隨ひ。則今度の軍の成敗をば。三浦平六左衛門にぞ許されける。明れば五月十六日の寅刻に。三浦四万餘騎が真先に進で。分陪河原へ押寄る。敵の陣近く成迄。熊旗の手をも下さず。陣の聲をも響ざりけり。是は敵を出抜て。手攻の勝負を決せん爲あり。案の如く敵は先日數ケ度の合戦に。人馬皆疲れたり。其上今敵寄べし共思懸ざりければ。馬に鞍をも置ず。物の具をも取調ず。或は遊君に枕を並て。帶紐を解て臥たる者も有。或は

酒宴に酔を催されて。前後を知らず寝たる者も有。只一棄所威の者共が。自滅を招くに異をらぬ。爰に寄手相近付を見て。河原面に陣を取たる者。只今面より旗を巻て。大勢の閑に馬を打て來れば若敵にて有らん。御用心候へと告たりければ。大將を始てさる事有。三浦大多和が相模國勢を催して。御方へ馳參すると聞へしかば。一定參りたりと覺るぞ。斯る目出度事こそなけれ。驚く者一人も無し。只兎にも角にも運命の。盡ぬる程こそ淺猿けれ。去程に義貞。三浦が先懸に追すがふて。十萬餘騎を三手に分。三方より押寄て。同く時を作りける。惠性時の聲に驚て。馬よ物の具よと周章騒ぐ所へ。義貞義助の兵縦横無盡に懸立る。三浦平六是に力を得て。江戸。豊島。葛西。川越。坂東の八平氏。武藏の七黨を七手になし。御手輪達十文字に。餘さじとを賣たりける。四郎左近太夫入道。大勢なりといへ共。三浦が一時の謀に破られて。落行勢の散々に鎌倉を差て引退く。討るゝ者は數を知らず。大將左近太夫入道も。關戸の邊にて已に討れぬべく見へけるを。横溝八郎踏止て。近付敵廿三騎時の間に射落し。主從三騎討死す。安保入道道場。父子三人相隨ふ兵百餘人同じ枕に討死す。其外普代奉公の郎從。一言芳恩の軍勢共。三百餘人引返し。討死しける間に。大將四郎左近太夫入道は。其身に恙なくえてぞ。山の内迄引れける。長崎次郎高壽。久米河の合戦に。組で討たらし敵の首三。切て落したかし敵の首十三。中間下部に取持せり。

鎧に立所の矢をも未拔す。疵の口より流るゝ血に。白絲の鎧忽に。緋威に染なして。閑々と鎌倉殿の御屋形へ參り。中門に畏りたりければ。祖父の入道。世にも嬉じけに打見で。出迎ひ自ら疵を吸血を含て。涙を流して申けるは。古き諺に子を見る事父に如すと云共。我先流を以て。上の御用に立がたき者ありと思て。常に不孝を加へし事。大なる誤かり。汝今萬死を出て一生に逢堅を摧ける振舞。陳平張良が難しとする所を究得たり。相構て今より後も。我が一大事と合戦にて父祖の名をも顯はし。守殿の御恩をも報じ申候へと。日來の庭訓を翻して。只今の武勇を感じければ。高重頭を地に付て。兩眼に涙をぞ浮べける。斯る所に。六波羅没落して。近江の番場にて。悉く自害の由告來りければ。只今大敵と戰中に此事を聞て。大火を打消て。あされ果たる事限りなし。其主從眷屬共是を聞て。泣歎き。憂悲ひ事。喩を取に物あし。何に武く勇める人も。足手もなゆる心地して。東西をも更に辨へず。然といへ共。此大敵を退けてこそ。京都へも討手を上さんずれとて。先鎌倉の軍評定をせられける。此事敵に知せしとせしか共。隠れ有べき事ならねば。頼て聞へて。天晴潤色やと。悦び勇まぬ者はなし。

○鎌倉合戦の事

去程に義貞。敵箇度の戦に打勝給ぬと聞へしかば。東八箇國の武士共。順付事雲霞の如し。關戸

に一日逗留有て。軍勢の着到を付られけるに。六十万七千餘騎と注せる。爰にて此軍勢を三手に分て。各二人の大將を差副。三軍の帥を司しめ。其一方には。大館二郎宗氏を左將軍とし。江田三郎行義を右將軍とす。其勢總て十萬餘騎。極樂寺の切通へを向はれける。一方には堀口三郎貞満を上將軍とし。大島讚岐守守之を裨將軍として。其勢都合十萬餘騎。巨福呂坂へ差向らる。其一方に新田義貞義助。諸將の命を司て堀口。山名。岩松。大井田。桃井。里見。鳥山。額田。一井。羽川以下の一族達を。前後左右に圍せて。其勢五十萬七千餘騎。假粧坂よりぞ寄られける。鎌倉中の人々は。昨日一昨日までも。分陪關戸に合戦有て。御方打負ぬと聞へけれ共。猶物の數共思はず。敵の分際さこそ有めと侮て。強に周章たる氣色も無りけるに。大手の大將にて向はれたる。四郎左近太夫入道。僅に打なされて昨日の晩景に。山の内へ引返されぬ。搦手の大將にて。下河邊へ向れたりし。金澤武藏守貞將は。小山判官千葉の介に打負て。下道より鎌倉へ引返し給ければ。意外なる珍事哉と。人皆周章しける所に。結句五月十八日の卯刻に。村岡。藤澤。片瀬。腰越。十間坂。五十餘箇所に火を懸て。三方より寄懸たりしかば。武士東西に馳違。貴賤山野に逸迷ふ。是ぞ此實裝一曲の聲の中に。魚陽の鼙鼓地を動し來り。烽火萬里の詐の後に。戎翟の旌旗天を掠て到けん。周の幽王の滅亡せし有様唐の玄宗の傾廢せし爲跡も。斯こそはありつ

らんと。思ひ知る、計にて。涙も更に止らず。淺猿かりし事共あり。去程に義貞の兵。三方より寄ると聞へければ。鎌倉にも。相模左馬助高成。城式部太輔景氏。丹波左近太夫將監時守を大將として。三手に分てぞ防ぎける。其一方に。金澤越後左近太夫將監を差副て。安房。上總。下野の勢三萬餘騎にて。假粧坂を堅めたり。一方には大佛陸奥の守貞直を大將として。甲斐信濃伊豆駿河の勢を相隨て。五萬餘騎。極樂寺の切通しを堅めたり。一方には。赤橋前相模守盛時を大將として。武藏。相模。出羽。奥州の勢六萬餘騎にて。洲崎の敵に向はる。此外末々の平氏八十餘人國々の兵十萬餘騎をば。弱からん方へ向べきとて。鎌倉中に殘されたり。去程に同日己刻より合戦始て。終日終夜責戦ふ。寄手は大勢にて。荒手を入替く責入ければ。鎌倉方には。防塙殺所なりければ。打出く相支て戦ける。されば三方に作る鬨の聲。兩陣に叫ぶ。矢叫びは天を響し地を動す。魚鱗に懸り。鶴翼に開て。前後に當り。左右を支へ。義を重じ。命を輕じて。安否を一時に定。剛臆を累代に殘すべき合戦あれば。子討るれ共扶す。親は乗越て前成敵に懸り。主射落るれ共引起さず。郎等は其馬に乗て懸出。或は引組で勝負をするもあり。或は打替て共に死するも有けり。其猛卒の機を見るに。萬人死して一人残り。百陣破れて一陣に成共。何果べき軍とは見へざりけり

○赤橋相摸守自害事付本間自害事

斯りける處に。赤橋相摸守。今朝は洲崎へ向はれたりけるが。此陣の軍剛して。一日一夜の其間に六十五度迄切合たり。されば數萬騎有つる郎従も討れ。落失る程に。僅に残る其勢は。三百餘騎にぞ成にける侍大將にて。同陣に候ける。南條左衛門高直に向て宣けるは。漢楚八ヶ年の戰に。高祖度毎に打負給しか共。一度烏江の軍に利を得て。却て項羽を亡されき。齊晋七十度の戰に。重耳更に勝事無りしか共。遂に齊境の戰に打勝て。文公國を保てり。されば萬死を出て一生を得。百度負て一戰に利有は合戰の習なり。今此戰に敵聊か勝に乗に似たりといへ共。さればとて當家の運。今日に窮りぬとは覺す。然りといへ共。盛時に於ては。一門の安否を見果る迄もなく。此陣頭にて腹を切んと思ふなり。其故は盛時足利殿に。女性方の縁に成ぬる間。相摸殿を始奉り。一家の人々。さこそ心をも置給ふらめ。是勇士の恥る所なり。彼田廣先生は。燕丹に語はれし時。此事漏すなど云れて。其疑を散せん爲に。命を失て燕丹が前に死たり多かじ。此陣戰急にして兵皆疲れたり。我何の面目か有て。堅めたる陣を引て。しかも嫌疑の中に且命を惜べきとて。戰未半ならざる最中に。帷幕の中に物具脱捨て。腹十文字に切給て。北枕に臥給ふ。南條是を見て。大將已に御自害有上は。士卒誰が爲に命を惜べき。いぞさらば御供申さ

んとて。續て腹を切ければ。同志の侍九十餘人。彌が上に重り臥て。腹をぞ切たりける。其故を十八日の晩程に。洲崎一番に破れて。義貞の官軍は。山内迄入にけり。懸る處に本間山城左衛門は。多年大佛奥州貞直の恩顧の者にて。殊更近習じけるが。聊勘氣せられたる事有て。出仕を免されず。未己が宿所にぞ候ける。已に五月十九日の早旦に。極樂寺の切通しの軍破て。敵攻入あんど聞へしかば。本間山城左衛門。若黨中間百餘人。これを最期と出立で。極樂寺坂へ向ひける。敵の大將。大館次郎宗氏が三萬餘騎にて扣たる。真中へ懸入て。勇誇たる大勢を。八方へ追散し。大將宗氏に組んと。透間もなく懸りける。三萬餘騎の兵共。須臾の程に分れ靡き。腰越迄引たりける。餘りに手繁く進で懸りしかば。大將宗氏は取て返し。思ふ程戰て本間が郎等と引組で。差違て臥し給ける。本間大に悦で馬より。飛で下。其首を取て。鉞に貫き。貞直の陣に馳參じ。幕の前に畏て。多年の奉公。他日の御恩。此一戰を以て報じ奉り候。又御不審の勢にて。空しく罷り成候は。後世迄の妄念ども。成ぬべう候へば。今の御免を蒙。心安く冥途の御先任り候はんと申も果す。流る涙を押へつ。腹掻切て予失にける。三軍をば帥を奪べしとは。彼を云べき。徳を以て怨を報ずとは。是をぞ申べき。恥かしの本間が心中やとて。落る涙を袖にかけながら。いざや本間が志を感せんとて。自ら打出られしかば。相従ふ兵も涙を

流さぬは無りけり

○稻村崎干瀉となる事

去程に。極楽寺の切通しへ向られたる。大館次郎宗氏本間に討れて。兵共片瀬腰越迄引退ぬと聞へければ。新田義貞敵兵二万餘騎を卒して。廿一日の夜半計に。片瀬腰越を打廻り。極楽寺坂へ打莅給ふ。明行月に。敵の陣を見給へば。北の切通迄山高く。路險きに。木戸を構へ。垣櫓を搦て。數万の兵陣を雙て並居たり。南は稻村が崎にて。沙頭路狭に。浪打際迄。逆木を繁く引懸て。沖四五町が程に。大船共を並て。櫓を搔て。横矢に討させんと構たり。實も此陣の奇手。叶はで引ぬらんも理なりと見給ひければ。義貞馬より下給て。冑を脱で海上を遙々と伏拜み。龍神に向て祈誓し給けるは。傳承はる。日本開闢の主。伊勢天照大神は。本地を大日の尊像に隠し。垂跡を滄海の龍神に顯はし給へりと。我君其苗裔として。逆臣の爲に。西海の浪に漂給ふ。義貞今臣たる道を盡さん爲に。斧鉞を取て敵陣に臨む。其志し偏に王化を賣け奉て蒼生を安からしめんとなり。仰願ば内海外海の。龍神八部。臣が忠義を鑒て。潮を万里の外に退け。道を三軍の陣に開しめ給へと。至信に祈念し自ら佩給へる。金作の太刀を抜て。海中へ投給ひけり。誠に龍神納受やし給けん。其夜の月の入方に。前々更に干る事も無りける。稻村が崎俄に廿餘町

干上て。平砂渺々たり。横矢射んど構へぬる。數千の兵船も。落行鹽に誘れて。遙の沖に漂へり。不思議と云も類ひ無し。義貞是を見給て。傳聞後漢の貳師將軍は。城中に水盡渴に賣られける時。刀を抜て。岩石を刺しかば。飛泉俄に湧出ど。我朝の神功皇后は。新羅を賣給し時。自ら干珠を取。海上に投給しかば。潮水遠く退て。終に戰に勝事を得せしめ給ふと。是皆和漢の佳例にして。古今の奇瑞に相似たり。進めや兵共と下知せられければ。江田。大館。里見。鳥山。田中。羽河。山名。桃井の人々を始として越後。上野。武藏。相摸の軍勢共。六万餘騎を一手に成して。稻村崎の遠干瀉を眞一文字に驅通りて。鎌倉中へ亂れ入。數多の兵是を見て。後ある敵に懸らんとすれば。前なる奇手跡に付て攻入んとす。前なる敵を防がんとすれば。後の大勢道を塞て討んとす。進退度を失ひ。東西に心迷て。墓々敵に向て。軍を致す事は無りけり。爰に島津四郎と申せしは。大力の聞へ有て誠に器量事柄人に勝れたりければ。御大事に逢ぬべき者ありとて。執事長崎入道。烏帽子にして。一人當千と憑されたりければ。詮度の合戦に向はんとして。未口々の防場へは向られず。態相摸入道の。屋形の邊にぞ置れける。斯る所に。濱の手破れて。源氏已に若宮小路迄。攻入たりと騒ぎければ。相摸入道嶋津を呼寄て。自ら酌を取て酒を勸。三度傾けける時。三間の馬屋に立られたりける。關東無雙の名馬。白波と云けるに。白鞍置てを引れける。見る人

是を浦山すと云事なし。島津門前より此馬にひたと打乗て。由井の濱の浦風に。濃紅の大笠驗を吹そらさせ。三物四物取付て傍を拂て馳向ひければ。餘多の軍勢是を見て。誠に一騎當千の兵なり。此間執事の重恩を與へて。傍若無人の振舞せられたるも。理り哉と。思ひぬ人はあかりけり。義貞の兵是を見て。天晴敵やと匂ければ。栗生。篠塚。畑。矢部。堀口。由良。長瀬を始として。大力の覺取たる悪者共。我先に彼武者と組で勝負を決せんと。馬を進て相近付。兩方名譽の大力共が。人交もせず軍する。これ見よどのめきて。敵御方諸共に。堅睡を呑で汗を流し。是を見物してぞ扣たる。斯る處に。島津馬より飛で下。胃を脱で閑々と。身繕をする程に。何とするやと見居たれば。をめぐりと降参して。義貞の勢にぞ加りける。貴賤上下是を見て。響つる詞を翻して悪ぬ者は無りけり。是を降人の始として。或は年比重恩の郎從。或は累代奉公の家人共生を棄て降人になる。親を棄て敵に付目も當られざる有様なり。凡源平威を振ひ。互に天下を争はん事も。今日を限りとぞ見へたりける

○鎌倉兵火の事付長崎父子武勇事

去程に。濱面の在家并に稻瀬川の東西に火を懸たれば。折節濱風烈しく吹布て。車輪の如くなる炎。黒煙の中に飛散て。十町廿町が外に燃付事。同時に廿餘箇所なり。猛火の下より。源氏の兵

亂れ入て。十方を失へる敵共を。此彼に射伏切伏。或は引組で差違へ。或は生捕分捕様々あり。煙に迷へる女童部共追立られて。火の中堀の底共云す。逆倒れたる有様は。是や此帝釋宮の戦に。修羅の眷屬共。天帝の爲に罰せられて。劔戟の上に倒伏し。阿鼻大城の罪人が。獄卒の槍に驅れて。鉄湯の底に陥らんも。斯やと思知れて語るに言も更に無し。聞に哀を催して皆涙にぞ咽びける。去程に餘煙四方より吹懸て。相摸入道殿の屋形近く火懸りければ。相摸入道殿千餘騎にて。葛西が谷に引籠り給ければ。諸大將の兵共は東勝寺に充滿たり。是は父祖代々の墳墓の地あれば。爰にて兵共に防矢射させて。心閑に自害せん爲あり。中にも長崎三郎左衛門入道思元。子息勘氣由左衛門爲基二人は。極樂寺切通しへ向て。責入敵を支て防ぎけるが。敵の関の聲已に小町口に聞へて。鎌倉殿の御屋形に火懸りぬと見へしかば。相従ふ兵七千餘騎をば。猶元の責口に殘し置。父子二人が手勢六百餘騎を勝て。小町口へぞ向ひける。義貞の兵是を見て。中に取籠て討んとす。長崎父子一所に打寄て。魚鱗に連ては懸破り。扨韜に分れては追靡け。七八度が程々揉たりける。義貞の兵共脚手十文字に懸散されて。若宮小路へ颯と引て。人馬に息をぞ繼せける。斯る所に。天狗堂と扇が谷に軍有と覺て。馬煙。夥敷見へければ。長崎父子左右へ別て馳向はんとしけるが。子息勘解由左衛門。是を限と思ければ。名殘惜げに立止て。遙に父の方を

見遣て。兩眼より泪を浮べて行も過ざりけるを。父屹と是を見て高らかに耻しめて。馬を扣て云ける。何か名残の惜かるべき。獨り死して。獨り生殘らんこそ。再會其期も久しからんすれ。我も人も。今日の日の中に討死して。明日は又冥途にて寄合んする者が。一夜の程の別れ。何かさまで悲しかるべきとて。高聲に申されければ。爲基涙を推拭左候。疾して冥途の旅を御急ぎ候へ。死出の山路にては待參せ候はんと云捨て。大勢の中へ懸入ける心の中こそ哀なれ。相從ふ兵僅に廿餘騎に成しかば。敵三千餘騎の。真中に取籠て。短兵急に。拉かんす。爲基が佩たる太刀は。面影と名付て。來太郎國行が。百日精進して。百貫にて。三尺三寸に打たる太刀なれば。此鋒に廻る者。或は背の鉢を立破に破れ。或は胸板を袈裟懸に。切て落されける程に。敵皆是に追立られて。敢て近付者も無りけり。只陣を隔て。矢袋を付て。遠矢に射殺さんとしける間。爲基が乗たる馬に。矢の立事七筋なり。斯て然べき敵に近付て。組んとする事叶はじと思ければ。由井の濱の大鳥居の前にて。馬よりゆらりと飛下。只一人太刀を傾に杖て。二王立にぞ立たりける。義貞の兵是を見て。猶も只十方より。遠矢に射る計にて。寄合んとする者ぞ無りける。敵を待ん爲。手負たる真似をして。小膝を折てぞ臥たりける。爰に誰とは知ず。粒鼓匹龍の。等驗付たる武者四十餘騎。ひしくと打寄て。勘解由左衛門が首を取んと争ひ近付ける處に。爲基がばと起て。太刀を取直し。何者ぞ人の軍にしくたびれて。蓋寐したるを驚かすは。いで己等が欲がる。頸取せんと云儘に。鏑本迄。血に成たる太刀を打振て。鳴雷の落かゝる様なる大手をばだけて。追ける間。五十餘騎の者共。逸足を出し逃ける間。勘解由左衛門大音揚て。何く迄逃るぞ。遂し返せと。筒聲の只耳本に聞へて。日來さしも早しと思し馬共。皆一所に踊る心地して。恐しあんと云計なし。爲基只一人懸入て。裏へ抜。取て返して。懸亂し。今日を限りと戦ひしが。廿一日の合戦に。由井濱の大勢を東西南北に懸散し。敵御方の目を驚し。其後は生死を知らず成にけり

○大佛貞直并金澤貞將討死の事

去程に。大佛陸奥守貞直は。昨日迄。二万餘騎にて。極樂寺の切通じと支て。防戦ひ給けるが。今朝の濱の合戦に。三百餘騎に討成れ。剩へ敵に後を遮られて。前後に度を失て御坐ける處に。鎌倉殿の御屋形にも。水懸りぬと見へしかば。世間今の扱とや思けん。又主の自害をや勤けん。宗徒の郎從卅餘人。白洲の上に物具脱捨て。一面に並居て。腹をぞ切にける。貞直是を見給て。日本一の不覺の者共の行跡哉千騎が二騎に成迄も。敵を亡ぼして。名を後代に残すこそ。勇士の本意とする處なれ。いでさらば。最期の一合戦快して。兵の義を勤んとて。二百餘騎の兵

九十六百二

を相隨へ。先大島。里見。額田。桃井が六千餘騎にて礮たる。真中へ破て入。思ふ程戰ふて。敵
數多討取て。ばつと駈出見給へば。其勢僅に。六十餘騎に成にけり。真直其兵を指招で。今は未
々の敵と懸合ても無益ありとて。脇屋義助。雲霞の如くに礮へたむ。真中へ駈入。一人も殘らず
討死して。尸を戰場の土にぞ殘しける。金澤武藏守貞將も。山内の合戰に。相隨ふ兵八百餘人討
散され。我身も七箇所迄疵を蒙て。相摸入道の御坐で。東勝寺へ打歸り給たりければ。入道斜な
らず感謝して。頼て兩探題職に居らるべき。御教書を成され。相摸守にぞ移されける。貞將は
一家の滅亡日の中を過さじと思はれけれ共。多年の所望氏族の規模とする職なれば。今は冥途の
思出にもあれかしと。彼御教書を請取て。又戰場へ打出給けるが。其御教書の裏に「棄我百年
命一報公一日恩」と大文字に書て。是を鎧の引合に入て。大勢の中へ懸入。終に打死し給け
れば。當家も他家も推並て。感せぬ者も無かりけり

○信忍自害の事

去程に。普恩寺前相摸守入道信忍も。假粧坂へ向ひれたりしが。夜晝五日の合戰に。郎從盡く
討死して。僅に二十餘騎を残りける。諸方の攻口皆破れて敵谷々に入亂れぬと申ければ。入道普
恩寺討殘されたる若黨諸共。自害せられけるが。子息越後守仲時。六波羅を落て。江州番馬に

て。腹切給ぬと告たりければ。其最期の有様思出して。哀に堪ずや思はれけん。一首の歌を。御
堂の柱に血を以て書付給けるとかや

待暫死出の山邊の旅の道同く越て淨世語らん

年比嗜み弄び給し事とて。最期の時も忘れず。心中の愁緒を述て。天下の稱嘆に残されける。
數寄の程こそ優しけれと。皆感涙を流しける

○塩田父子自害の事

爰に不思議ありしは。鹽田陸奥の入道道祐が子息民部大輔俊時。親の自害を勸めんと。腹撞切て
目前に臥たりけるを見給て。幾程あらぬ今生の別に。目くれ心迷て。落る涙も留らず。先立ぬる
子息の菩提をも祈り。我逆修にも。備へんと思はれけん。子息の尸骸に向て、年比誦し給ける
持經の紐を解。要文所々打上。心閑に讀誦し給ひけり。打漏されたる郎等共。主と共に自害せん
とて。二百餘人並居たりけるを。三方へ差遣し。此御經誦終る程。防矢射よと下知せられけり。
其中に狩野五郎重光計は。年比の者なる上。近く召仕れければ。我腹切て後屋外に火を懸て。敵
に首とらすと云合め。一人留置れけるが。法華經已に。五の卷提婆品はでんとしける時。狩野
五郎門前に走出て。四方を見る真似をして防矢仕つる者共。早皆討れて敵攻近付候。早々御自害

候へど鞠ければ。入道さらばとて。經をば左の手に握。右の手に刀を抜て。腹十文字に掻切て父子同じ枕に平臥給ける。重光は年比と云。重恩と云。當時遺言。旁々遊れ難ければ。頼て腹をも切んずらんと思たれば。さは無て。主二人の鎧太刀を剝。家中の財寶中間下部共に取持せて。圓覺寺の藏主寮に隠居たりける。此重寶共にては。一期不足あらじと覺しに。天罰にや懸りけん。舟田入道是を聞付て。推寄是非なく召取て。遂に首を刎て。由井の濱に掛られける。尤斯こそ有たけれどとて。悪まぬ者も無りけり。

○鹽飽入道自害の事

鹽飽新左近入道聖遠は。嫡子三郎左衛門忠頼を呼。諸方の攻口悉く破れ。御一門達大略腹切せ給と聞ければ。入道も守殿に先立進せて。其忠義を知れ奉らんと思なり。されば御邊は未私の眷養にて。公方の御恩をも蒙らねば。縦ひ一所にて。今命を捨す共。人強ち義を知ぬ者とは思はじ。然れば何くにも暫く身を隠し。出家遁世の身どもあり。我後生をも訪ひ。心安く一身の生涯をも暮せかした。泪の中に宣ひければ。三郎左衛門忠頼も。兩眼に泪を浮め。暫し物も申されざりけるが。良有て。是こそ仰共覺へ候はね。忠頼直に公方の御恩を蒙りたる事は候はね共。一家の積命。悉く是武恩に非すと云事無し。其上忠頼幼少より。釋門に至る身ならば。恩を棄て。

無爲に入道も然るべし。苟も弓矢の家に生れ名を此門棄に懸あがら。武運の傾くを見て。時の難を遁れんが爲に。出塵の身と成て。天下の人に。指を差れん事。是に過たる恥辱や候べき。御腹召れ候は。冥途の御道まるべ仕り候はんと云も果す。袖の下より刀を抜て。偷に腹に突立て。畏つたる躰にて死ける。其弟鹽飽四郎是を見て。續て腹を切んとしけるを。父の入道大に諫て暫く我を先立て。順次の孝を専らにし。其後自害せよと申ければ。鹽飽四郎拔たる刀を收て。父の入道が前に。畏てぞ候ける。入道是を見て。快げに打笑ひ。閑々と中門に。曲祿を飾らせて。其上に結跏趺坐し。硯取寄て自ら筆を染。辭世の頌を書たりける。

提持吹毛截斷虚空大火聚裏一道清風

と書て。又手して頭を伸て。子息四郎に其討と下知しければ大膚脱に成て父の頭を打落して。其太刀を取直して鏝もど迄己が腹につま貫て。うつふし様に平臥たりける。郎等三人是を見て。走寄同じ太刀に貫れて。申にさしたる魚肉の如く。頭をつらねて。伏たりける。

○安東入道自害の事付漢王陵が事

安東左衛門入道聖秀と申せしは。新田義貞の北臺の伯父なりしかば。彼女房。義貞の狀に我文を書添て偷に聖秀が方へぞ遣されける。安東始は三千餘騎にて。稻瀬川へ向たりけるが。世良田太

郎が稻村崎より後へ廻りける勢に。陣を破られて引けるが。由良長濱が勢に取籠られて。百餘騎に討ちされ。我身も薄手あまた所負て。己が館へ歸りたりけるが。今朝巳刻に。宿所は早焼て。其跡も無し。妻子眷屬は何地へか落行けん。行末も知す成て。尋ね問べき人も無し。是のみならず。鎌倉殿の御屋形も焼て。入道殿東勝寺へ落させ給ぬと申者有ければ。扱御屋形の焼跡に。傍輩何様。腹切討死してみゆるかと尋ければ。一人も見へず候とぞ答へける。是を聞て安東口惜き事哉。日本國の主。鎌倉殿程の。年比住給し處を。敵の馬の蹄に懸させあがら。そこに千人も二千人も。討死する人の無りし事よと。後の人々に欺れん事こそ取辱され。いざや人々迎も死せんする命を。御屋形の焼跡にて。心閑に自害して。鎌倉殿の御恥を洗がんとて。討死されたる郎等百餘騎を相隨て。小町口へ打莅む。前々出仕の如く。塔の辻にて馬より下。空しさ跡を見廻せば。今朝迄は奇麗ある。大厦高塔の構へ忽に灰燼と成て。須臾に轉變の煙を殘し。昨日迄遊戯せし親類朋友も。多く戰場に死して盛者必衰の尸を殘せり。悲みの中の悲みに。安東涙を押へて。茫然たる處に。新田殿の北の臺の御使とて。薄様に書たる文を捧たり。何事とて披見れば。鎌倉の倉の有様。今は扱とて承り候へ。如何にもして此方へ御出候へ。此程の式をば。身に替ても申看むべく候なんど。様々に書れたり。是を見て安東大に色を損じて申けるは。旂檀の林に入者。

染ざるに衣自から香しといへり。武士の女房たる者は健氣成心を一ツ持てこそ。其家をも繼。子孫の名をも露す事あれ。されば昔漢の高祖と。楚の項羽と戦ける時。王陵と云者。城を構て籠たりしを。楚是を攻に更に落す。此時楚の兵相謀て云。王陵は母の爲に忠孝を存する事淺からず。所詮王陵が母を捕へて。楯の面に當て城を攻る程ならば。王陵矢を射事を得ずして。降人に出る事有べしとて。潛に彼母を捕てけり。彼母心の中に思けるは。王陵我に仕る事。大舜曾參が孝行にも過たり。我もし楯の面に縛せられ。城に向ふ程ならば。王陵悲みに堪ずして。城を落さるゝ事有べし。如し幾程なき命を。子孫の爲に捨んにはと。思定て自ら劍の上に死して社。遂に王陵が名をば揚たりしが。我只今迄武恩に浴して。人に知るゝ身とされり。今事の急あるに臨で降人に出たらば人豈恥を知らる者と思はんや。されば女性心にて。縦ひ箇様の事を云るゝ共。義貞勇士の義を知給はざる事や有べき。制せらるべし。又義貞縦ひ敵の志を謀ん爲に宣ふ共。北の方是我方様の名を失はじと思はれば。堅辭せらるべし。只似るを友とすうたてさ子孫の爲に憑まれずと。一度は恨み。一度は怒て彼使の見る前にて。其文を刀に牽り加へて。腹掻切て予失給ひける

○龜壽殿令落信濃事付左近太夫偽落奥州事

爰に相摸入道殿の舍弟四郎左近太夫入道の方に候ける。諏訪左馬助入道が子息。諏訪三郎盛高は。數度の戦に。郎等皆討れぬ。只主従二騎に成て。左近太夫入道の宿所に來て申けるは。鎌倉中の合戦。今は是迄ど覺て候間。最後の御供仕り候はん爲に參て候。早思召切せ給へど勸申ければ。入道傍の人をのけさせて。潜に盛高が耳に宣ひけるは。此亂量ざるに出來。當家已に滅亡しぬる事更に他あり。只相摸入道殿の御振舞人望にも背き。神慮にも違たりし故なり。但し天縱ひ驕を惡み。盈るを缺共。數代積善の餘慶家に盡すば。此子孫の中に。絶たるを繼廢れたるを興す者無らんや。昔齊の襄公無道ありしかば。齊の國亡ぶべきを見て其臣に鮑叔牙と云ける者。襄公の子小白を取て。他國へ落てけり。其間に襄公果して。公孫無知に亡ぼされ。齊國を失へり。其時に鮑叔牙小白を取立て。齊の國へ推寄。公孫無知を討事を得て。遂に再び齊國を保せける。齊の桓公は是なり。されば我に於て深く存する仔細あれば。左右亦く自害する事有べからず候。通つべくんば。再び會稽の恥を雪ばやと思あり。御邊も能々遠慮を廻して。如何成方にも隠れ忍ぶか。然らずは降人に成て命を繼で。甥にて有。龜壽を隠置て。時至りぬと見ん時。再び大軍を起して素懷を遂らるべし。兄の万壽をば。五大院の右衛門に申付たれば。心安く覺るありと宣へば。盛高涙を押し申けるは。今迄は一身の安否を。御一門の存亡に任せ候ければ。命をば惜むべく候は

ず。御前にて自害仕て。二心なき程を見へ參せ候はんする爲にこそ。是まで參て候へ共。死を一時に定るは安く。謀を万代に残すは。難しと申事候へば兎も角も。仰に隨ふべく候とて。盛高は御前を罷立て。相摸殿の妾二位殿の御局の。扇の谷に御坐ける處へ。參りたりければ。御局を始進せて。女房達迄誠に嬉しげにて扱も此世の中は。何と成行べきぞや。我等は女なれば。立隱る方も有ぬべし。此龜壽をば如何すべき。兄の万壽をば五大院の左衛門隠すべき方有とて。明日何方へやらん具足しつれば。心安く思なり只此龜壽が事を煩て。露の如くある我身さへ。消詫ぬるぞと泣口説給ふ。盛高此事有の儘に申て。御心をも慰奉らばやと思ひければ共。女性にはかき者なれば。後にも若し人に泄し給ふ事もやと思返して。泪の中に申けるは。此世中今は扱とこそ覺へ候へ。御一門大略御自害候なり。大願計こそ。未葛西が谷に御座候へ公達を一目御覽し候て御腹を召るべしと仰候間。御迎の爲に參て候と申ければ。御局嬉しげに御座つる。御氣色。まはくどならせ給て。万壽をば宗繁に預けつれば心安し。排て此子をも。能々隠してくれよと。仰せも敢ず。御涙に咽ばせ給しかば。盛高も岩木あらねば。心計は悲しけれ共。心を強く持て申けるは。万壽御料をも五大院右衛門宗繁が具足し進せ候つるを。敵見付て追懸進せ候しかば。小町口の在家に走り入て。若子をば刺殺し參らせ。我身も腹切て焼死候つるなり。あれ若子も。今

日此世の御名残。是を限と思召候へ。とても隠れ有まじき物故に。狩場の雉の草隠たる有様にて。敵に探し出されて。幼き御戸に一家の御名を失れん事。口惜く候それよりは大殿の御手に懸られ給て。冥途迄も御供申させ給たらんこそ。生々世々の忠孝にて御坐候はん疾々入進せ給へと勸ければ。御局を始進て。御乳母の女房達に至る迄。うたての事を申者哉。責て敵の手に懸らばいかいせん。二人の公達を懐育進せつる人々の手に懸て。失ひ奉らんを見聞ては。いか計どか想像。只我を先殺して後。何共計へとて。少き人の前後に取付て。聲も惜まで泣悲しみ給へば。盛高も目眩心消々と成しか共。思切らでは叶まじと思て。聲をいらへげ。色を損じて御局を睨奉り。武士の家に生れん人。襦の中より。斯る事あるべきと。思召れぬこそうたてけれ。大殿のさこそ待思召候らん。早御渡り候て。守殿の御供申させ給へと云儘に。走懸り。龜壽殿を抱取て。鐵の上に乗負て門より外へ走出れば。同音にわつと泣つれ給し。御聲々。遙の外所迄聞へつ。耳の底にどいまれば。盛高も泪に行兼て。立返て見送れば。御乳母の御妻と申人は。歩既にて。人目も憚らず走出させ給て。四五町が程は。泣ては倒れ。倒れては起。跡に付て追れけるを盛高心強く。行方を知れじと馬を進て打程に。後影も見へず成にければ。御妻今は誰をうたて。誰を憑て命を惜むべきぞやとて。あたり成古井に身を投て。終に空しく成給。其後盛高。此若公を供足して。信濃へ落下り諏訪の祝を憑て。有しが。建武元年の春の比。暫く關東を劫略して。天下の大軍を起し。中前代の大將に。相摸三郎と云しは是あり。斯して四郎左近太夫入道は一心なき侍共を呼寄て。我は思様有て。奥州の方へ落て。再び天下を覆す計を廻らすべし。南部太郎。伊達六郎二人は案内者なれば。召供すべし。其外の人々は。自害して屋形に火を懸。我は腹を切て。焼死たる跡を。敵に見すべしと宣ひければ。廿餘人の侍共。一義にも及ばず。皆御定に隨ふべしと不申ける。伊達南部二人は貌をやつし。夫になり。中間二人に。物具着せて馬に乗せ。中黒の笠符を付させ。四郎入道を辨に乗て。血を付たる帷を上引覆ひ。源氏の兵の手を負て。本國へ歸る真似をして。武藏迄落たりける。其後殘し置たる侍共。中門に走出。殿は今御自害有ぞ志しの人。皆御供申せと呼つて。屋形に火を懸忽ちに煙の中に並居て。廿餘人の者共は。一度に腹をぞ切たりける。是を見て庭上門外に。袖を連ねたる兵共。三百餘人面々に劣らじくと腹切て。猛火の中へ飛で入。尸を殘さず焼死けり。扱こそ四郎左近太夫入道の。落給ひぬる事をば知ずして。自害し給ぬと思ける。其後西園寺の家に仕へて。建武の比京都の大將にて。時興と云れしは此入道の事ありけり

○長崎次郎高重最後合戦の事

建武の比京都の大將にて。時興と云れしは此入道の事ありけり

去程に。長崎次郎高重は始武藏野の合戦より今日に至る迄。夜晝八十餘箇度の戦に。毎度先を
 懸。圍を破て。自ら相當る事。其數を知ざりしかば。手の者若黨共。次第に打滅されて。今は僅
 に百五十騎に成にけり。五月廿二日に源氏早谷々へ亂入て。當家の諸大將。大略皆討れ給ぬと聞
 へければ。誰が堅たる陣共云はず。只敵の近付所へ馳合へ。八方の敵を拂て。四隊の堅と破り
 ける間。馬疲れぬれば乗替。太刀打折ば。帶替て。自ら敵を切て落す事三十二人陣を破る事八箇
 度なり。斯て相撲入道の御坐。葛西が谷へ歸り參て。中門に畏り。泪を流し申ける。高重數代奉
 公の義を忝して朝夕恩顔を拜し奉りつる。御名殘。今生に於ては。今日を限りとこそ覺候へ。
 高重一人數箇所の敵を打散して。數箇度の戦に。毎度打勝候といへ共。方々の口々。皆攻破られ
 て。敵の兵鎌倉中に充滿して候ぬる上は。今は矢武に思共叶べからず候。只一筋に敵の手に懸ら
 せ給はぬ様に。思召定させ給ひ候へ。但し高重歸り參じて。勘申さん程は。左右なく御自害候者。
 上の御存命の間に。今一度快く敵の中へ懸入。思ふ程の合戦して。冥途の御供申さん時の。物語
 に仕候はんとて。又東勝寺を打出づ。其後影をば。相撲入道遙に見送り給て。是や限り成らんと。
 名殘惜げある跡にて。泪ぐみて立れたる。長崎次郎甲をば脱捨筋の帷の。月日推たるに。精好
 の大口の上に。赤絲の腹巻を着て。小手をば差す兎鶏と云ける。坂東一の名馬に。金貝の鞍置。小

總の戦懸てぞ乗たりける。是を最後と思定ければ。先崇壽寺の長老。南山和尚に參じて。案内
 申ければ。長老威儀を具して出合給へり。方々の軍急にして。甲冑を帶したりければ。高重は庭
 に立ながら。左右に掲して問て曰。如何なるか是勇士徳慶の事。和尚答て曰。吹毛急に用て前に
 は如じ。高重此一句を聞て。問訊して。門前より馬引寄打乘て。百五十騎の兵を前後に相隨へ。
 笠符かなぐり捨。閑に馬を歩せて。敵陣に紛れ入。其志し偏に。義貞に相近付ば。撲で勝負を決
 せん爲あり。高重旗をも差す。打物の室をばづしたる者なければ。源氏の兵。敵共知ざりけるに
 や。をめぐと中を開て通しければ。高重義貞に近付事。僅に半町計あり。すはやと見ける處に。
 源氏の運や強かりけん。義貞の眞前に扣たりける由良新左衛門是を見知て。只今旗をも差す。相
 近付勢は。長崎次郎と見るぞ。さる勇士なれば。定て思慮候て。是迄は來らん。餘すな漏すもど。
 大音揚て呼りければ。前陣に響たる。武藏の七黨三千餘騎。東西より引襲で。眞中に是を取籠。
 我もくと討んとす。高重は支度相違しぬと思ければ。百五十騎の兵を。ひしと一所へ寄て。
 同音に時をどつと揚。三千餘騎の者共を。懸抜懸入交り合。彼に顯れ此に隠れ。火を散して。戰
 ける。聚散離合の有様は。須臾に變化して。前に有かどすれば。忽焉として後にあり。御方かど
 思へば。屹として敵なり。十方に分身して。万卒に同じく相當ければ。義貞の兵高重が在所を見

定ず。多くは同士打をうまたりける。長濱六郎是を見て。云甲斐なき人々の同士討哉。敵は皆笠符を付すと見へつるぞ。中に紛れば。それを験にきて。組で討と下知しければ。甲斐。信濃。武藏。相模の兵共。押並てはひすと組。組で落ては。首を取もあり。取るもあり。芥屋天を掠。汗血地を糺糊す。其在様。項王が漢の三將を靡かし。魯陽が日を。三舎に返し。戦しも。是には過と見へたりける。され共長崎次郎は未討れず。主従只八騎に成て戦けるが。猶も義貞に組んと伺て。近付敵を打拂ひ。動は差違て。義貞兄弟を目に懸て廻りけるを。武藏國の住人横山太郎重真。押隔て。是に組んと馬を進て相近付。長崎も能敵あらば組んと。懸合て。是を見るに。横山太郎重真なり。扱は合ぬ敵ぞと思ければ。重真を弓手に相受甲の鉢を菱縫の板迄破付たりければ。重真二つに成て失にけり。馬も尻居に打居られて。小膝を折てとらと伏。同國の住人庄の三郎爲久是を見て。能敵ありと思ければ。續て是に組んと。大手をはだけて馳懸る。長崎遙に見て。からくと打笑て。黨の者共に組べくば。横山をも何かは嫌べき合ぬ敵を失ふ様。いでく己に知せんとて。爲久が鎧の總角抓で中に提げ。弓杖五枚計安々と投渡す。其人礫に當ける。武者二人馬より倒に打落されて。血を吐て空く成にけり。高重今は逆も敵に見知れぬる上はと思ければ。馬を懸居大音揚て名乗けるは。桓武第五の皇子。葛原親王に三代の孫平將軍貞盛より十三代。前相模

守高時の管領に。長崎入道圓喜が嫡孫次郎高重。武恩を報せん爲討死するぞ。高名せんと思はん者は。よれや組んと云儘に。鎧の袖引ちぎり草摺あまた切落し。太刀をも鞘に納つ。左右の大手を播ては。此に馳合彼に馳違。大童に成て懸散しける。斯る所に。郎等共。馬の前に馳塞て。何ある事にて候ぞ。御一所こそ箇様に馳廻り坐せ。敵の大勢にて。早谷々に亂入。火を懸物を亂妨し候。急ぎ御歸り候て守殿の御自害をも勸め申させ給へと云ければ。高重郎等に向て宣ひける。餘に人の逆るが面白さに。大殿に約束しつる事をも忘れぬぞ。いざいざらば歸り参らんとて。主従八騎の者共。山内より引返しければ。逃て行とや思けん。兒玉黨五百餘騎。蓬し返せと伺て。馬を争て追懸たり。高重とくしの奴原や。何程の事が仕出すべき逆聞ぬ由にて打けるを手茂く追て懸りしかば。主従八騎吃と見返て。馬の轡を引廻すとぞ見へし。山内より葛西の谷口迄。十七度迄返し合せて。五百餘騎を追退け。又開々ぞ打て行ける。高重が鎧に立處の矢廿三筋。箭毛の如く折かけて。葛西が谷へ参りければ。祖父の入道待請て。何とて今迄遅かりつるぞ。今は是迄かと問れば。高重畏り。若大将義貞に寄せせば。組で勝負をせばやと存候て。廿餘度迄懸入候へ共。遂に近付得ず。其人と覺し敵にも見合候はで。とら成黨の奴原四五百人切落してぞ捨候つらん。天晴罪の事だに思候はずば。猶も奴原を。濱面へ追出して弓手馬

手に相討。車切胴切立破に仕捨度存候つれ共。上の御事。何がと御心元なくて。歸參て候と。聞も涼敷語るに。最後に近き人々も。少心を慰ける

○高時并一門以下於東勝寺自害事

去程に高重。走廻て。早々御自害候へ。高重先を仕て。手本に見せ參せ候はんと云儘に。胴計残たる。鎧脱で抛捨て。御前に有ける。盃を以て。舍弟の新左衛門に酌を取せ。三度傾て。攝津刑部太夫入道道準が前に置。思ひ指申ぞ。是を着にし給へとて。左の小脇に刀を突立て右の傍腹迄。切目長く掻取て。中なる腸手繰出して。道準が前に伏たりける。道準盃を取て。おはれ着や何なる下戸あり共是を飲ぬ者あらじと戯て。其盃を半分計呑殘して。諏訪入道が前に指置。同く腹切て死けり。諏訪入道直性其盃を以て。心閑に三度傾て。相模入道殿の前に差置て。若者共。随分藝を盡て。振舞れ候に。年老なればとて。争か候べき。今より後は皆是を送着に仕るべしとて。腹十字文字に掻切て。其刀を抜て。入道殿の前に差置たり。長崎入道圓喜は。是迄も猶相模入道の御事を。何奈と思たる氣色にて。腹をも未切ざりけるが。長崎新右衛門。今年十五に成けるが。祖父の前に畏て。父祖の名を顯すを以て。子孫の孝行とする事にて。候なれば。佛神三寶も定て。御免こそ候はんすらんとて。年老残りたる祖父の圓喜が眩のかかり

を三刀刺て。其刀にて。己が腹を掻切て祖父を取て引伏て。其上に重てぞ伏たりける。此小冠者に義を進られて。相模入道も腹切給へば。城の入道續て腹を切たりける。是を見て。堂上に座を列たる一門他家の人々。雪の如ある膚を押肌脱く。腹を切人もあり。自ら首を掻落す人もあり。思々の最後の跡殊に由々敷々見たりし。其外の人々には。金澤太夫入道崇顯。佐介近江前司宗直。甘名宇駿河守宗顯。子息駿河左近太夫將監時顯。小町中務太輔朝實。常盤駿河守範貞。名越土佐前司時元。攝津刑部太輔入道。伊具越前々司宗有。城加賀前司師顯。秋田城介師時。城越前守有時。南部右馬頭茂時。陸奥右馬助家時。相模右馬助高基。武藏左近太夫將監時名。陸奥左近將監時英。櫻田治部太輔貞國。江馬遠江守公篤。阿曾彈正少彌治時。坊田式部太輔篤時。遠江兵庫助顯勝。備前左近太夫將監政雄。坂上遠江守貞朝。陸奥式部太輔高朝。城介高量。同式部太夫顯高。同美濃守高茂。秋田城介入道延明。明石長門介入道忍阿。長崎三郎左衛門入道思元。隅田次郎左衛門。攝津宮内太輔高親。同左近太夫將監親貞。名越一族卅四人。鹽田。赤橋。常葉。佐介の人々。四十六人惣じて其門葉たる人。二百八十三人。我先にと腹切て。屋形に火を懸たれば。猛炎昌に燃上り。黒烟天を掠たり。庭上門前に並居たりける兵共是を見て。或は自ら腹掻切て。炎の中へ飛入もあり。或は父子兄弟。差違へ。重り臥もあり。血は流て大地に溢れ。

満々として洪河の如くなれば。尸は行路に横はつて。累々たる郊原の如し。死骸は焼て見へぬ共。後に名字を尋れば。此へ一所にて死する者惣て八百七十餘人あり。此外門葉恩顧の者。僧俗男女を云はず。開傳へく。泉下に恩を報ずる人。世上に悲みを催す者。遠國の事はいざ知す。鎌倉中を考ふるに。惣て六千餘人なり。嗚呼此日は如何成日ぞや。元弘三年五月廿二日と申に。平家九代の繁昌一時に滅亡して。源氏多年の整懐。一朝に開くる事を得たり。

○五大院右衛門宗繁相模太郎事

義貞已に鎌倉を定て。其威遠近に振ひしかば。東八箇國の大名高家。手を束ね膝を屈すと云者あり。他日付隨て。忠を頼む人だにも此の如し。況や只今迄。平氏の恩顧に隨て。敵陣に有つる者兵。生甲斐なき命を續ん爲に。所縁に屬し。降人に成て。肥馬の前に塵を望み。高門の外に地を掃ても。己が咎を補はんと。思へる心根あれば。今は浮世の望を捨て。僧法師に成たる平氏の一族達をも。寺々より引出して。法衣の上に血を淋漓。二度は人に契らじと。髪をおろし。貌を替んとする。亡夫の後室共をも。所々より探し出して。貞女の心を失しむ。悲き哉。義を専らにせんとして。忽に死せる人は。永く修羅の奴子と成て。苦みと多劫の間に受ん事と。痛き哉。恥を忍で。苟も生る者は。立所に衰弱の身と成て。笑を万人の前に得たる事を。中にも五大院の右衛門尉宗繁は。故相模入道殿の。重恩を興へたる侍なる上。相模入道の嫡子相模太郎邦時は。此五大院右衛門が。妹の腹に出来たる子あれば甥あり。主なり。何れに付ても。貳は非じと。深く憑まれけるにや。此邦時をば。汝に預け置ぞ。如何成方便をも廻し。是を隠し置。時至りぬと見へば。取立て亡魂の恨みを謝すべしと。相模入道宣ひければ。宗繁仔細候はじと領掌して。

鎌倉の合戦の最中に降人にぞ成たりける。斯て二三日を経て後。平氏悉く滅びしかば。關東皆源氏の願命に隨て。此彼に隱居たる。平氏の一族共。數多探し出されて。搦手は所領を預り。隠せる者の。忽に誅せらるゝ事多し。五大院右衛門是を見て。いや／＼果報盡終たる人を扶持せんとて。適々遁れ得たる。命を失はんよりは。此人の在所を知らる由源氏の兵に告て。貳なき所を顯し。所領の一所をも安堵せばやと思ければ。或夜彼相摸太郎に向て申けるは。是に御座の事は。如何成人も知候はじとこそ存じて候に。如何して漏聞へ候けん。船田入道明日是へ押寄候て。探し奉らんと用意候由。只今或方より告知せて候。何様御座の在所を。今夜替候はでは叶まじく候。夜に紛て急ぎ伊豆の御山の方へ。落させ給候へ宗繁も御供申度は存候へ共。一家を盡て落候なば。船田入道さればこそと心付て何く迄り尋ね求る事も候ぬんと存候間能御供をば申まじ候と誠し顔に成て云ければ相摸太郎實もど。身の置所なくて。五月廿七日の夜半計に。忍て鎌倉を落給ふ。昨日迄は天下の主たりし。相摸入道の嫡子にて有しかば。假初の物詣で方違ひと云しにも。御内外様の大名共。細馬に轡を嚙せて。五百騎。三百騎。前後に打圍でころ往復せしに。時移り事替りぬる。世の有様の淺猿さよ怪しげなる中間一人に。太刀持せて。傳馬にだにも乗で。破たる草鞋に。編笠着て。そこ共知ず泣々伊豆の御山を尋て。足に任せて行給ひける。心

の中ころ哀あれ。五大院の右衛門は。箇様にして此人をば賺出しぬ。我と討て出さば。年比奉公の好を忘れたる者よど。人に指を差れつべし。便宜好らんずる。源氏の侍に討せて。勳功を分て知行せばやと思ければ。急ぎ船田入道が許に行て。相摸の太郎殿の在所をこそ委く聞出て候へ。他の勢を交すして。討て出され候は。定て勳功他に異に候はんか。告申候忠には。一所懸命の地を安堵仕る様に。御吹舉に預り候はんと云ければ。船田入道。心中には悪き者の云様哉と思ながら。先仔細あらじと約束して。五大院右衛門尉諸共に。相摸太郎の落行ける道を。遮て予待せける。相摸太郎は行先の道に。相待敵有共。思ひよらず。五月廿八日の曙に淺猿げなる窶姿にて。相摸川を渡らんと。渡し守を待て。岸の上に立たりけるを。五大院の右衛門餘所に立て。あれ社。すは件の人よと教へければ。船田が郎等三騎。馬より飛で下り。透間も無く生取奉る。俄の事にて。張輿も無く無ければ。馬に乗せ。舟の繩にて。また／＼かに是を誠め。中間二人に馬の口を引せて。白晝に鎌倉へ入奉る。是を見聞人毎に袖を絞らぬは無りけり。此人未幼稚の身されば。何程の事か有べけれ共。朝敵の長男にておひすれば。聞へきに非ずとて。則翌日の曉潜に首を刎奉る。昔程嬰が。我子を殺して幼稚の主の命に替へ。豫讓が貌を變じて。奮君の恩を報せし。それ迄こそあからめ。年比の主を敵に討せて。欲心に義を忘れたる。五大院の右衛

門が心の程希有あり無道ありと。見る人毎に爪弾をして悪みしかば。義貞實もと聞給て。是をも
誅すべしと。内々其義定りければ。宗繁是を傳へ聞て。此彼に隠行けるが。梟惡の罪身を責ける
にや。三界廣じとすへ共。一身を置に所無く。故舊多しとすへ共。一飯を興る人無して。終に乞
食の如くに成果て。道路の街にして。飢死けるとぞ聞へし

○諸將早馬を船上へ進せらるゝ事

都には。五月十二日。千種頭中將忠顯朝臣。足利治部大輔高氏。赤松入道圓心等。追々早馬を立て。
六波羅已に没落せしむるの由。船上へ奏聞す。是に由て諸卿僉議有て。則還幸成べきや否の意
見を獻せらる。時に勘解由の次官光守諫言を以て申されけるは。兩六波羅已に没落すといへども。
千劍破發向の朝敵等猶畿内に滿て。勢ひ京洛を呑り。又賤さ諺に。東八箇國の勢を以て。日本
國の勢に對し。鎌倉中の勢を以て。東八箇國の勢に對すと云へり。されば承久の合戦に。伊賀判
官光季を追落されし事。輒かりしか共。坂東勢重て上落せし時。官軍戰に負て。天下久敷武
家の權威に落ぬ。今一戰の雌雄を測に。御方は纔に十にして。其二二を得たり。君子は刑人に近付
すと申事候へば。暫く只皇居を移され候はで。諸國へ綸旨を成下され。東國の變達を御覽せらるべ
くや候はんと申されければ。當座の諸卿悉く此義に不同せられける然れ共。主上猶時宜定がた

思召れければ。自周易を披かせ給て還幸の吉凶を著筮に就ぞ御覽せられける御占ひ師卦に出て云
師貞丈人吉無咎上六大君有命開國承家小人勿用王彌が注に云師の極に處
は師の終なり。大君の命有て功を失ざるなり。國を開き家を承とは。以て邦を寧するなり。小人
には用事勿とば。其道に非ざればなりと注せり。御占ひ已に此の如し。此上の何をか疑ふべきと
て。同廿四日伯耆の船の上を御立有て。腰輿を山陰の東へぞ催されける。路次の行粧例に替りて
頭の太夫行房。勘解由の次官光守二人計こそ。衣冠にて供奉せられけれ。其外の月卿雲客衛府諸
司の助は。皆戎衣にて。前騎後乘す。六軍盡く甲冑を著し。弓箭を帶して。前後卅餘里に支た
り。鹽治判官高貞は。千餘騎にて一日先立て前陣を仕る。又朝山太郎は。一日路引服て。五百餘
騎にて後陣に打けり。金持大和守。錦の御旗を差て左に候し。伯耆守長年は。帶劍の役にて右に
副。兩師道を清め。風伯塵を拂。紫微北辰の拱陣も。斯やと覺て嚴重あり。されば去年の春隱岐
國へ遷されさせ給し時。そらるに宸襟を惱されて御涙の故と成し。山雲海月の色今は龍顔を
しむる端と成て。松吹風も自ら。万歳を呼かど奇まれ。鹽燒浦の烟迄。賑ふ民の甍とある

○書寫山行幸の事付新田注進の事

五月廿七日には。播摩國書寫山へ行幸成て。先年の御宿願を果され。諸堂御巡禮の次に。開山性

空上人の。御影堂を開るゝに。年比秘しける物と覺て。重寶共多かりけり。當寺の宿老を一人召て。是は如何成由緒の物共ぞと。御尋有ければ。宿老畏て。一々に是を演説す。先杉原一枚を折て。法華經一部八卷并に開結の二經を。細字に書たるあり。是は上人寂寞の扉に御坐て。妙典を讀誦し給ける時。第八の冥官。一人の化人と成て。片時の程に書たりし御經あり。又齒禿て僅に残れる杉の履あり。是は上人當山より。毎日比叡山へ御入堂の時。海道卅五里の間を。一時が内に歩せ給し履なり。又布にて縫立る香の袈裟あり。是は上人御身を放す長時に懸させ給けるが。香の烟に煤たるを御覽じて。哀洗はやと仰られける時常隨給仕の乙護法。是を洗て參り候はんと申て。遙に西天を差て飛去ぬ。且く有て。此袈裟をば虚空に懸乾。恰も一片の雲の夕日に映するか如し。上人護法を呼て。此袈裟をば。如何成水にて洗たりけるぞと問せ給へば。護法日本の内には。然べき清冷水候はで。天笠の無熱池の水にて。濯で候ありと。答申されたりし御袈裟あり。生木化佛の觀世音。稽首生木如意輪。能滿有情福壽願亦滿往生極樂願百千俱胎悉所念と。天人降下供養し奉る像なり。毘首羯磨が作りし五大尊。是のみならず。法華讀誦の砌には。不動毘沙門の二童子に形を現じて。仕へ給ふなり。又延曆寺の中堂供養の日は。上人當山に坐しながら。風に如來頰を引給ひしかば。梵音遠く。叡山の雲に響て。一會の奇特を顯せし事共。委

細に演説仕りたれば。主上斜ならず信心を傾させ給て。則當國の安室の郷を御寄附有て。不斷如法經の料所に予擬せられける。今に至る迄。其妙行片時も懈たる事無して。如法如説の勤行たり。誠に滅罪生善の御願。有難かりし事共なり。廿八日に。法華山へ行幸成て御巡禮あり。是より龍駕を早められて。晦日には。兵庫の福嚴寺と云寺に。儲餉の在所を點じて。且く御座有ける處に。其日赤松入道父子四人。五百餘騎を卒して參向す。龍顏殊に麗くして。天下草創の功。偏に汝等最負の忠戦に由れり。恩賞は各望に任すべしと。獻感有て。禁門の警固に奉侍せられけり。此寺に一日御逗留有て。供奉の行列還幸の儀式を調へられける處に。其日の午刻に。羽書を頭に懸たる早馬三騎。門前迄乗打にして庭上に羽書を捧たり。諸卿驚て。急ぎ披て是を見給へば。新田小太郎義貞の許より。相摸入道以下の一族從類等。不日に追討して。東國已に靜謐の由を注進せり。西國洛中の戦に。官軍勝に乗て。兩六波羅を責落といへ共。關東を責られん事は。勇々數大事成べしと。叡慮を廻されける處に。此注進到來しければ。主上を始。進せて。諸卿一同に猶豫の宸襟を休め。欣悅稱嘆を盡され。則恩賞の宜く請に依べしと。宣下せられて。先使者三人に。各勳功の賞をを行われける

○正成兵庫へ參る事付還幸の事

兵庫に一日御逗留有て。六月二日瑤興を廻らざる處に。楠多門兵衛正成。七千餘騎にて参向す。其勢殊に由々敷々見へたりける。主上御簾を高く捲せて。正成を近く召れ。大儀早速の功。偏に汝が忠戦に有と。感じ仰られければ。正成畏て。是君の聖文神武の徳に依ずんば。微臣争か。尺寸の謀を以て。強敵の圍を出べく候はんやと。功を辭して謙下す。兵庫を御立有ける日より。正成先陣を奉て畿内の勢を相順へ。七千餘騎にて。先驅す。其道十八里が間。干戈威揚相挾。左輔右弼列を引六軍次でを守り。五雲閑に幸すれば。六月五日の暮程に東寺迄臨幸ありければ。武士たる者は申に及ばず。攝政關白太政大臣。左右の大將。大中納言。八座。七辨。五位。六位。内外の諸司。醫陰の兩道に至る迄。我劣らじと参り集しかば。車馬門前に群集して。地府に雲を敷青紫堂上に陰映して。天極に星を列たり。翌日六月六日。東寺より二條の内裏へ還幸成て。其日先臨時の宣下有て。足利治部太輔尊氏。治部卿に任ず。舍弟兵部太輔直義。左馬頭に任ず。去程に千種頭中將忠顯朝臣。帶劔の役にて。鳳箠の前に供奉せられけるが。尙非常を慎む最中なればとて帶刀の兵五百人。二行に歩せらる。尊氏直義二人は。後乘に隨て。百官の後に打せらる。衛府の官なれば迎。騎馬の兵五千餘騎。甲冑を帶して打せらる。其次に宇都宮。五百餘騎。佐々木判官。七百餘騎。土肥得能二千餘騎。此外正成。長年。圓心。結城。長沼。鹽治以下。諸國の大名

は五百騎三百騎。其旗の次に。一勢く引分て。籠路を中にして。閑に小路を打たり。凡路次の行粧行列の儀式。前々の臨幸に事替て。百司の守衛嚴重なり。見物の貴賤岐に滿て。只帝徳を頌し奉る聲洋々として耳に盈り

○筑紫合戦の事

京都鎌倉は。已に高氏義貞の武功に由て靜謐之ぬ。今筑紫に討手を下されて。九國の探題英時を責らるべしとて。二條大納言師基卿を太宰帥に成れて。既に下し奉らんとせられける處に。六月七日。菊池。小貳。大伴が許より早馬同時に京着して。九州の朝敵殘る所なく。退治候ぬと奏聞す。其合戦の次第を。後に委く尋れば。主上未船。上に御座有し時。小貳入道妙惠。大伴入道具簡。菊池入道寂阿三人同心して。御方に参べき由を申入ける間。則綸旨に錦の御旗を添てぞ下されける。其企彼等三人が心中に秘して。未色に出さずといへ共。さすがに隠れ無りければ。此事頓て探題英時が方へ聞へければ。英時彼等が野心の實否を能々伺ひ見ん爲に。先菊池入道寂阿を博多へ呼ける。菊池此使に肝付て。是は如何様彼隱謀露顯して。我等を討ん爲にぞ呼給らん。さらんに於ては。人に先をせられては叶まじ。此方より遷て博多へ寄て。親面に勝負を決せんと思ければ。兼ての約諾に任て。小貳大伴が方へ觸遣しける處に。大伴天下の落居未如何成べ

し其見定ざりければ。分明の返事に及ばず。小貳の又其比京都の合戦に。六波羅毎度勝に乗由聞へければ。己が咎を補はんとや思けん。日比の約を變じて。菊池が使。八幡彌四郎宗安を討て。其願を探題の方へぞ出したりける。菊池入道大に怒て。日本一の不當人共を憑で。此一大事を思立ける。越度なれ。よし。其人々の與せぬ軍はせられぬかどて。元弘三年三月十三日の卯刻に。僅に百五十騎にて。探題の館へぞ押寄ける。菊池入道櫛田の宮の前を打過ける時。軍の凶をや示されけん。又乗打にしたりけるを。御尤有けん。菊池が乗たる馬。俄に直て。一足も前へ進得ず。入道大に腹を立て。如何成神にてもれいせよ。寂阿が戰場へ向はんする道にて。乗打を尤給べき様やある。其義ならば矢一づ進せん。受て御覽せよとて上差の鏑を拔出し。神殿の扉を二矢迄射たりける。矢を放つと均く。馬の進み直りにければ。さうとよとあざ笑て。則打通りける。其後社壇を見ければ。二丈計成大蛇菊池が鏑に當て死たりけるこそ不思議なれ。探題は兼てより。用意したる事あれば。大勢を城の木戸より外へ出して戦はしむるに。菊池小勢なりといへ共。皆命を塵芥に比し。義を金石に類して。責戦ひければ。防ぐ兵若干討れて。攻の城へ引籠る菊池勝に乗て。扉を越關を切破て透間も無く責入ける間。英時怖へ兼て。既に自害をせんとしける所に。小貳大伴六千餘騎にて。後攻をすしたりける。菊池入道是を見て。嫡子肥後守武重を

呼て云けるは。我今小貳大伴に出拔れて。戰場の死に赴ぐといへ共。義の當る所を思ふ故に。命を墜さん事を悔す。然れば寂阿に於ては。英時が城を枕にして。討死すべし。汝は急ぎ我館へ歸て。城を堅し。兵を起して。我生前の恨を死後に報せよと云合め。若黨五十餘騎を引分て武重に相副。肥後國へぞ歸しける。故郷に留置し妻子共は。出じを終の別共知で。歸るを今やとこそ待らめと。哀に覺へければ。一首の歌を袖の笠符に書て。故郷へぞ送りける

古郷に今夜許の命共しらぞや人の我を待らん

肥後守武重は。四十有餘の獨りの親の。只今討死せんとて。大敵に向ふ戦なれば。一所にて社兎も角も成候はめと。再三申けれ共。汝をば天下の爲に留るぞと。父が庭訓堅ければ。武重力あく。是を最後の別と見捨て。泣々肥後へ歸りける。心の中こそ哀なれ。其後菊池入道は。二男肥後三郎と相共に。百餘騎を前後に立て。後攻の勢には目を懸すして。探題の屋形へ責入。終に一足も引ず。敵に差違く。一人も残らず討死す。專諸判卿が心は。恩の爲に仕はれ。候生豫子が命は。義に依て輕し共。是等をや申べき。扱も小貳大伴が今度の振舞。人倫に非すと。天下の人に譏られながら。暗知ずして。世間の様を。聞居たりける所に。五月七日。兩六波羅已に責落

されて。千劔破の寄手も悉く。南都へ引退さぬと聞へければ。小貳入道は如何すべきと仰天す。さらば我探題を討奉り。身の咎を遣ればやと思ければ。先菊池肥後守と。大伴入道とが許へ。内々使者を遣して相語ふに。菊池は先に懲て耳にも聞入す。大伴は我も咎有身あれば。角てや助ると。堅く領承してけり。今日や明日やと。吉日を撰ける所に。英時小貳が陰謀の企を聞て。事の實否を伺ひ見よとて。長岡の六郎を。小貳が許へを遣はしける。長岡則行向て。小貳に見参すべき由を云ければ。折節相参る事有とて。對面に及す。長岡力強く。小貳入道が子息。筑後新小貳が許に行向ひ云入て。去氣無き様にて。彼方此方を見るに。只今打立んずる形勢にて。楯を矯せ。鐵を礪最中あり。又遠侍を見るに。蟬本白くしたる青竹の旗竿あり。さればこそ船の上より。錦の御旗を賜たりと聞へしが。實なりけりと思て。對面せば。頓て差違んずる物をも思ける處に。新小貳何心も無げにて出合たり。長岡座席に着と均く。正なき人々の謀反の企哉と云儘に。腰の刀を抜て。新小貳に飛で懸りける。新小貳飽まで心早き者なりければ。側ある將基の盤を追取て。突刀を受留。長岡にむすど引組で。上を下へを返しける。頓て小貳が郎從共おまた走寄て。上成敵を三刀刺て。下なる主を助けければ。長岡六郎本意を達せずして。忽に命を失てけり。小貳筑後入道。扱は我謀反の企早探題に知れてけり。今は休事を得ぬ所なりとて。

大伴入道相共に。七千餘騎の軍兵を幸して。同五月廿五日の午刻に。探題英時の館へ押寄ける。世の末の風俗。義を重んずる者は少く。利に移る人は多ければ。只今迄付順ひつる。筑紫九箇國の兵共も。恩を忘れて落失。名をも惜まで。翻りける間。一朝の間の戰に。英時遂に打負て。忽に自害しければ。一族郎從三百四十人。續て腹を切たりける。哀なる哉。昨日は小貳大伴。英時に順て。菊池を討。今日は又小貳大伴。官軍に屬して英時を討。行路難。山にしも在らず。にしも在らず。只人情反覆の間に在と。白居易が書たりし筆の跡。今社思知れたれ

○長門探題降参の事

長門の探題遠江守時直。京都の合戰難義の由を聞て。六波羅に力を戮せんと。大船百餘艘に取乗て海上を上りけるが。阿波の鳴門にて。京も鎌倉も早皆源氏の爲に滅されて。天下悉く。王化に順ぬと聞へければ。鳴門より舟を漕もとして。九州の探題と一所に成らんと。心づくしへず赴ける。赤間が關に付て九州の様を伺ひ聞給へば。筑紫の探題英時も。昨日早小貳大伴が爲に亡されて。九國二島悉く公家の扶と成ぬと云ければ。一旦催促に依て。此迄付従ひたる兵共も。いつしか頓て心替して。己が様々に落行ける間。時直僅に五十餘人に成て。柳浦の浪に漂泊す。彼の浦に帆を下さんとすれば。敵鐵を支て待懸たり。此の島に。纜を結ばんとすれば。官軍

猶を並て討んとす。残り留る人々にさへ。今は心を沖津波立歸るべき方も無く。寄べき所も無ければ。世を浮舟の楫をたへ。思はぬ風に漂へり。跡に留めし妻子共も如何成ぬらんと。責て其行末を聞て後。心安く討死をも。せばやと思はれければ。且く命を延ん爲に。郎等を一人舟よりあけて。小貳島津が許へ。降人に成べき由をぞ傳へける。小貳も島津も年比の好み淺からざりけるにや。今の有様聞も哀にや思けん。急ぎ迎ひに来つて。己が宿所に入奉る。其比叟の僧正俊雅と申せしは。君の御外戚にて坐せしを。笠置の合戦の刻に。筑前の國へ流されて坐しけるが。今一時に運を開て。國人皆其左右に慎み隨ふ。九州の成敗勅許以前は。且く此僧正の計ひに有しかば。小貳島津。彼時直を同道して。降參の由をぞ申入ける。僧正仔細有と仰られて。則 御前へ召れけり。時直膝行頓首して。敢て平視せず。遙の末座に 畏て誠に平伏したる跡を見給て。僧正泪を流して仰られけるは。去ぬる元弘の 始罪無して此所に遠流せられし時。遠州我を以て寇とせしかば。或は過分の言の下に面を低て泪を押拭ひ。或は無禮の驕の前に。手を束て恥を忍ま。然るに今天道謙に 祐して。測ざるに世の變化を見るに。吉凶相亂れ榮枯地を替たり。夢現昨日は身の上の哀み。今日は他の上の悲みなり。怨を報するに恩を以てすと云事あれば。如何にもして命計を申助くべしと仰られければ。時直頭を地に付て。兩眼に涙を浮めたり。不日に飛

脚を以て。此由を奏聞有ければ。則勅免有て。惡命の地を不安堵せられける。時直甲斐なき命を扶て。嘲を万人の指頭に受といへ共。時を一家の再興に待れけるが。幾程も有ざるに病の霧に侵されて。夕の露と消にけり

○越前牛原地頭自害の事

淡河右京亮時治は京都の合戦の最中。北國の峰起を鎮めん爲に。越前國に下て。大野郡牛原と云所にぞ坐しける。幾程あうして六波羅没落の由聞へしかば。相順ひたる國の勢共片時の程に落失て。妻子從類の外。事問人も無りけり。去程に平泉寺の衆徒折を得て。彼跡を恩賞に申給らん爲に。自國他國の軍勢を相語ひ。七千餘騎を卒して。五月十二日の白晝に牛原へ押寄る。時治敵の勢の雲霞の如く成を見て。戦とも幾程か怵べきと思ければ。二十餘人有ける郎等に向ふ敵を防せて。傍近き所に。僧の坐けるを請じて。女房幼き人迄も。皆髮に剃刀をわて戒を受させて。偏に後生菩提の經營を。涙の中に不致されける。戒の師歸て後。時治女房に向て宣ひけるは。二人の子共は。男子されば稚し共敵よも命を助じと覺る間。冥途の旅に伴ふべし。御事は女性にて坐すれば縦ひ敵斯と知共。命を失奉る迄の事いよも有じ。扱も此世に在存給は。如何成人にも相馴て憂を慰む便に付給べし。無跡迄も。心安くておはせんをこそ草の陰苔の下迄も。

嬉しくは思べけれど。泪の中に掻口説て。聞へければ。女房最恨て。水に住鷺。梁に巢を組燕も。翼をかはす契りを忘れず。況や相馴進せて覺す。過ぬる十年餘の袖の下に。二人の子供を育て。千代もと祈りし甲斐もなく御身は今秋の霜の下に伏し。少き者共は。朝の露に先立て。消果なん後の悲みを堪忍ては。時の間も在存べき我身かや。迎も思に堪兼ば。生て有べき命ならず。同くは思ふ人と共に。墓あく成て。埋れん苔の下迄も。同穴の契を忘れじと。涙の床に臥沈む。去程に防矢射つる郎等共。已に皆討れて。衆徒箱の渡を打越。後の山へ廻ると聞へければ。五つと六つとに成ける少き人を。鎧唐櫃に入て。乳母二人に前後を昇せ。鎌倉川の淵に沈めよとて。遙に見送て立たれば。母儀の女房も。同く其淵に身を沈めんと。唐櫃の緒に取付て。歩行。心の中てる悲しけれ。唐櫃を岸の上に昇居て。蓋を開たれば。二人の少き人。顔を差上て。是のあう母御。何くへ行給ふぞ。母御の徒にて歩ませ給ふか。御痛敷候。是に乗せ給へと。何心も無げに戯ければ。母上流るゝ涙を押へて。此河は是極樂浄土の。八功德池とて。少き者の生れて。遊び戯るゝ所なり。我が如く念佛申て。此川の中へ沈れよと教へければ。二人の幼き人々。母と共に手を合せ。念佛高らかに唱て。西に向て坐むけるを。二人の乳母一人づゝ擁抱て碧潭の底へ飛入ければ。母上も續て身を没て。同じ淵に沈れける。其後時治も自害して。一堆の灰と成にけり。隔

生則忘とは申ながら。又一念五百生。繫念無量劫の業あれば。奈利八万の底迄も。同じ思ひの炎と成て。焦れ給らんと哀ありける事共なり

○越中の守護自害の事付怨靈の事

越中の守護名越遠江守時有。舍弟修理亮有公。甥の兵庫助貞持三人は。出羽越後の宮方。北陸道を経て。京都へ責上るべしと聞へしかば。道にて是を支へんとて。越中の二塚と云所に陣を取て。近國の勢共を相催しける。斯る處に。六波羅已に責落されて。後東國にも軍起て已に鎌倉へ寄けるあんど。様々に聞へければ。催促に順て。只今迄馳集りつる。能登越中の兵共。放生津に引退て。却て守護の陣へ押寄んとす企ける。是を見て今迄身に代命に代らんと。義を存じ。忠を致しつる郎従も時の間に落失て。剩へ敵軍に加り。朝に來り暮に往て。交を結び情を深くせし朋友も。忽に心變じて却て害心を挿む。今は残り留りたる者とは三族に遁ざる。一家の輩。重恩を蒙りし。譜代の侍僅に七十九人なり。五月十七日の午刻に。敵已に一万餘騎にて。寄ると聞へしかば。我等此小勢にて。合戦をす共。何程の事をか仕出すべき。恐ある軍して。云甲斐なき敵の手に懸り累継の恥に及ばん事。後代迄の嘲たるべしとて。敵の近付ぬ先に。女姓少き人々をば。舟に乗て沖に沈め。我身は城の内にて自害をせんとぞ出立ける。遠江守

の女房の。僧老の契りを結て今年廿一年に成れば。恩愛の懐の中に。二人の男子を育たり。兄は九つ弟は七つに成ける。修理亮有公が女房の。相馴て。已に三年に餘けるが。徒ならぬ身に成りて。早月比過にけり。兵庫助貞持が女房は。此四五日前に。京より迎たりける上臈女房にて有ける。其昔紅顔翠黛の世に。類ひなき有様風に見初し玉簾の。隙も有ばと心に懸て。三年餘り懸慕しが。兎角方便を廻して偷出して迎へたりける。語ひ得て僅に昨日今日の程あれば逢に替んと歎き來し命も。今は惜れける。懸悲みし月日は。天の羽衣撫盡すらん程よりも長く。相見て後の直は。春の夜の夢よりも尙短し。忽に此悲みに逢ける契の程こそ哀され。未の露本の雫。後れ先立道をころ。悲き物と聞つるに。浪の上烟の底に。沈み焦さん別の憂さ。こはそも如何すべきと。互に名残を惜みつゝ。臥轉て泣れける。去程に。敵の早寄くるやらん。馬烟の東西に揚て見へ候と騒ば。女房。少き人々は。泣々皆舟に取乘て。遙の沖に漕出す。恨しの追風や。暫しも止で行人を。浪路遙に吹送る。情事の引鹽や。立も歸ちで漕舟を。浦より外に誘ふらん。彼松浦佐用姫が。玉島山に領巾麾て。沖行舟を招きしも。今の哀に知れたり。水主權を搔て。船を浪間に差留めれば一人の女房は。二人の子を左右の脇に抱き二人の女房は。手に手を取組て。同く身を予投たりける。紅の衣赤袴の。暫く浪に漂しは吉野立田の河水に。落花紅葉の。

散亂たる如くに見へたる。寄來る浪に紛て。次第に沈むを見果て後。城に残り留たる人々。上下七十九人。同時に腹を掻切て。兵火の底にぞ焼死ける。其亡魂幽靈尙も此地に留て。夫婦執著の妄念を殘しけるにや。近比越後より上る船人。此浦を過けるに。俄に風向ひ浪荒かりける間。錨を下して沖に船を留たるに。夜更浪靜て。松濤の風芦花の月旅泊の跡。万心すこき折節遙の沖に女の聲して。泣悲しむ音しけり。是を怪しと聞居たる處に。又汀の方に。男の聲して。其船爰へ寄てたべと。聲々に呼びける。船人止事を得ずして。舟を港へ寄たれば。最清げ成男三人。あの沖迄。便船申さんどて。屋形にぞ乘たりける。船人是を乗て。沖津鹽合に舟を差留たれば。此三人の男。船より下て。漫々たる浪の上にも立たりける。暫くあれば。年十六七二十計成女房の。色々の衣に赤き袴。踏くみたるが。三人浪底より浮び出て。其事と奇く泣しほれたる様あり。男よに。睡げある氣色にて。相互に寄近付んとする所に。猛火俄に燃出て。炎男女の中を隔ければ。三人の女房は。いもせの山の中々に思焦れたる軀にて。波の底に沈みぬ。男は又泣々浪の上を游歸て。二塚の方へを歩行ける。餘の不思議さに。船人此男の袖を引へて。去にても。誰人にて御渡り候やらんと問たりければ。男答て云。我等の名越遠江守。同修理亮并に兵庫助と。各名乗て。掻消様に失にけり。天竺の術婆伽は后を懸して。思の炎に身を焦し。我朝の宇治の橋姫

は。夫を慕て片敷袖を浪に浸す。是皆上古の不思議。舊記に載る所あり。親子斯る事の。現に見へたりける。亡念の程こそ罪深けれ

○金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事

京洛已に静りぬといへ共。金剛山より引返したる。平氏共猶南都に留て。帝都を責んとする由聞へ有ければ。中院中将定平を大将として。五万餘騎。大和路へ差向らる。楠兵衛正成に畿内の勢二万餘騎を副て。河内國より。擲手に今向りける。南都に引籠る平氏の軍兵已に十方に退散すといへ共。残り留る兵尙五万騎に餘たれば。今一度手痛き合戦有んと覺るに。日比の備勢盡果て。いつまか小水の魚の淡に吻く躰に成て。徒に日を送りける間。先一番に。南都の二の木戸口。般若寺を堅て居たりける。宇都の宮紀清兩黨七百餘騎。繪旨を給て上洛す。是を始として。百騎二百騎五騎十騎。我先にと降参しける間。今は平氏の一族の輩。譜代重恩の族の外は。一人も残り留る者も無りけり。是に付ても今は。何に憑を懸てか命を惜むべきなれば。各討死して。名を後代にこそ残すべかりけるに。實ての業の程の淺遠さは。阿曾彈正少弼時治。大佛右馬助貞直。注馬遠江守。佐介安藝守を始として。宗徒の平氏十三人。并に長崎四郎左衛門尉。二階堂出羽入道々蓋以下。關東權勢の侍五十餘人般若寺にして。各入道出家して律僧の形になり。三衣を

肩に懸。一鉢を手に提て降人に成てぞ出たりける。定平朝臣是を請取て。高手小手に誠。傳馬の鞍坪に縛屈て。數万の官軍の前々を追立させ。白晝に京へを歸られける。平治には。悪源太義平。平家に生捕れて首を刎られ。元暦には。内大臣宗盛公。源氏に囚れて。大略を渡さる。是は皆戦に臨む日或は敵に議れ。或は自害に際ならして。心ならず敵の手に懸りしをだに。今に至る迄。人口の嘲と成て。兩家の末流。是を聞時面を一百餘年の後に恥しむ。況や是は。敵に議れたるにも非ず。又自害に際なきにも非ず。勢ひ未盡ざる先に。自ら黒衣の身と成て。遁ぬ命を捨棄て。縋緘面縛の有様前代未聞の恥辱あり。囚人京都に着ければ。皆黒衣を脱せ。法名を元の名に改めて。一人づゝ大名に預らる。其秋刑を待程に。禁錮の裏に起臥て思運ぬる浮世の中。泪の落ぬ隙も無し。定かならぬ便に付て。鎌倉の事共を聞ば。借老の枕の上に。契を成す貞女もむくつけいなる田舎人共に奪れて。王昭君が恨を貽し。富貴の臺の中に冊立し賢息も傍へたにも寄ざりし。凡下共の奴子と成て黄頭郎が夢をなせり。是等は責て憂あから未生たりと聞ば。猶も思の數ならず。昨日は岐を過。今日は門にやすらふ行客の。穴哀や道路に袖を開け。食を乞し女房の倒れて死せしは誰が母なり。短褐に鏡を篋して。縁を尋し旅人の。捕れて死せしは。誰が親なりと。風に語を聞時は。今迄生ける我身の命を。憂とど更に懸れける。七月九日阿曾彈正少弼。大佛右

馬助。江馬遠江守。佐介安藝守并に長崎四郎左衛門。彼是十五人。阿彌陀が峯にて誅せられけり。此君重祚の後諸事の政未行はれざる先に。刑罰を専にせられん事は。仁政に非ずとて。潜に是を切れしかば。首を渡さるゝ迄の事に及ず。面々の尸骸便宜の寺々に送られ。後世菩提をぞ吊はれける。二階堂出羽入道道蓋は。朝敵の最一武家の補佐たりしか共。賢才の譽。兼てより叙聞に達せしかば。召仕るべしとて。死罪一等を許され懸命の地に安堵して居たりけるが。又隠謀の企有迎。同年の秋の季に。終に死刑に行はれてけり。佐介左京亮貞俊は。平氏の門葉たる上。武略才能共に兼たりしかば。定て一方の大將をもと身を高く思ける處に。相摸入道。さまでの賞。斷も無りければ。恨みを含み。憤りを抱きながら。金剛山の寄手の中にぞ有ける斯る所に。千種頭中將繪旨を申與へて御方に參べき由を仰られければ。去る五月の初に。千劍破より降參して京都に予歴回ける。去程に平氏の一族皆出家して。召人に成し後は。武家被官の者共。悉く所領を召上られ。宿所を追出されて僅なる身一つをだに置兼て。貞俊も阿波國へ流されて有しかば。今は召仕ふ若黨中間も身に添す。昨日の樂。今日の悲と成て。益身を賣る躰に成行ければ。盛者必衰の理りの中に在ながら。今更世中情なく覺て。如何成山の奥にも。身を隠さばやと。心にあらまされて予居たりける。扱も關東の様何とか成ぬらんと尋問に。相摸入道殿を始として。

一族以下一人も残らず。皆討れ給て。妻子從類も。共に行方を知す成ぬと聞へければ。今は誰を憑み。何を待べき世共覺へず。見るに付。聞に隨て。最ど心を摧き魂を消ける處に。關東奉公の者共は。一旦命を扶からん爲に。降人に出どいへ共。遂には如何にも。野心有ぬべければ。悉く誅せらるべし迎貞俊又召捕れてけり。挺も心の留る浮世ならねば。命を惜とは思はね共。故郷に捨置し妻子共の行末何共聞かて死なんずる事の。餘りに心に懸りければ。最期の十念勸ける。聖に付て。年比身を放たざりける。腰の刀を預り人の許より乞出して。故郷の妻子の許へ送りける。聖是を請取て。其行末を尋申べしと領狀しければ。貞俊限り無く喜て。敷皮の上に居直て。一首の歌を詠じ。十念高らかに唱て。閑に首をぞ打せける

皆人の世に有時は數からで憂は泄ぬ我身なりけり

聖形見の刀と。貞俊が最後の時着たりける。小袖とを持て。急ぎ鎌倉へ下。彼女房を尋出し是を與へければ。妻室聞も敢ず。只涙の床に伏沈て。悲に堪兼たる氣色に見へけるが。側成視を引寄て。形見の小袖の妻に

誰見よと信を人の留けん堪て有べき命ならぬに
と誓付。形見の小袖を引被。其刀を胸に突立て。忽に墓なく成にけり。此外或は借老の契空しく

て。夫に別たる妻室は。苟も二夫に嫁せん事を悲で。深き淵瀕に身を投。或は口養の扶なうして。子に後れたる老母は僅に一日の餐を求。兼て自ら溝壑に倒れ伏。承久より以來平氏世を取て九代。曆數已に百六十餘年に及ぬれば。一類天下に蔓て。威を振ひ。勢ひを專にせる所々の探題國々の守護。其名を擧て。天下に有者已に八百人に餘りぬ。況や其家々の郎従たる者幾万億と云數を。知す。されば縱六波羅こそ輒く責落さるゝ共。筑紫と鎌倉をば。十年廿年にも。退治せらるゝ事難しどころ覺じに。六十餘州悉く割符を合たる如く。同時に軍起て。纔に四十三日の中に。皆滅びぬる。業報の程ころ不思議なれ。愚なる哉關東の勇士久しく天下を保。威を普く海内に覆ひしか共。國を治る心なかりしかば。堅甲利兵徒に。挺楚の爲に推かれて。滅亡を瞬目の中を得たる事。駭れる者は失し。儉ある者は存す。古より今に至る迄是あり。此裏に向て頭を廻らす人。天道は盈るを缺事を知すして。猶人の欲心の厭事あきに溺る。豈迷はざらんや

御太平記卷之十一終

御太平記卷之十二

○公家一統政道の事

先帝重祚の後。正慶の年號は。廢帝の改元なればとて。これを棄られ。本の元弘に歸さる其二年の夏の比。天下一時に評定して。賞罰法令悉く。公家一統の政に出しかば。群俗風に歸る事霜を抜て。春日に照すが如く。中華軌を恐るゝ事。刃を履で雷霆を戴が如し。同年の六月三日。大塔宮。志貴の毘沙門堂に御座有と聞へしかば。畿内近國の勢は申に及ばず。京中遠國の兵迄も。人より先にと馳參ける間。其勢頗る。天下の大半を。盡しぬらんと夥し同十三日に御入浴有べしと定られたりしが。其事とあく延引有て。諸國の兵と召れ楯を矧せ鐵を砥せ。合戦の御用意有と聞しかば。誰が身の上とは知ね共。京中の武士の心中。更に穩か成らず。之に依て。主上右太辨の宰相清忠を。勅使にて仰られけるは。天下已に鎮て。七徳の餘威を偃し。九劫の大化をあす處に。猶干戈を動し。士卒を集めらるゝの條。其要何事や。次に四海騒亂の程は。敵の難を遁れんが爲に。一旦其姿を。俗跡に替らるゝとす共。世已に靜謐の上は。急ぎ剃髮染衣の姿に歸し。門跡相承の業を。事とし給ふべしとす。仰られける宮清忠を御前近く召れ。勅答申させ給けるは今四海一時に定て。萬民無事の化に誇る事。陛下休明の徳により。微臣籌策の

功による。然るに足利治部太輔高氏。僅に一戦の功を以て。其志を萬人の上に立んと欲す。今若其勢の。微成に乘じて是を討すんば。高時法師が逆悪を取て。高氏が威勢の止に加る者成べし。此故に兵を擧武を備ふ。全く臣が罪に非ず次に剃髮の事。兆前に機を懸ざる者。定て舌を翻さんか。今逆徒測るに亡て。天下無事に属すといへ共。餘黨猶身を隠し。隙を伺ひ。時を待すと云事有べからず。此時上威嚴あくんば下必ず暴慢の心有べし。されば文武の二道同く立て。治るべきは今の世なり。我もし剃髮染衣の跡に歸して。虎賁猛將の威を捨ば。武に於て朝家を全せん人誰ぞや。夫諸佛菩薩利生方便を垂る日攝受折伏の二門あり。其攝受とは。柔和忍辱の貌を成し。慈悲を先とす。折伏とは大勢忿怒の形を現じて。刑罰を宗とす。況や聖明の君。賢佐武備の才を求る時。或は出塵の輩を俗跡に歸し。或は浪跡の主を帝位に即奉る。和漢其例多し。所謂買島浪仙は釋門より出て。朝廷の臣と成。我朝の天武孝謙は。法跡を替て重祚の位に登。抑我台嶺の幽溪に栖で僅に一門跡を守ると。幕府の上將に居して。遠く一天下を靜ると。國家の用何れをか吉とせん。此兩篇速に勅許を下さるゝ様に。奏聞を経べしと仰られ。則清忠を返されける。清忠卿歸參して此由を奏聞しければ。主上具に聞召れ。大樹の位に居して。武備の守りを全せん事に。實も朝家の爲に人の嘲を忘たるに似たり。尊氏誅伐の事。彼不忠何事ぞや。太平の後。天

下の士卒猶恐懼の心を抱く。若罪なうして罰を行は。諸卒豈安堵の思をささんや。然らば大樹の任に於ては。仔細有べからず。尊氏誅罰の事に至ては堅く其企を留むべしと。聖斷有て。征夷將軍の宣旨を成さる。是に由て宮の御儀りも散じけるにや。六月十七日。志貴を御立有て。八幡に七日御逗留有て。同廿三日御入洛有其行列行粧。天下の壯觀を盡せり。先一番には赤松入道圓心。千餘騎にて先陣を仕る。二番に殿法印良忠七百餘騎にて打。三番には四條少將隆資。五百餘騎四番には中院中將定平八百餘騎にて打る。其次に花やかに鎧たる兵。五百人勝て帶刀にて二行に歩せらる。其次に。宮の赤地の錦の鎧直垂に。緋威の鎧の裾金物に。牡丹の陰に。獅子の戲て前後左右に追合たるを。草摺長に召れ。兵庫鎖の丸鞘の太刀に。虎の皮の尻鞘懸たるを。太刀懸の中に結で下げ。白篋に節陰計少し塗て。鶴の羽を以て矧たる征矢の。卅六差たるを。箭高に負なし。二所藤の弓の銀のつく打たるを。十文字に握て。白瓦毛なる馬の。尾髪飽迄足て。太逞きに。沃懸地の鞍置て。厚總の鞍の。只今染出たる如くなるを。芝打長に懸なし。侍十二人に雙口をさせ。千鳥足を踏て。小路を狹しと歩せらる。後乗には。千種頭中將忠顯朝臣千餘騎にて供奉せらる。猶も御用心の最中なれば。御心安き兵を以て。非常を誠らるべしとて。國々の兵をば。混物具にて三千餘騎。閑に小路を打せらる其後陣には。湯淺權太夫。山本四郎次

郎忠行。伊東三郎行高。加藤太郎光直。畿内近國の勢打込に。廿万七千餘騎。三日支て打たりける。時移り事去て。万昔に替る世なれ共。天台座主忽に。將軍の宣言を蒙り。甲冑を帶し隨兵を召具し。御入浴有し分野は。珍しかりし壯觀なり。其後妙法院の宮は。四國の勢を召具せられ。讃岐國より御上洛あり。万里小路中納言藤房卿は。預人小田民部太輔相具して。常陸國より上洛せらる。東宮太進季房は。配所にて身罷にければ。父宣房卿。悦の中の悲み。老後の涙袖に滿。法勝寺の圓觀上人をば。預人結城上野入道具足し率り。上洛したりければ。君法跡の恙なき事。悦思召て。頓て結城に。本領安堵の給旨を成下さる文觀上人の。硫黃島より上洛し。忠圓僧正の。越後國より歸洛せらる。總じて此君。笠置へ落させ給し刻み。解官停任せられし人々。死罪流刑に逢し。其子孫。此後より召出され。一時に整懷を開けり。されば日比武威に誇り。本所を無せし。權門高家の武士共。いつしか諸庭の奉公人となり。或ハ輕軒香車の後に走。或ハ青侍格勅の前に跪く。世の盛衰時の轉變歎に叶はぬ習と知ながら。今の如くにて。公家一統の天下あらば。諸國の地頭御家人は。皆奴婢雜人の如くにて有べし哀如何成不思議も出來て。武家四海の權を執世の中に又なれかしと。思ふ人のみ多かりけり。同八月三日より。軍勢恩賞の沙汰有べしとて。洞院左衛門督實世卿を。上卿に定らる之に依て諸國の軍勢軍忠の支證を立申狀を捧て。恩

賞を望む。幾千萬と云數を知らず。誠に忠有者は功を憑で。諛す。忠なき者は。奥に媚。寵に求て。上聞を掠し間數月の内に。僅に卅四人の恩賞を。沙汰せられたりけれ共。事正路に非ずとて。頓て召返されけり。さらば上卿を改めよとて。万里小路中納言藤房卿を上卿になされ。申狀を付渡さる。藤房是を請取。忠否を糺し。淺深を分ち。各申與へんとし給ける處に。内奏秘計に依て。只今迄は朝敵成つる者も。安堵を給り。更に忠なき輩も。五箇所十箇所の所領を給ける間。藤房諫言を納兼て。病と稱して奉行を辭せらる。斯て黙止べきに非ずとて。九條の民部卿を上卿に定て。御沙汰有ける間。光經卿。諸大將に其手の忠否を委細に尋究て。申與へんとし給ける處に。相摸入道の一跡をば。内裏の供御料所に置く。舍弟四郎左近太夫入道の跡をば。兵部卿親王へ進せらる。大佛陸奥守の跡をば。准后の御領に成さる。此外相州の一族。關東家風の輩。が所領をば。差る事も無き。野曲妓女の輩。蹴鞠伎藝の者共。乃至衛府諸士。官女官僧迄。一跡二跡を合て。内奏より申給ければ。今ハ六十六箇國の内には。雖を立るの地も。軍勢に行はるべき關所は無かりけり。斯りければ。光經卿も。心計ハ無偏の恩化を。申沙汰せんと。欲し給けれ共。叶はで年月を不送られける。又雜訴の沙汰の爲にとて。郁芳門の左右の脇に決斷所を造らる。其議定の人数には。才學優長の卿相雲客。紀傳明法外記官人を三番に分て。一月に六箇度の。沙汰の日を

予定られける。凡事の躰。嚴重に見へて堂々たり。去共是を理世安國の政に非ざりけり。或は内奏より訴人勅許を蒙れば。決斷所にて論人に理を付られ又決斷所にて。本主安堵を給れば。内奏より其地を別人の恩賞に行はる。此くの如く互に錯亂せし間。所領一所に。四五人の給生付て。國々の動亂更に休時あり。去七月の初より。中宮御心地煩はせ給けるが。八月二日に懸せ給ふ。是のみならず。十一月三日。春宮崩御成にけり。是徒事に非ず。亡卒怨靈共の所爲成べしとて。其怨害を止。善所に赴しめんが爲四箇の大寺に仰て。大藏經五千三百卷を。一日の中に書寫され。法勝寺にて。則供養を遂られけり

○大内裏造營事付聖廟の御事

翌年正月十二日。諸卿議奏して曰帝王の業。万機事繁して。百司位を誤る。今の鳳闕僅方四町の内あれば。分内狹して。禮儀を調るに所あり。四方へ一町づつ廣られ。殿を立宮を造らる。是猶古への皇居に及ねばとて。大内裏造らるべしとて。安藝周防を料國に寄られ。日本國の。地頭御家人の所領の得分。廿分一を懸召る。抑大内裏と申は。秦の始皇帝の都。咸陽宮の一殿を模して作られたれば。南北三十六町。東西廿町の外。龍尾の置石を居て。四方に十二の門を立られたり。東には陽明待賢都芳門南には。美福朱雀皇嘉門。西には。談天草壁殿富門。北には安嘉偉堂

達智門。此外上東上西の二門に至る迄。交戟の衛士を守り。長時に非常を識たり。三十六の後宮には。三千の淑女粧を飾。七十三の前殿には。文武の百司詔を待。紫宸殿の東西に清涼殿温明殿。北に當て。常寧殿貞觀殿貞觀殿と申は。后町の北の。御置殿あり。校書殿と號せしは。清涼殿の南の弓場殿なり。昭陽舎の梨窟。淑景舎は桐窟。飛香舎は藤窟。凝花舎は梅坪。龍芳舎と申り。雷鳴の坪の事なり。萩の戸。陣の座。瀧口の戸。鳥の曹司繼殿。兵衛の陣。左は宣陽門。右は陰明門。日花月花の兩門は。陣の座の左右に對へり。大極殿小安殿。蒼龍樓。白虎樓。豐樂院。清暑堂。五節の宴水大管衛は。此所にて行はる。中和院は中院。内教坊は雅樂所あり。御修法は眞言院。神今食は神嘉殿。眞弓競馬をば。武徳殿にして御覽せらる。朝堂院と申は八省の諸寮是なり。右近の陣の橋は。昔を忍ぶ香を留め。御階に滋る竹の臺。幾世の霜を重ぬらん。在原中將の。弓胡箆を身に添て。雷鳴騒ぐ終夜。あばらなる屋に居たりしは。官の廳の八神殿。光源氏の大將の如物も無しと詠じつ。臘月夜に軻しは弘徽殿の細殿。江相公の古へ。越路の國へ下しに。旅の別を悲しみて。後會期遙なり纏を鴻臚の曉の泪に濡す。長篇の序に書たりしは。羅生門の南成。鴻臚館の名残なり。鬼の間直盧鈴の繩。荒海の障子をば清涼殿に立られ。賢聖の障子をば紫宸殿に立られける。東の一の間には。馬周房玄齡杜如晦魏徵二の間には。諸葛亮

遠伯玉張子房。第五倫。三の間には。管仲鄧禹。子産。蕭何。四の間には。伊尹傅説。太公望。仲山甫。西の二の間には。李勣。虞世南。杜預。張華。二の間に。羊祐。楊雄。陣寔。班固。三の間には。桓榮。鄭玄。蘇武。倪寬。四の間には。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通也。書圖の金岡が筆蹟の詞は。小野道風が。書たりけるとぞ承はる。鳳の豊は天に翔り。虹の梁雲に聳差し。もいみじく。造り双べられたりし大内裏。天災を消に便りなく。回祿度々に及で。今は昔の礎のみ残り。回祿の由を尋るに。彼唐堯虞舜の君は。支那四百餘州の主として。其徳天地に應ぜしか共茅茨剪す。柴椽削すと社申傳たれ矧や粟散國の主として。此大内裏を造られたる事。其徳相應すべからず。後王若無徳にして。居安からしめんと欲し給は。國の財力も。是に依て盡べしと。高野大師是を鑑。門々の額を書せ給けるに大極殿の大の字の。中を引切て。火と云字に成し。朱雀門の朱の字を。米と云字に遊しける小野道風是を見で。大極殿を火極殿。朱雀門の朱雀門とぞ難じたりける大極の聖者。未來を鑑て書給へる事を。凡俗として。難じ申たりける罰にや。その後より道風筆を執ば。手職て文字正しからざれ共。草書に妙を得たる人あれば。戦て書けるも頓筆勢にぞ成にける。遂に大極殿より火出て。諸司入省。悉く焼にけり。程なく又造營有しを。北野天神の御眷屬。火雷氣毒神。清涼殿の坤の柱に落懸り給し時焼けるとぞ承は

る。抑彼天満天神と申は。風月の本主。文道の大祖たり。天に御座ては。日月に光を顯じ。國土を照し。地に天降ては。鹽梅の臣と成て。群生を利し給。其始を申せば。菅原宰相是善卿の南庭に。五六歳計成。小兒の。容顔美麗あるが。前裁の花を詠じて。只一人立給へり。菅相公怪しと見給て。君は何れの處の人。誰が家の男にて御座すと問給に。我は父も無く母も無し。願くば相公を親とせんと。思侍るなりと仰られければ。相公嬉しく思召て。手でから昇懷奉り。鴛鴦の裳の下に恩愛の養育を事として。生青奉り。御名をば菅丞相とぞ申ける。未習すして道を悟。御才學世に又類も非と見へ給しかば。十一歳に成せ給し時。父菅相公御髪を搔撫て。若詩や作り給べさと問進せ給ければ。少も案じたる御氣色もなくて

月輝如晴雪
 可憐金鏡轉

梅花似照星
 庭上玉芳馨

と寒夜の即事を言明かに。五言の絶句にぞ作せ給ける其より後。詩は盛唐の波瀾を捲て。七歩の才に先達ち。文は漢魏の芳潤に漱て万巻の書を讀し給しかば。貞觀十二年三月廿三日。對策及第して。自ら詞場に桂を折給ふ。其年の春。都長香の家に人集て弓を射る所へ菅丞相おしたり。都長香此公は何とぞく學窓に螢を聚稽古に隙なき人なれば。弓の本末をも知給はじ。的を

射させ奉り。笑ばやと思て。的矢に弓を取添て。菅丞相の御前に。閏春の始にて候に。一度遊し候へとす請れける。菅丞相差しも辭退し給はず。番の相手に立合て。雪の如く成崩を押祖ぎ。打上て引下すより。暫くしほりて堅たる體切て放したる矢色。弦音弓倒じ。五善何も逞く勢有て。矢所一寸ものかず。五度の十をし給ければ。都良香感に堪兼て自ら下て御手を引。酒宴數刻に及び様々の引出物をぞ進られける。同年の二月廿六日に。延喜帝未春宮にて御座有けるが。菅丞相を召れて。漢朝の李膺は。一夜に百首の詩を作りけると見へたり。汝盍其才に如ざる。一時に十首の詩を作て天覽に備べしと仰下されければ。則十の題を給て。半時計に。十首の詩を不作せ給けると

送春不用動舟車
若使韶光知我意

唯別殘鶯與落花
今宵旅宿在詩家

云暮春の詩も。其十首の絶句の内なるべし。才賢の譽仁義の道。一つとして缺たる所あし君は三皇五帝の徳に歸し。世は周公孔子の治に均き事。只此人に有と。君限り無く賞し思召ければ。寛平九年六月に。中納言より。大納言に上り。頼て大將に成給ふ。同年十月に。延喜帝御位に即給し後は。万機の政併ら。幕府の上將より出しかば。攝祿の臣も清花の家も。肩を比ぶべ

き人なし。昌泰二年の二月に。大臣の大將に成せ給ふ。此時本院の大臣と申は。大織冠九代の孫。昭宣公第一の男。皇后の御兄。村上天皇の御伯父なり。攝家と云。高貴と云。旁我に等き人非じと思給ける處に。官位祿賞共に。菅丞相に超られ給ければ。御憤り更に休時あく。光卿。定國卿。菅根朝臣と云。内々相計て。陰陽頭を召れ。王城の八方に。人形を埋み。冥衆を祭り。菅丞相を呪咀し給けれ共。天道私あければ。御身に災難來らず。さらば讒を搦て罪科に沈んと思て。本院の大臣時々菅丞相天下の政務に私有て。民の愁を知ず非を以て理とせる由申されければ。帝扱は世を亂し民を害する逆臣にして。非を諫邪を禁る忠臣に非ずと。思召れけるこそ淺猿けれ。誰か知ん偽言を巧にして。實に似たる事を。君を勸て鼻を掩しむ共。君掩事莫れ。君が夫婦をして參商たらしむ。請君峰を撥しむ共。君撥事莫れ。君が母子として豺狼と爲らしむ。差しも陸しかるべき。夫婦父子の中をだに。遠ざくるは讒者の偽なり。況や君臣の間に於てをや。遂に昌泰四年正月廿日。菅丞相。太宰權帥に遷れ。筑紫へ流され給べきに定りにければ左遷の御悲に堪ず。一首の歌に。千般の恨みを述て亭子院へ奉り給

流行我はみくづと成ぬとも君箒と成て留めよ

法皇此歌を御覽して。御涙御衣を濡しければ。左遷の罪を申宥させ給はんとて。御參内有けれ共。

帝遂に出御なかりければ。法皇御憤を合で空く還御成にけり。其後流刑定て。菅丞相忽に
太宰府へ流されさせ給。御子廿三人の中に。四人は男子にておはせしかば。皆引分て四方の國々
へ流し奉る。第一の姫君一人をば都に留め進せ。残る公達十八人は。泣々都を立離れ。心つくし
に赴せ給ふ。御有様こそ悲しけれ。年久く住馴給し。紅梅殿を立出させ給へば。明方の月幽さ
るに。おり忘れたる梅が香の。御袖に餘たるも。今は。是や古郷の春の形見と思召に。御涙さへ
留らねば

東風吹バ句をよこせ梅花主あしとて春な忘れぞ

と打詠し給て。今夜淀の渡し迄と。追立の官人共に。道を急がれ。御車にぞ召れける。心なき草
木迄も馴し別を悲けるにや。東風吹風の便をして。此梅飛去て。配所の庭にぞ生たりける。さ
れば夢の告有て。折人つらしと惜まれし。宰府の飛梅是あり。去る仁和の比叡州の任に下り給し
には。甘寧錦の纜を解。關の棧。桂の榭。舩を南海の月に敲きしに。昌泰の今配所の道へ赴
せ給には。恩賜の御衣の袖を片敷て。涙の上蓬の底。思を西府の雲に傷しむ。都に留置進せし。
北の御方姫君の御事も。今は昨日を限の別と悲く。知ぬ國々へ流し遣さる。十八人の君達も。さ
こそ思はぬ旅に趣て。身を苦め。心を惱すらめと。一方ならず思召遣に。御涙更に乾間も無け

れば。旅泊の思を述させ給ける詩にも

自從勅使駈將去 父子一時五處離
口不能言眼中血 俯仰天神與地祇

北御方より副られたる。御使の道より歸けるに御文あり

君が住宿の梢を行くも隠るゝ迄に歸り見しかか

心筑紫に生の松。待とはあしに明暮て。配所の西府に著せ給へば。植生の小屋のいふせきに。送
置奉り。都の官人も歸ぬ。都府樓の瓦の色觀音寺の鐘の聲。聞に隨ひ。見るに付ての御悲。此秋
は獨我身の秋とされり。起臥露のどこへはに。古郷を忍ぶ御泪言の葉ごとに繁ければ。さらでも
重濡衣の。袖乾間も無かりけり。扱も無實の讒に由て。配所に遷るゝ恨。骨髓に入て忍び難く思
召ければ。七日の間御身を清め。一卷の告文を遊して。高山に上り。竿の先に付て差上。七日御
足を翹させ給たるに。梵天帝釋も其無實をや憐給けん。黒雲一群天より下降て。此告文を把
て。遙の天にぞ上りける。其後延喜三年二月廿五日。遂に左遷の恨に沈で薨逝し給ぬ。今の安樂
寺を御墓所と定て送置奉る惜哉北關の春の花。流て歸らぬ水に隨ふ事。如何せん。西府の夜の月。
晴すして虚名の雲に入事。されば貴賤涙を滴て世の淳素の化に誇る事を慕ひ。遠近聲を香で。

道漉瀉の俗を踏事を悲めり。同年の夏の末に。延暦寺の第十三の座主。法性坊尊意贈僧正。四明山の上十乗の床の前に。觀月を照し。心水を清め御座けるに。持佛堂の妻戸を。ほどくと敲音しければ。押開て見給に過ぬる春筑紫にて正しく蕪逝し給ぬと聲へし。菅丞相にてぞ御坐ける僧正奇く思して。先此方へ御入候へど。誘引奉り。扱も御事は。過し二月廿五日に。筑紫にて御隱候ぬと慥に承しかば。悲歎の涙を袖に懸て後生菩提の御追善をのみ申居候に。少しも替す元の御形にて。入御候へば。夢幻の間辨へ難こそ覺て候へと申されければ。菅丞相御顔にはらばらと答懸りける御涙を押拭はせ給て。我朝廷の臣と成て。天下を安からしめん爲に。暫く人間に下生する處に君時平公が讒を御許容有て。終に無實の罪に沈られぬる事。嗔患の烟劫火より盛なり。是に由て五盪の形の壞といへ共。一盪の神は。明かにして天に在。今大小の神祇梵天帝釋の四王の許を得。其恨を報せん爲に。九重の帝闕に近付。我につらかりし佞臣讒者と。一々に蹴殺さんと存るなり。其時定て山門に仰て。惣持の法殿を致さるべし。縦ひ勅定有と云共。相搆て參内有べからずと仰られければ。僧正の曰貴方と愚僧と。師資の儀淺からずといへ共。君と臣と。上下の禮尙深し。勅請の旨一往辭し申といへ共。度々に及ば。争か參内仕らで候べきと申されけるに。菅丞相御氣色俄に損じて。御肴に有ける。柘榴を取て嚙碎き。持佛堂の妻戸に颯と吹

懸させ給ければ。柘榴の核猛火と成て。妻戸に燃付けるを。僧正少も騒ず。燃る火に向ひ灑水の印を結べれば。猛火忽に消て。妻戸は半焦たる計あり。此妻戸今に傳て。山門に有とぞ承はる。其後菅丞相。座席を立て天に昇せ給ふと見へければ。颯て雷内裏の上へ鳴落鳴上て。高天も地に落。大地も裂るが如し。一人百官身を締め魂を消給ふ。七日七夜が間。兩暴風烈くして世界闇の如く。洪水家々を漂しければ。京白川の貴賤男女喚ぎ叫ぶ聲叫喚。大叫喚の苦の如し。遂に雷電大内の。清涼殿に落て。大納言清貫卿の表の衣に。火燃付て。伏轉べ共消す。右大辨希世の朝臣は。心剛成人なりければ。縦如何成天雷なり共。王威に摧ざらんやとて。弓に矢を取副て向給へば。五躰すくみて覆に倒にけり。近衛忠包。鬢髮に火付て。燒死ぬ。紀蔭連は煙に咽で絶入にけり。本院大臣。あはや我身に懸る神罰よと思はれければ。玉躰に立副進せ。太刀を抜懸て朝に仕へ給し時も。我に禮を乱し給はず。縦ひ神と成給共。君臣上下の義を。失ひ給はんや。金輪位高うして擁護の神未捨給はず暫く靜て穩かに其徳を施し給へど。理に當て宣ひければ。理にや靜り給けん。時平大臣も蹴殺され給はず。玉躰も恙なく。雷神天に上り給ぬ。去共雨風の降續く事は。尙休す。斯ては世界國土。皆流れ失ぬと見へければ。法威を以て神の怒を宥申さるべしとて。法性坊の贈僧正を召れ。一兩度迄は。辭退申されけるが。勅宣三度に及けれ

ば。力なく下浴し給けるに。鴨川夥しく水増て。舟ならでは道有まじかりけるを。僧正只其車水の中を遣と下知し給ふ。牛飼命に隨て。漲たる川の中へ。車を颯とやり懸たれば。洪水左右へ分れ却て車は陸地を通りけり。僧正參内し給ふより。雨止風靜て。神の怒も忽に。宥り給ぬと見へければ。僧正。叡威に預て。登山し給ふ。山門の効驗。天下の稱讚是に有とぞ聞へし。其後本院大臣病を受。心身鎮に苦み給ふ淨藏貴所を請じ奉り。加持せられけるに。大臣の左右の耳より。小青蛇首を差出して。淨藏貴所に向て。我無實の讒に沈し。恨を散せん爲に。此大臣を取殺さんと思なり。されば祈禱共に以て。驗有べからず。加様に云者とは誰とか知是こと菅丞相の變化の神。天満大自在天神よとぞ示給ける。淨藏貴所。示現の不思議に驚て。暫く加持を止出給ひければ。本院大臣忽に薨じ給ぬ。御息女の女御。御孫の春宮も。臆て隠させ給ぬ。二男八條大將保忠同く重病に沈給けるが。驗者藥師經を讀時。宮毘羅大將と打上て讀けるを。我が首切んと云聲に聞なして。則絶入給けり。三男敦忠中納言も早世しぬ。其人こそあらめ。子孫迄一時に亡給ける。神罰の程こそ恐しけれ。其比延喜帝の御從父兄弟に右大辨公忠と申人。惱事も無くて頓死しけり。三日を経て蘇生給けるが。大息突出て。奏聞すべき事あり。我を扶起て内裏へ參れと宣ければ。子息信明信孝。二人左右の手を扶て參内し給事の故何ぞと御尋有ければ。

公忠わなとくと振て。臣冥官の廳とて。懼しき所に至り候つるが。長一丈餘成人の。衣冠正しきが。金軸の申文を捧て。粟散邊地の主。延喜帝王。時平大臣が讒を信じ罪なき臣を流され候き。其誤り尤重し早く應の御札に記され。阿鼻地獄へ落されべしと申しかば。卅餘人並居給へる冥官大に怒て。時刻を移さず其責に及べしと同じ給しを。座中第二の冥官若年號を改て過を謝する道あらば。如何し候べきと宣しに。座中皆案じ煩たる跡に見へて。其後公忠蘇生仕り候とを奏せられける。君大に驚き思召て頓て。延喜の年號を。延長に改て。菅丞相流罪の宣旨の札を燒捨て官位を元の大臣に歸し。正二位の一階を贈せられけり。其後天慶九年近江國比良の社の禰宜神の良種に託して。大内の北野に。千本の松一夜に生たりしかば。此に社壇を建天満大自在天神と崇奉りけり。御眷屬十六万八千の神。尙も靜り給はざりけるにや。天徳二年より。天元五年に至る迄。廿五年の間に。諸司八省三度迄焼にけり。斯て有べきにあらねば。内裏造營有べし迎息般が斧を運し。新に造立たりける柱に一首の蝕の歌あり

造とも又も焼なん菅原や棟の板間の合ん限りは

此歌に神慮尙も御納受なかりけりと。驚き思召て一條院より。正一位太政大臣の官位を贈らせ給ふ。勅使安樂寺に下て。詔書を讀上げる時。天に聲有て。一首の詩聞へたり

昨爲北闕蒙悲士
生恨死歡其我奈

今作西都雪恥尸
今須望足護皇基

其後よりは。神の嘆も静り。國土も穩なり。偉なる哉本地を尋れば。大慈大悲の觀世音弘誓の海
深うして。群生濟度の船彼岸に至らずと云事なし垂跡を申せば。天滿大自在天神の應化の身。利
物日々に新にして。一來結縁の人。所願心に任せて成就す是を以て。上一人より下萬民に至る
迄渴仰の首を傾すと云人はなし。誠に奇特無双の靈社なり。去程に治曆四年八月十四日。内裏造
營の事始有て。後三條院の御宇。延久四年四月十五日遷幸あり。文人詩を献じ。伶倫樂を奏す。
目出たかりしに。幾程なく。又安元二年に。日吉山王の御祟に由て。大内の諸寮。一字も残らず
燒にし後は。國の力衰て。代々の聖主も。今に至るまで。造營の御沙汰も無かりつるに。今兵
革の後。世未安からず。國費民苦て。馬を花山の陽に歸さず。牛を桃林の野に放さず。大内
裏作らるべきとて。昔より今に至る迄。我朝には未用ざる紙錢を作る諸國の地頭御家人の所領
に課役を懸らる。條神慮にも違ひ。靡誇の端共成ぬと。眉を蹙る智臣も多かりけり

○安鎮國家の法の事付諸大將恩賞の事
元弘三年の春の比。筑紫には。規矩掃部助高政。絲田左近太夫將監貞義と云。平氏の一族出來て前

亡の餘類を集め。所々の逆黨を招で。國を亂らんとす。又河内國の賊徒等。佐々目憲法僧正と云
ける者を取立て。飯盛山に。城郭を不構ける。是のみならず伊豫國には。赤橋駿河守か子息。
駿河太郎重時と云者有て。立烏帽子が峯に城を拵。四邊の庄園を掠領す。此等の凶徒。法威を
武力に加て。退治せずんば。早速に靜謐し難かるべしとて。俄に紫宸殿の皇居に壇を構へ。竹内
慈嚴僧正を召れて。天下安鎮の法をぞ行はれける。此法を行ふ時。甲冑の武士四門を堅て内辨外
辨。近衛階下に陣を張。伶人樂を奏する始武家の輩。南庭の左右に立並て劔を抜。四方を鎮る事
あり。四門の警固には。結城七郎左衛門親光。楠河内守正成。鹽治判官高貞。名和伯耆守長年な
り。南庭の陣には。右は三浦介左は千葉大介貞胤をぞ召れける。此兩人兼ては其役に隨べき由
を。領狀申たりけるが。其期に臨て。千葉は三浦が相手にならん事を嫌ひ。三浦は千葉が。右に
立ん事を怒て。共に出仕を留ければ。天魔の障礙法の會の違亂とぞ成にける。後に思合するに天
下久く無爲成まじき表示なりけり。去共此法の効驗にや。飯盛の城は。正成に攻落され。立烏帽
子の城は。土居得能に賣破られ。筑紫は大伴小貳に打負て。朝敵の首京都に上りしかば。共に大
路を渡され。頼て獄門に懸られけり。東國西國已に靜謐しければ。筑紫より。小貳大伴菊池松浦
の者共大船七百餘艘にて參洛す。新田左馬助。舍弟兵庫助。七千餘騎にて上洛せられ。此外國々

の武士共一人も残らず。上集りける間京白川に充滿して。王城の富貴日來に百倍せり。諸軍勢の恩賞は暫く延引す共。先大功の輩の。抽賞を行はるべしとて。足利治部太輔高氏に。武藏。常陸。下總。三ヶ國。舍弟左馬頭直義に。遠江國。新田左馬助義貞に。上野播磨兩國。子息義顯に。越後國。舍弟兵部少輔義助に。駿河國。楠判官正成に。攝津國河内。名和伯耆守長年に。因幡伯耆兩國を不行はれける。其外公家武家の輩に。二箇國三箇國を給りけるに。指しもの軍忠有し。赤松入道圓心に。佐用庄一所計を行はる。播磨國の守護職をば。程なく召返されけり。されば建武の亂に。圓心俄に心替りして。朝敵と成しも。此恨とぞ聞へし。其外五十餘箇國の守護國司。國々の關所大庄をば。悉く公家披官の人々拜領しける間。陶朱が富貴に誇り。鄭白が衣食に飽り矣。

○千種殿並文觀僧正奢侈事付解脫上人事

中にも千種頭中將忠顯朝臣は。故六條内府有房公の孫にて御坐しか。文字の道をとて家業共嗜るべかりしに。弱冠の比より我道にもあらぬ。空懸犬追物を好み。博奕淫亂を事とせられける間。父有忠卿父子の義を離れ。不孝の由にてぞ置れける。され共此朝臣一時の榮花を開るべき過去の因縁には有けん。主上隱岐國へ御遷幸の時供奉仕て六波羅の討手に。上りたりし忠功に依て。

大國三箇國。關所數十箇所拜領せられたりしかば。朝恩身に餘り。其修り目を驚かせり。其重恩を與たる家人共に。毎日の巡酒を振舞せけるに。堂上に袖を連ぬる諸大夫侍三百人に餘れり。其酒肉珍膳の費へ。一度に万錢も猶足べからず。又數十間の厩を作並て。肉に餘れる馬を。五六十匹立られたり。宴止で興に和する時。數百騎を相隨て。内野北山邊へ打出て。犬を追出し。小鷹狩に日を暮し給ふ。其衣裳は。豹虎の皮を行騰に裁。金襴縷を直垂に縫り。賤が貴服を服。是れを僭上と云。僭上無禮は國の凶賊ありと。孔安國が誠を。恥ざりけるこそ無情けれ。是は責て俗人なれば言に足ず。彼文觀僧正の振舞を。傳へ聞こそ不思議され。適一旦名利の境界を離れ。已に三密瑜伽の道場に入給し。甲斐も無く。只利欲名聞にのみ趣て。更に觀念定坐の勤を忘たるに似り。何の用共なきに。財寶を倉に積貧窮を扶す。傍に武具を集て。士卒を逞しうす。媚を成し交を結ぶ輩には。忠なきに賞を申與へたりける間。文觀僧正の手の者と號して。黨を立臂を張者浴中に充滿して。五六百人に及べり。されば程遠からぬ參内の時も。輿の前後に數百騎の兵打圍で。路次を横行しければ。法衣忽に馬蹄の塵に汚れ。律義空く。人口の讖に落。彼廬山慧遠法師は。一度風塵の界を辭して。寂寞の室に坐し給しより。假にも此山を出じと誓て。十八賢聖を結で。長日に六時禮讚を勤き。大梅の常和尚は。強て世人に住所を知れしと。更に茅

舎を移て。深居に入。山居の風味を詠じて。已熟の印可を得給へり。心有人は。皆古も今も光を頼み跡を消。暮山の雲に伴ひ。一池の蓮を衣として。道を行ひ心を清してこそ。生涯を盡す事成に此僧正は斯の如く。名利の絆に羈れけるも。直事に非ず。何様天魔外道の。其心に依託して。舉動せけるかど覺たり。何を以て之れを言とならば。文治の比洛陽に。一人の沙門あり。其名を解脫上人と号申ける。其母七歳の時。夢中に鈴を呑と見て設たりける子なりければ。直人に非ずとて。三つに成ける時より其身を釋門に入。遂に貴き聖とは成りけるなり。されば慈悲深重にして。三衣の破たる事を悲ます行業不退にして。一鉢の空しき事を愁す。大隱は必しも市朝の内を辭せず。身は五濁の塵に交といへ共。心は三毒の霧に犯れず。縁に任せ歲月を渡り。生を利して山川を抖擻し給けるが。或時伊勢の太神宮に參て。内外宮を巡禮して。潜に自受法樂の法施をぞ奉られける。大方自餘の社には様替て千木も曲す。形祖木も捺す。是正直捨方便の貌を顯せるかど見へ。古松枝を垂れ。老樹葉を敷く。皆下化衆生の相を表すと覺たり。垂跡の方便を聞ば。假に三寶の名を忌に似たりといへ共。内證の深心を思へば。其も尚化俗結縁の理有と覺て。坐ろに感涙袖を濡しければ。日暮けれ共。在家あんどに。立宿るべき心地もし給はず。外宮の御前に通夜念誦して。神路山の松風に眠を覺し御裳溜川の月に心を清して御坐ける所に俄に空播曇り雨

風烈く吹て。雲の上に車を轟し馬を馳る音して。東西より來れり。穴懼しや。是何者やらんと。上人肝を消見給へば。忽然として虚空に玉を瑩き。金を鑲たる。宮殿樓閣出來て。庭上に幔を引。門前に幕を張爰に十方より來る所の車馬の客二三千も有らんと覺るが。左右に居流れて。上座に一人の大人あり。其容甚だ尋常に非ず。長二三十丈も有らんと見上たるに。頭は夜叉の如く。十二の面上に並べり。四十二の手有て左右に相連る。或は日月を握り。或は劍戟を提入龍に予乘たりける。相從ふ所の眷屬共。皆常の人に非ず。八臂六足にして。鐵の楯を挟み。三面に一鉢にして。金の鎧を着せり。座定て後。上座に居たる大人左右に向て申けるは。此比帝釋の軍に打勝て。手に日月を握り。身須彌の嶺に居し。一足に大海を踏といへ共。其眷屬毎日數万人亡ぶ故何事ぞと見れば。南瞻部州扶桑國の洛陽邊に。解脫房と云一人の聖出來て。化導利生する間。法威盛にして。天帝力を得。魔障弱くして。修羅勢ひを失へり。所詮彼が斯く有ん程は。彼等天帝に向て合戦する事叶まじ如何にもして彼が道心を醒し。驕慢懈怠の心を著べしと申ければ。甲の眞向に。第六天の魔王と。金字に銘を打たる者。座中に進出て。彼道心を醒し候はん事は輒かるべきにて候。先後鳥羽の院に。武家を亡さんと思召心を付奉り。六波羅を攻られれば。左京權太夫義時。定て官軍に向て合戦を致べし其時力を義時に加へば。官軍敗北して。後鳥羽の

院遠國へ流され給は。義時天下の成敗を司どり。治天を計ひ申さんに。必ず廣瀨院第二の宮を位に即奉るべし。去程ならば。此解脱房。彼宮の御歸依有聖なれば。官僧に召れ。龍顔に近づき奉り。出仕の儀則を刷べし。是より行業は日々に怠り驕慢は時々に増て。破戒無慚の比丘とならんずる條。仔細有べからず。斯てぞ我等も若干の眷屬を。設べく候と申ければ。二行に並居たる。悪魔外道共。此儀尤然るべく覺候と同一て。各東西に飛去にけり。上人此事を聞給て。是ぞ神明の。我に道心を勸させ給ふ。御利生よと。歡喜の涙を流し。其より頓て京へは歸り給はで。山城國笠置と云深山に。一つの巖屋を卜落葉を擲て。身の上の衣とし。菓を捨て口食として。長く厭離穢土の心を發し。鐵に欣求淨土の勤を專にし給ひける。斯て三四年を過し給ける所に。承久の合戦出來て。義時天下の權を執しかば。後鳥羽の院流されさせ給て。廣瀬の宮。天子の位に即給ける。其時解脱上人。笠置の窟に在と聞召て。官僧に成さんと。度々勅使を下され召ければ共。是ころ第六天の魔王共が云し事よと思はれければ。遂に勅定に隨はず。彌行ひ澄してぞ御在ける。智行。徳開けしかば。頓て此寺の開山と成て。今に佛法弘通の紹隆を殘し給へり。彼を以て是を思ふに。無情かりける文觀上人の行儀哉と。愚蒙の眼を迷せり。遂に幾程なく。建武の亂出來しかば。法流相續の門弟一人もあく孤獨衰窮の身と成。吉野邊に漂泊して。終給ける

とす

○廣有怪鳥を射る事

元弘三年七月に改元有て。建武に移さる。是は後漢の光武。王莽が亂を治て。再漢の世を繼れし佳例なりとて。漢朝の年號を模されけるとかや。今年天下に疫癘有て。病死する者甚多し。是のみならず。其秋の比より。紫宸殿の上に。怪鳥出來て。いつ迄くぞぞ鳴ける。其聲雲に響き。眠を驚す聞人皆忌恐すと云事無し。即諸卿相議して。曰く異國の昔堯の代に十の日出たりしを。羿と云ける者承て。九つの日を射落せり。我朝の古堀河院の御在位の時。變化の物有て。君を惱し奉しをば。前陸奥守義家承て。殿上の下口に候し。二度弦音を鳴して之れを鎮む。又近衛院の御在位の時。鶴と云鳥の雲中に翔て鳴しをば。源三位頼政卿。勅を蒙て射落したりし例あれば。源氏の中に。誰か射候べき者有と尋られければ。射外したらば。生涯の恥辱と思けるにや。我承らんと申者なかりけり。さらば上北面諸庭の侍共の中に。誰か去ぬべき者有と御尋有けるに。二條關白左大臣殿の召仕れ候。隱岐次郎左衛門廣有と申者こそ。其器に堪たる者にて候へと。申されければ。頓て是を召とて。廣有をぞ召れける。廣有勅定を奉て。鈴の間の邊に候けるが。實も此鳥。蚊の睫に巢くらなる蟪蛄の如く。少くて矢にも及はず。虚空の外に翔飛

ば叶まじ。目に見ゆる程の鳥にて矢懸りならんするに。何事有共射外すまじき物と思ければ。一義も申さず畏て領掌す。則下人に持せたる弓と矢とを取寄て。孫廂の陰に立隠れて此鳥の有様を伺見るに。八月十七夜の月殊に晴渡て。虚空清明たるに。大内山の上に黒雲一群懸て。鳥鳴事存なり。鳴時口より火焰を吐かんと覺て聲の内より電して。其光御簾の内へ散徹す。廣有此鳥の在所を能々見課て弓押張弦くひしめして。流鏑矢を差番て。立向へば。主上は南殿に出御成て御覽あり。關白殿下左右の大將。大中納言。八座七辨八省輔。諸家の侍堂上堂下に袖を連ね。文武百官是を見て如何有んずらんと。堅睡を吞で手を握る。廣有已に立向て弓を引んとしけるが。聊思案する様有げにて。流鏑にすげたる狩侯を抜て打捨。二人張り十二束二つ伏。さりと引まぼりて。左右なく之れを放さず。鳥の鳴聲を待たりける。此鳥例より飛下。紫宸殿の上に。廿丈計が程に。鳴ける所を聞清して。弦をと高く。兵ど放つ。鏑紫宸殿の上を鳴響し。雲の間手答して何とは知す。大盤石の落懸るが如く聞へて。仁壽殿の軒の上より。ふたへに竹の臺の前へ落たりける。堂上堂下一同に。あ射たりくと感ずる聲半時計のめりて。且しは云休ざりけり。衛士の司に。松明高く取せて。是を御覽するに。頭は人の如くして。身は蛇の形なり。背の先曲て齒鏑の如く生違ふ。兩の足に長き距有て利事劍の如し。羽崎を延てこれを見れば。長さ

一丈六尺なり。扱も。廣有射ける時。俄に狩侯を抜て捨つるは何ぞと御尋有ければ。廣有畏て。此鳥御殿の上に當て鳴候つる間。仕て候はんずる矢の落候はん時。宮殿の上に立候はんずるが禁忌に狩侯をば抜て捨つるにて候と申ければ。主上彌敷感有て。其夜願て廣有を五位に成され。次の日。因幡國に。大庄二箇所賜てけり。弓矢取身の面目後代迄の名譽なり

○神泉苑の事

兵革の後妖氣猶禍を示す。其禍を銷には。眞言秘密の高驗に如くは無しとて。俄に神泉苑をぞ修造せられける。彼神泉苑と申は。大内始て成し時。周の文玉の靈園に准へ。方八町に築れたりし園囿あり。其後桓武の御代に。始て朱雀門の東西に二つの寺を立らる左をば東寺と名付。右をば西寺と號す。東寺には。高野大師胎藏界七百餘尊を安じ金輪の寶祚を守る。西寺には。南都の守敏僧都。金剛界の五百餘尊を顯して。玉鉢の長久を祈らる。斯し處に。桓武の御宇。延暦廿三年の春の比。弘法大師求法の爲に。御渡唐有ける。其間守敏僧都一人龍顏に近付奉り朝夕加持を致されける。或時帝御手水を召れけるが。氷氷で餘につめたかりける程に。暫とて閣給ひたりけるを。守敏御手水に向て。火の印を結び給ける間。氷水忽に解て。沸湯の如なり。帝御覽せられて餘に不思議に思召れければ。熊火鉢に炭を多くをこせせて。障子を立廻し。火氣を内に籠られ